

二〇二一年合同研究会冊子

河合塾における「予備校文化」とは何だったのか

本冊子について

『河合塾における「予備校文化」とは何だったのか』と題する冊子をお届けします。

河合文化教育研究所（以下、文教研）には、最も古い「経済研究会」（一九八六年）をはじめとして現在二三の研究会があります（巻末133ページ参照）。

これらの研究会は、河合塾講師が主体になって、外部の研究者をも交えながら予備校でしかできない独自の研究を追求することを目指したものです。ここでは、予備校の授業などに直接資するような教科や教育方法に関わる研究会だけでなく、差別やジェンダー問題などの社会的実践的な研究会、若者の心に向き合うドストエフスキイ研究会のような文学・芸術関係の研究会、さらには内藤湖南研究会のように純粋に学問的な研究会まで、幅広い研究会が開催されてきました。

二〇〇三年からは、それぞれの研究会がどのような活動を行っているかを知り、互いの問題意識を共有し合い、それを通して文教研だけでなくその母体の河合塾の文化の奥行きをさらに深めようというところで、当時の文教研所長の丹羽健夫氏の主唱のもと、毎年夏に研究会の主宰者が集まる「合同研究会」なるものが開かれるようになりました。この合同研究会は毎年八月末に開催され、一昨年の二〇二〇年までに一八

回を数えるまでに至りました。しかし、昨年二〇二一年夏は、いわゆる新型コロナウイルスの深刻なパンデミックによって、ついに合同研究会の開催が不可能となってしまいました。

本冊子は、その二〇二二年の合同研究会の代わりに作成したものです。「予備校における本来的教育とは何か」というテーマで、合同研究会に出席予定だった人々に執筆していただきました。このテーマについては、この数年、合同研究会の議論のメインテーマともなり、また明示的にテーマにならない年でもその根底に常に流れていた危機感、すなわち「高大接続改革」などに象徴されるこの国の新自由主義的教育改革（この背後には、東西冷戦崩壊後に世界を席卷したグローバリゼーション⇨新自由主義市場経済の大きな影響があるわけですが）への危機感をもとに設定されたものです。

今回さまざまなベクトルを持つ二三篇の文章を収録させていただくことになりましたが、その全体から、「文化の河合塾」と称された河合塾という独自の予備校の存在の意味、そしてこの時代におけるその現在地がそれなりに検証されることになったのではないかと思います。

目次

本冊子について 3

I 予備校河合塾の教育のいま——二〇二〇年合同研究会報告より

文教研と研究会、そして予備校河合塾の「教育」

青木和子 8

II 新自由主義的教育改革下の予備校と大学

予備校の社会的意義と市場縮減下の今後をめぐって

大学の変貌——アカデミック・キャピタリズムを超えて

菅 孝行 20
野家啓一 26

III 予備校という独自の教育空間で

予備校空間におけるドストエフスキー——若者たちに託す夢

批判勢力としての存在価値

「予備校」、その不可思議なる存在の行方

予備校における本来的教育とは何か

問を立てる

芦川進一 36
里中哲彦 41
新井勝憲 44
大竹眞一 47
公文宏和 53

河合塾と私

河合塾の果たすべき役割について

〈コラム〉「予備校文化」の三大特徴（牧野剛） 64

汝からキミへ——塾訓とキャッチフレーズから考える

孤独が基本

予備校における教育とは

受験と教育

「もう一つの教育」から見えて来ること——エンリッチ講座の場合

IV 自己教育という現場

「あの人」のことなど

〈コラム〉教育—反教育の境界線上で考えること（小林一路） 94

綺想の教育学——試論

私の教育体験談

V 研究会の地平

数学の視覚化から概念の意味へ

中田勝也 56

福永就夫 60

小林貞弘 68

柳原慎也 72

松尾敏之 76

吉田理恵 80

相京範昭 84

原田伸雄 90

天津孔雀 96

南博 99

福島一洋 104

〈コラム〉「日本近代・思想史研究会」の紹介（茅嶋洋一）

107

「これがあるだ」をどう築くか

「受験産業」としての河合塾からの離陸テイクオフ

——河合文化教育研究所の存在と二〇世紀国際政治史研究会

予備校における初等教育

内藤湖南における中国の「近代」観についての小論

あとがき——あえて河合塾の「予備校文化」を問い直す

研究会一覧

133

これまでの合同研究会プログラム

134

岡 文子

109

細井 保

113

熊崎智子

117

山田伸吾

119

加藤万里

127

I
予備校河合塾の教育のいま——二〇二〇年合同研究会報告より

文教研と研究会、そして予備校河合塾の「教育」

女性論男性論研究会 青木和子

〈本稿執筆の経緯〉

本稿は、二〇二〇年八月に開催された第十八回文教研合同研究会で話した基調報告をもとに、その時のレジュメの内容も出来るだけ盛り込んで修整・加筆したものである。

この合同研究会の基調報告を引き受けるきっかけとなったのは、文教研と研究会に対する危機意識であった。経営陣が変わり、文教研や研究会の存在すらも知らない職員や講師が増えるなかで、目に見える収益を生まない文教研・研究会といった組織の存在価値を疑問視する風潮が蔓延してきている。文教研の「文化」や「教育」は、その先鋭的な活動によって「河合塾のブランド」＝「文化の河合塾」「教育の河合

塾」の質を際立たせることが本来の使命である。それは、長期的で将来的な付加価値を河合塾本体に付与するものである。目に見える収益とは異なる、こうしたブランド力という抽象的「価値」を理解できない人々が増えてきている。このような現状を見たとき、このままでは文教研は自然消滅の道を辿らされるのではないか、その事を文教研を支えるべき研究会の方々は認識しているのか、この私の危機意識を合同研究会で問うてみたいと思った。

本報告は、こうした私の危機意識を前提に、文教研と研究会を繋ぐキーワードとなる「教育」、それも予備校河合塾の「教育」とは何かを考えることを通じて文教研や研究会活動の意味を考えようとしたものである。

1 今回の合同研究会にあたって

——文教研と研究会に対する危機意識

今回の合同研究会の報告は、現在そして今後の文教研と研究会に対しての私自身の持つ危機意識が出発点となっており、その危機意識を今日集まれた研究会の方々と是非とも共有したいと思い、本日の報告をさせて頂くことになった。

ここ八年間で文教研は谷川道雄先生・中川久定先生・長野敬先生、さらに牧野剛先生、そして丹羽健夫さんと茅嶋洋一先生を失った。なかでも、文教研を構想・創設し、その活動を支えてこられた牧野・丹羽・茅嶋先生を失ったことは、文教研にとって大きなダメージとなった。こうした中で、私自身の危機意識が強くなってきたが、それは文教研のオーナーである河合塾をめぐる状況が大きく変化したこととも関連する。浪人市場の縮減と現役生市場進出の伸び悩み、企業効率を優先する組織改編の進行とそれにとりまなう講師・職員ら組織構成員の気質の変化、というより効率と成果主義の企業論理を相対化することもなく呑み込まれていく教職員（それを私は「劣化」という）など。こうした河合塾の変化は、文教研を支える教職員の層の薄さをもたらし、文教研の主軸となる主任研究員（終身）の新規採

用を見送り続けるという状況を招いてきた。こうした中で、文教研本体そして研究会・研究会活動もその立ち位置、存在意義をもう一回きちんと検証しておかないと、なし崩し的に状況に呑み込まれてしまうのではないかと、というのが私の危機感である。このままいくと文教研は自然消滅の道を辿らされるのではないか。本体の文教研がなくなるということは、当然、研究会そのものがなくなるということでもある。

そういった危機意識を前提に、もう一度、原点にもどり、研究会を立ち上げたときの趣旨はそもそも何であったのか、研究会の活動は文教研もしくは河合塾とどう関わり、既存の文化・教育とどう切り結んでいこうとしていたのか、そしてそれはどういう意味を持っていたのか。そのことは、当然、研究会メンバーである自分自身にとってどういう意味を持つのかを不断に問い続けることでもあるのだが、そのあたりのことを現在の状況の中で今一度捉え直し、検証することを通じて、今後の文教研そして研究会・研究会活動がどうあるべきかを考えておく必要があると思った。

2 新自由主義教育の展開と予備校

その問題を考えていく前提として、まず状況の枠組みか

ら考えていきたい。

新自由主義教育とは、公教育に新自由主義経済の手法を持ち込み、つまり公教育の場に市場原理を持ち込み「教育の市場化」を促進していくことだが、受験産業の予備校はもともと市場原理を前提に成立している業界である。公教育の場に市場原理が持ち込まれたことによる高校での「教育」の変化、直截にいうと「高校の予備校化」を踏まえて、予備校の「教育」というものをもう一度捉え直す必要があると思う。そして、こうした流れのなかで予備校の「教育」とは何かを考えることを通じて、文教研や研究会の立ち位置・存在意義を再度考えていく機会にしたい。

ここでは新自由主義教育の流れをアウトラインだけ押さえておきたい。

一九八〇年代、ここから「小さな政府・民営化・規制緩和」を標榜する新自由主義的改革手法が世界的に出現する。日本では八〇年代半ばの中曽根康弘政権のもとで行政改革が始まっていく。その一環として新自由主義的教育プログラムが始動する。八七年の臨教審第四次答申で「教育の自由化」をめぐる論争もあるが、基本的に臨教審で出てきたのは、教育を活性化させるために規制緩和をやる、つまり教育を公共部門から解放して自由化し、競争原理に委ねるということである。この時期、中曽根が駿台を視察

したという報道も流れたが、「自由」な「競争原理」に買われた「教育」産業の実情視察だったのかもしれない。

なおこの時期、十八歳人口の急上昇を背景に河合塾は全国展開を果たし、続く九〇年代には量的拡大から質的充実へと舵を切っていく。その象徴として、一九八四年に文教研が設立された。

一九九〇年代に「ゆとり教育」の動きが出てくる。九一年にソ連邦が解体し、「冷戦の終焉」を機にグローバルゼーションが急展開する。そしてこの時期が日本の第二次ベビーブームに重なる。当時の十八歳人口が約二〇〇万、九二年には約二〇五万人となり、予備校業界の市場が拡大していく。そのなかで「ゆとり教育」が本格化し、これと平行して教育の市場化が推進され、その結果、学校間格差・生徒間格差が拡大して現場の混乱・教員の疲弊に拍車がかかる。寺脇研氏ら当時の文部官僚が目指した「ゆとり教育」の根本理念は「個性重視の原則」ということで、キーワードの「生きる力」を育むという理念そのものは真つ当ただと思うが、結局、九九年の学習指導要領全面改定で「(公)教育の場」に持ち込まれたのは、経済という全く別のファクターであり、「自由」競争を煽る「教育の市場化」ということであった。

二〇〇〇年代に新自由主義改革が加速され、排外的ナ

シヨナリズムが高まっていく。この段階で小泉純一郎政権が「聖域なき改革」を唱えて、福祉や医療、そして教育関連の経費をどんどん削減していき、大学は独立法人化されることになる。その中で十八歳人口は、二〇〇〇年に約一五〇万、二〇一〇年には約一二〇万、二〇二〇年の現在は約一一七万人に減少する。このあともう少し下がってその後は横ばいになっていくのだが、この間の十八歳人口は、ピーク時のほぼ半分くらいまで減っている。予備校業界の市場縮減である。

この二〇〇〇年代で一番気になるのは、〇六年に第一次安倍晋三内閣が手つけた教育基本法の改悪で、ここで新自由主義と新国家主義がセットで出される。そして、改正教育基本法第十七条を踏まえて出てきたのが、学校を企業と捉え企業経営のマネージメント手法（PDCA——企業の品質管理の考え方——）を導入することと、学校に対する規制・管理の強化である。「ゆとり教育」に関しては〇八年の学習指導要領改定で見直しをやるのだが、授業時間数の増加などを含むものの、看板の付け替えだけで中身はあまり変わっていない。そして、復活した第二次安倍内閣で一三年に私的諮問機関である教育再生実行会議を設置し、一番やりたかった「道徳」の教科化の道筋をつくる。さらに、一四年の中教審答申で「新しい時代にふさわしい

高大接続の実現にむけた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革」が打ち出される。この「高大接続」は、高校から大学への連続性が想定されたもので、大学入試を変えることで高校教育を変えようとするものであるが、そもそも準義務教育化した高校教育と大学における専門教育は教育の目的・内容も質的に異なる。この質の異なる二つをどう接続するのかこそが「高大接続」の最大の課題なのに、大学入試を変えることで高校教育を変えられるとする発想そのものが間違っている。また、現在、高校生の四年制大学への進学率は五〇%台なので、大学入試により高校教育を変えようということは、受験しない半数の高校生は関係ないという排除の構造を教育現場につくりだすことになる。その辺りの想像力の欠如こそが問題なのだと思う。

二〇一八年に高校の学習指導要領が公表され、二二年度から年次進行で実施ということになった。これは抜本的改革ということで、確かに、いままでの学習指導要領とは科目の枠組みから変えられているが、その教科の内容についての精査・検証が現実的な課題となっている。新指導要領の目標は「基礎的知識、技能」を習得させて、これらを活用して課題を解決させるために必要な「思考力・判断力・表現力など」をはぐくむという、より具体的な「新し

い学力観」を規定したものとされている。しかし、この「学力の三要素」は別に新しいものではなく、実は「ゆとり教育」の段階から出されているものと変わらないし、教育基本法を改悪した際にもこの「学力の三要素」を規定している。そもそも「学力の三要素」を法律で規定することやこれをそのまま学校教育や大学入試に適用することの是非について、根底から問うべきなのだと思う。また、従来の「伝統的な学力」、すなわち「基礎的な知識、技能」では得られなかった「問題解決型学力」（状況の変化に対応する知の適応力）を「思考力、判断力、表現力」をばぐくむ

ことで身につけさせるのが目標だというのが、考えてみると、基礎的な力が身につけていない生徒が、主体的、対話的学習、つまり自発性やプレゼンテーションを重んじる学習（いわゆるアクティブ・ラーニング）に転じても、この激変する社会の中で経験したことのない問題、未知の問題に出会った場合、これを解決する能力というのはそう簡単にはばぐくまれるものではない。それに、「思考力、判断力、表現力」の涵養は現行の教育課程でも実践されているし、従来からの二次試験で課される「論述問題」などで要求されているのは基礎的知識を前提としたこれらの学力に他ならない。

浪人市場の大幅縮減を背景に、河合塾では二〇一〇年代

から主軸であった大学受験科を中心に設置コマ数の削減、それと連動する講師評価の支持率偏重、教材関係の大幅な経費節減などが進められ、一方、これと平行して関連株式会社の設定が相次いだ。河合塾の求める講師の授業が「商品」としてのそれに一気に傾斜していく中で、講師たちの分断と孤立が深まっていった。そして、共通テストや新課程への対応が現実の課題となると、職人的な「プロジェクト能力」なるものが偏重され、ますます講師の分断・孤立化が進行してきている。

3 予備校の「教育」とは何か

現在、前述のとおり、公教育の場が新自由主義的改革に翻弄され、なおかつ十八歳人口が激減する中で、そもそも予備校の「教育」とは何か、何であったのかということ意識的に問い直しておく必要があると思う。勿論、予備校は受験産業である。従って、講師の授業、入試に関連する各種の情報、そして模擬テストなどを商品として提供し、消費者である生徒や保護者、もしくは情報を必要とする高校や大学が、それらの商品を評価するという市場原理に貫かれた業界である。一方で、予備校というのは公教育の制度外にある、つまり公教育がうける様々な制約からは自由であるということだから、予備校はその自由さを逆手に

とって、いろいろなことが出来るし、実際にやってきた。

公教育の場に市場原理が持ち込まれ、さらに共通テスト対応に追われて高校現場が一層疲弊・混乱する中で、「高校の予備校化」がますます進んでいる。そんな中で、様々な制度的制約から自由な予備校だからこそ、現行の新自由主義的教育の問題点を相対化したうえで、「教育」というのはそもそも何なのかという本質論議、「教育」の本来的目的とは何なのかを徹底的に追求していくことによって新しい「教育的磁場」を創り出せるのではないか。そして、それこそが河合塾生き残りの切り札ではないかと思っている。実は従来から河合塾というのはいろんな仕掛けや場を意識的に作り出してきた。それは各地区での文化講演会、さまざまな文化イベントの実施、そして文教研の設立とその活動、講師を中心とした研究会の活動、また牧野先生が主導された現場での職員・講師の共同作業による「人間主義」的教育の模索など。「教育基本法」第一条によれば、教育の本来的目的・理念は人格の完成を目指すことにあるというが、公教育の現場では文科省からの改革実施の要請に応えることに翻弄されて、多様な生徒に寄り添い、語りかけ、「人格の完成」を目指すような息の長い教育は困難な状況に追い込まれている。しかし、河合塾は公教育の制度外にあるがゆえに「教育」を自由に発想できる。受

験という名のもとに自由競争にさらされ、分断され孤立し、ストレスを抱え込んでいた塾生たちを、見守り、働きかけて、塾生を横につないで関係性を構築させ、一人一人の可能性を引き出していく。自らが「受験屋」であることを前提にしつつ、仲間の講師や職員たちと共同でさまざまな仕掛けや場をつくり、塾生たちと向き合い切り結んで彼らの「内発性」を引き出し、そして塾生自らが受験も含めて「学ぶ」ということや「生きる」ということの意味を問いつづけるなかで自らの才能をはぐくんでいく。それが講師・職員が横に繋がり集団で模索していた河合塾の牧野式教育のあり方である。この頃はやりの「個別指導」は、顧客の多様なニーズにあわせてパターン化した指導法を提供する（押し付ける）のだが、それは新自由主義的手法の応用といえる。こうした個別指導とは異なり、河合塾の教育の原点は、講師・職員たちが集団で、塾生たちを孤立・分断から解き放ち、学習の根幹をなす彼らの内発性を引き出していく、そうした集団指導体制にある。

ところで、予備校河合塾に身を置くようになって、私自身は常にジレンマを抱えていた。受験産業である予備校の授業というのは、二つの側面を持っている。自由競争にさらされた商品としての授業と、教壇に立って教えるということに関わる本来的な意味での「教育」としての授業であ

る。前者は、授業の商品価値は消費者としての生徒の満足度として計量されるわけだから、講師は自分の授業の商品価値をあげるために様々なパフォーマンスをやる。意味のあるパフォーマンスならよいのだが、これが過剰になると本来的な教育としての授業の質を落としていくことになる。とすると、教育の質を担保した予備校の授業というのは一体どのようなものなのか、ということになる。

そもそも「知」を伝達するということは、講師が直感的に捉えている「知」を言語化することによって、その「知」を「型」パターン」として生徒に示して共有できるようにする。これが一番基礎的な知識をたたき込んでいくときにやる方法である。その例の一つとして日本史の論述問題をあげてみる。日本史の論述問題は、基本的知識の習得を前提に「思考力・判断力・表現力」が試されるといって、受験生にとっては一番難しい問題形式といえる。この日本史の論述問題の解き方を教えるときに、過去の論述問題の形式をパターン化していくつかに整理したものを塾生に呈示する。そのうえで、当該の論述問題は、原因・内容・結果型なのか、それとも変化・推移型なのか、もしくは比較型なのかなどという型に当てはめさせ、この場合にはこういう形で考えて解くのだという解法のパターンを教授する。そうすると塾生はその型の習得を通じて一定程度

まで学力を引き上げることが可能になる。ところが、この論述の型を、これを商品としてたとえば高校の先生方を集めて行う入試研究会などでも提示するようになった。この論述問題をパターン化した解法、それからもう一つ、塾生が提出してくる論述の添削の仕方、これらを高校の先生方に披瀝していく。私たち古手は、「おながすいたタコが自分の足を食っている」と言って笑うのだが。ただ、私は、これには大きな問題があると思っている。「知」を伝達するというのは、塾生自身に彼ら自身の中にある潜在的な「知」を彼ら自身で汲み上げさせ、「知性」を作り上げさせていくという、そういう働きかけなのだが、「教育」というのはそこにごとまで関わられたかということだと思える。「知」の伝達がもともと孕んでいる緊張感、そういう教えるという行為が持つ本来的意味が、商品として型を提供してしまつた瞬間に捨棄されてしまうのではないかと私は懸念するのは、高校の先生方に型を提示するときには、この「知」の伝達が本来的に孕む緊張感の話を伝えないうことには教育の質は担保できないのに、型の話に終始しているのではないかという危惧である。それから、この型パターン化は年数を積んで作り上げていったもので、河合塾の講師間で継受していくのだが、これは下手をすると予備校の授業でも型の伝授に終始してしまうことがある。

私も忙しいときにはそのパターンを前提にした授業をしてしまつて、先ほどの「知」の伝達が孕むところの緊張感、これがなくなつてしまつていることに気づき反省しきりるときもある。だから、いわゆる教育とは何かを常に自分自身に問い続ける、そのことが肝要なのだと思つている。このごろ辛いと思うのは、いわゆる商品としての授業にシフトして、授業のパフォーマンスばかり上げようとする講師が増えてきているように思われること（生徒の満足度、支持率を上げるために必死なのだろうが）。また、分かりやすい授業にするために歴史概念を徹底的に単純化して説明しようとするが、その時に、単純化したかゆえにその概念が包摂している複雑に絡み合う事象の意味や構造を捨象してしまうことへの戸惑い、怖れというものがある。それが論壇に立つて「歴史を教える」こと、「教育」というのは何なのかという問題意識が希薄になつてきているように思う。歴史修正主義の「語り」をきちんと相対化したうえで「歴史を教える」意味を考え続ける、どうもそのあたりのところを意識的に考え続ける講師が少なくなつてきているように感じる。予備校という業界に身を置いたときから抱えてしまつているジレンマに向き合いながら、予備校の自由さの意味を生かして、塾生と職員、講師との往還運動と

しての教育のあり方を不断に問い続ける、そういった講師・職員集団の存在こそが若者を惹きつける魅力ある教育的磁場となりえるのではないか、その磁場を常に再構築していく動きそのものが予備校の教育ではないか、というのが私の考え方である。

4 文教研と研究会活動

最初に述べた危機意識と関連して、文教研と研究会について考えてみる。

文教研については、その設立の趣旨、二つの柱（教育と学問）を軸とする活動のあり方、文教研の方向性について、以下のように記されている。

近代百年の学校教育と近代科学の内部における諸矛盾があらわになり始めていた当時（一九八四年）の時代状況のただなかにあつて、新しい枠組みでの教育の模索と学問の構築という焦眉の課題に因應べく、予備校という自由な教育現場で培つてきた河合塾の豊かな経験と知を生かして鋭意設立されたものです。

本研究所は……「教育」と「学問」を二本の柱として、……国際学術シンポジウム、公開講座、文化講演会、研究会、書籍出版などの活動を中心に、時代の軸に

届くような原理的な考察の場をひらくべく活動して参りました。

この地球という空間の中で、民族・文化・言語・国家・男女の差異を超えて一人ひとりの人間が互いに生きる力を出し合い、ともに地球規模の困難な課題に向けて生き生きと知恵を出し合い鍛え合えるような、新たな教育と学問の開かれた場の構築をめざして……努力を続けていきたいと念じております。(『河合文化教育研究所』パンフ「はじめに」から引用)

中川久定先生が中心となって文教研が開催・協賛した日仏国際シンポジウムはフランス政府から高く評価され、文教研初代所長で当時の理事長河合斌人氏に、パルム・アカデミック・オフィシエ勲章(フランス教育功労勲章)が授与された。その授賞式で理事長は、文教研を「河合塾は幼児教育から生涯教育まで幅広い総合的な教育を推進してきた。とりわけ、その頂点に立ち、象徴として学問の研究、国際的な文化教育活動を進めてきた文教研」と位置づけた(『CONTINUUM』Vol.26,1993.2.20)。その他、木村敏先生が主宰された「河合臨床哲学シンポジウム」など様々な学術シンポジウムや国際シンポジウムが主任研究員を中心に開催され、それぞれ高い評価を得ている。しかし、現

在、多くの主任研究員の方々が逝去されるなかで、主任研究員の新規採用はなされず、国際学術シンポジウム・公開講座の開催も結果として縮小されてきている。それは、河合塾の「頂点に立ち、象徴として学問の研究、国際的な文化教育活動を進めてきた」文教研という河合斌人先々代理校長の文教研構想の霧散化を意味するのかもしれない。予備校業界をめぐる状況の変化や理事長の世代交代による文教研への河合塾本体の関わり方が消極的になってきているこの時期だからこそ、真に「時代の軸に届く」「原理的な考察の場」をひらくための活動が文教研に求められているのだと思う。

文教研に所属する「研究会」は、「河合塾講師が主体となつて外部研究者を交えながら予備校でしかできないオリジナリティのある研究会」と規定され、研究会の活動は「私たちが自明のものとして生きている近代と近代教育をいかに問い直し、かつ乗り越える道を探っていくかという問題意識に貫かれている」と記されている(ちょっと耳が痛いのだが……)。しかし今、抜本的見直しになる新指導要領の実施や、十八歳人口の激減が予備校業界にさまざまな影響をもたらすなかで、大きく変わるであろう河合塾の今後にとつて、文教研とそれにもある研究会の存在はどのような意味を持つのか。それぞれの研究会は、その存在意

義が問われることになると思う。

自戒の意味を込めて、私が所属する「女性論・男性論研究会」について考えてみる。この研究会を立ち上げたときに次のような課題を設定した。

言葉や思想は決して中立的ではない。性別と深くかわり、性差別を外面的にも内面的にも再生産し続けている。予備校はそのような「言葉や思想」を媒介に成立する教育産業である。若者たちに、仕事として語る「言葉と思想」に孕まれている意味を、語る大人自身が検証し続ける……。河合塾の講師を中心に構成されている本研究会の課題を、私たちはこの点に置いてみる。

目の前に立ち現れる性差別に対する怒りを武器に弾劾・批判を続けていくことは存外たやすい。しかし、性差別の根底を撃つということは、他者、そして自らの性意識・差別意識を日常的に検証し続けていくことに他ならない。私たちの研究会は後者に重きをおいた。それは、予備校の教壇に立つ私たちは、歴史的に再生産されてきた性差別の構造を否応なく孕む「言葉や思想」を塾生達に語り続ける存在だからである。

この認識の下に、自ら語る「言葉や思想」の日常的な検

証を大前提にして、塾生対象に彼らの性意識の変化を追いつつ生物学的性差の曖昧さや社会的・文化的につくられたジェンダーの意味などを考えさせる二本のビデオを作成した。また、河合塾セクシュアルハラスメント（現在のハラスメント）防止・対策委員会の立ち上げやガイドライン・細則などの作成に全面的に協力し、河合塾構成員の意識変革を射程にした組織づくりを支援した。一方、市民講座の講師として登壇したり女性学関係のフォーラムに参加するなど、より具体的・実践的な活動を行ってきた。

しかし、設立以来三十年以上経つなかで研究会メンバーの世代交代も進み、創立期の趣旨や問題意識そのものが希薄化し、活動も停滞気味であるように思われる。そこで、現在のフェミニズム・ジェンダー研究などの学説も踏まえて、今一度、研究会のあり方そのものを検証すべきだと思っている。次の研究会では今回の報告も含めて、メンバーの日常的営為と研究会との関わり、研究会が目指すものは何なのか、といった論議を進めていきたいと思っている。

5 新型コロナ禍以降の教育のあり方をめぐって

新型コロナの世界的流行、パンデミックにもなっただけでも政府・自治体から学校関係に休講の要請・通達が出

された。これを受けて、小・中・高校の休講、大学のみならず予備校も対面授業をやめてオンライン授業に切り替えた。リアルなコミュニケーションをとれないオンライン授業というのは「教育」にとってどのような意味を持つのかということを考えておく必要がある。それは「教育」にとって当たり前であった従来の対面授業の意味、在り方、この検証も同時にやる必要があると思う。

前述した予備校の「教育的磁場」は、コミュニケーションを前提とする人と人との関係性の構築を前提にしているので、オンライン授業のみの予備校となれば塾生達を巻き込むそういつた磁場は弱まっていく。私は「身体性」をともなわないオンライン授業は、塾生達の「内発性」を引き出し、彼らが自らの才能をはぐくんできていく、そういつた「教育」とはほど遠いと思っている。諸々の問題点の指摘がようやく始まったものの未だに新自由主義が世界を席卷するなか、今回のパンデミックで筋道が作られたオンライン授業の流れは、このコロナ禍以降、より勢いを増すかもしれない。そうなると、コロナ禍以降の「教育」の在り方を、新たな枠組みで考えていくことが、喫緊の課題になると思う。

II 新自由主義的教育改革下の予備校と大学

予備校の社会的意義と市場縮減下の今後をめぐって

差別問題研究会 菅 孝行

はじめに

以下は、青木和子先生の提起に触発されて考えたことである。そもそも、半世紀前まで世間の予備校観は「受験戦争を煽る元凶」という暗いものだった。この通念に対するカウンターをどう作るか、しかも、それによって予備校の提供するサービスの付加価値をどう高めるかを考えかつ実践して来たのが、河合塾では、丹羽健夫理事などを中心にして展開されてきた「予備校文化」なるものの核心だったに違いない。それが、講師をも巻き込んで、教職連携のエネルギーの源泉となっていた。それは塾生にも幅広く伝染し、塾生と教職の相互影響作用が生まれた。一九七〇年代末から二〇〇〇年代の中頃辺りまでこの相互作用が続いていた。その後予備校市場のジリ貧の時代が到来し、そ

の過程で「予備校文化」は衰弱した。

国家と資本の教育の場での逆説

私が担当していた小論文という教科は、講師の側に、国家が期待するものの見方・考え方や、世間的な通念に対するカウンターの構えがなければ、つまり近視眼的な市場主義、成果主義、社会防衛主義、道徳主義などに対する批判の問題意識がなければ授業が成立しない。生徒は自己認識と世界認識がある程度喚起されないと設問に答えられないからである。出題の期待に応える解答を書くには現実への批判的視野が不可欠だ。表現表記は小論文という教科では些末事だった。だから、国家が求める人間像に相応しい思考や行動を自明なものとしていてはダメなのだということ「啓蒙」するという、パラドキシカルな作業が、予備校

の小論文講師には求められた。

多くの大学がこぞって小論文入試に踏み切ったのは、曲りなりにも国家の労働力再生産装置に甘んじない想像力の涵養が不可欠だという認識に基づいていたのだからと推察する。指導要領にない教科を受験科目にしたということは、政府さえも、それに気づいていてある程度許容せざるをえなかったのだといえる。一九八七年に河合に来てから二十年以上、授業の下手な私でも、この需要に応えてさえいれば面白がつくれる生徒は少なくなかった。生徒が面白がつくれれば、論述の力はついた。それなりに結果も出た。小論文のような特殊な教科でなくても、どの教科でも、予備校の授業が、暗記やステレオタイプな解法の枠を破れるかどうかが生徒の学習意欲を掻き立てる最大の動機になっていた。それをあてにして生徒は予備校に来た。保護者が予備校の授業料の支払いに堪えうる階層の中だけの、しかも、主にフルタイムで予備校に来る浪人生に限定されたものだが、公教育にはない自治空間、解放空間が予備校に成立した。

予備校文化が成立する与件

この解放空間は、客観的な条件に規定されていた。それは①受験人口が大学定員を大幅に上回り、受験生が、将来

に希望を抱いていて上位校にこぞって挑戦すること、②その結果、大量の浪人生が、しかも、かなり学力の高い浪人生が溢れかえること、③知的好奇心を喚起して生徒に刷り込まれている通念を破壊できて、生徒の更なる好奇心の増殖を動機づけられる講師が層をなして予備校に溢れていること、④それが上位校合格の必要条件になっているため、保護者が予備校の授業料の支払いの意欲を持ち、その意欲に見合う親の支払い能力が担保されていること、⑤予備校の経営者が、ときには秩序にとって危険となるような、講師の大胆な授業や生徒への知的関心の喚起を許容すること、だから、小田実、吉川勇一、山本義隆、最首悟など既存の秩序にとってキケンな知識人さえも予備校は雇ったのだろう。⑥スタッフが講師を能動的にサポートする器量をもっていること、などである。

凋落する受験産業

しかし、いまや、①大学定員が膨張しているのに十八歳人口は大幅に減少し、中堅校以下は無競争に限りなく近づいていて、上位校チャレンジも「分を弁えてしまった」若者のトレンドではなくなった。②その結果浪人生は激減し、現役生対象に次第にシフトして、知的好奇心に溢れた浪人生が予備校に群れを成す状況はありえなくなった。③

団塊世代以上の講師はほぼ引退し、それ以下の世代で研究者をめざす「高学歴遊民」には、研究費や生活資金を得る手段が予備校講師以外に保証されるようになり、予備校にきた若い講師の質と、塾生の知的好奇心の喚起という役割とのミスマッチが深刻になった。④予備校の授業料を負担できる保護者の層が限られてきたこともあって予備校市場は縮小しており、不寛容なモンスターペアレントも増えている。⑤経営者のマインドも秩序志向⇨縮小堅実保守志向になり、⑥正規雇用者をわずかしか雇わなくなったため、予備校に帰属意識をもつスタッフが減り、危ない受験生やトンデル講師に寄り添う気風も希薄になった。

それゆえ、河合塾はじめ、所謂大手予備校が、受験産業だけに拘泥すれば明るい未来はない。その一方で、教育産業総体、つまり教育・学習の市場は限りなく多様化しつつ拡大している。幾つもの条件付きではあるが、予備校にも幾つかの「転進」の可能性がないわけではない。「商売」の次元ではベネッセがいち早く対応した。

「ネオリベ教育」批判は末期近代批判である

青木報告の問題意識の核心は、一方でネオリベリズム教育批判を河合塾でどう実践していくかということと、他方で企業としての河合塾をどう成立させていくかというジ

レンマをいかに生き抜くかというところにある。

ネオリベ批判というテーマを長いスパンで考えると、それは末期近代批判の課題と重なる。近代世界は、科学技術による生産力の発展を一方の軸に、国民国家の統治をもう一つの軸に膨張を重ねてきた。その終末期である現在は、自身の延命のためにネオリベリズムに行き着かざるを得ない。支配層の自己保全の原理を暴力的に貫徹するしかなくなるからだ。しかし、それが世界を破綻に向かわせる。注目すべきなのは、ネオリベは単なる自由競争という意味での市場原理主義ではないということだ。一方で市場ファングメンタリズムであると同時に、アメリカも中国もそうだが、自国の体制を死守するためになりふりかまわず社会への暴力的介入を正当化するイデオロギーである。極限的な搾取と収奪（本源的蓄積）の二本立てなのだ。本源的蓄積は産業社会の入り口で一度限りのもの、という通念は拭きされるべきだ。資本制の危機には何度でも反復される。だからネオリベ（強者の自由）はネオコン（暴力的統制）と親和的なのだ。

差別と階級支配の相補性

私は差別批判の方法を考えるに際して、差別を過去の因習の残滓と考えたことはない。今日ただ今の資本制と国家

の問題だと認識してきた。それは、市場原理とナショナリズムを内面化しているわれわれ自身への批判的自覚の問題でもあることを意味する。差別は、古い時代ほど過酷で近代になると改善されたというのは全くの幻想で、近現代社会にはそれに固有の苛酷な差別が存在する。通常「差別」とは呼ばない階級関係、つまり労働市場内部における賃労働と資本が生み出す関係は、絶対的な上下関係が生み出すものだから、差別構造の基軸だといいかえてもよい。もう一つは市場の外での事態、これが通常「差別」と定義されるものだが、それは性、人種・民族、部落（カースト）、身体的あるいは知的障害など、特定の社会階層を市場および市場が成立している市民社会に参入させないか周縁に置くという点で共通している。権力によるこれらの布置を大衆が（納得）しているのは、大衆に内面化されてきた、前近代における性意識、異人忌避、身分制、障害者排除を自明とする意識である。それが市場の境界に設定されるところに近代の差別の固有性がある。

近現代における差別は、市場内（階級関係）と市場外（諸差別）を二つの軸に構成され、上下の分断、内外の隔絶・排除を生み出してきた。あからさまな差別の手前に、様々なハラズメントがあり、更にその手前にはマイクロアグレッションが溢れている。一見安定的な日常の差別の向こ

う側には、非日常的なヘイトクライムがあり、それが時には大量虐殺に「発展」する。グローバル化の展開の中で、こうした差別の意識と関係構造が、どのように関連し、どのように機能してきたか、克服するには何が必要なのかを考えるのが差別問題研究会の一貫したテーマであった。

入試改革への危機感

教育の領域で直近に私が一番気になるのは、この数年来のいわゆる教育改革、とくに大学入試改革と高大連携である。勿論、民族学校潰しとか、障害者の排除とか、夜間中学の廃止とか、保護者の資産による教育を受ける権利の格差とか、差別拡大政策は今に始まったことではないが、このたびの「改革」は、全国民的な差別構造の一層ドラスティックな強化に繋がっている。政府は（日本の若者の大半はルーティーンをこなす従順な労働者であればよい、それを受け入れない者は排除すればよい、どの道ルーティーンワークの労働力は不足するから、不足分は外国人で補う、先端の研究開発が担える能力はエリートだけに付与すればよく、国内で調達できない高度な知見は外国の先進的な研究や研究者に依存すればよい）という態度を露骨に示している。

実施に先立って試作された現代文の記述式のサンプル問

題を見ただけでも暗澹たる気分にはさせられる。第一次のサンプルのテーマの一つが街起こしと景観保全の調和のさせ方、もう一つが駐車場の契約に関するトラブルの解決法である。第二次のサンプル問題のテーマは部活動に関する問題処理だった。考える力とか提案力とかコミュニケーション力を培うための記述式テストだと謳いながら、結局組織の手足になって便利に働かせる能力を育成するために必要なリテラシーを識別するための手段としか考えようがない。だが本当に若者に考えてほしいのは、たとえば、生命の尊厳の根拠は何かとか、科学の研究は真理の追求なのか説明原理の発見なのか、とか、正常と異常の区分はどうするのか、誰がするのか、といったテーマである。それを平易な文章で問うことだ。

国語・数学の記述問題と英語の民間委託は瑕疵が露顕してひとまず撤回されたので、とりあえず安堵したが、これで、矛を収める政権ではない。国語教育の必修から文学言語が排除されるなど、次世代の若者を愚弄する教育改革の路線は維持されている。

入試改革批判は予備校の責務である

全盛期の河合塾は、入試問題批判を政府や入試センターや大学・高校に提起したり、模試の問題を通じて、入試は

かくあるべしということをもつて示し、大きな社会的影響を与えてきた。今回も、予備校から提案できる課題が絶対にある筈だ。本当にコミュニケーション能力を培って、クリエイティブな能力を持つ人間を作るための教育を、日本に住んでいる人間たち全部に可能にする教育には、こんな入試問題やこんな評価方法ではダメだということとを予備校が言わねばならないし、客観的には言うチャンスである。しかし、それを担う力量が予備校にあるのか、それが問題だ。これは文教研の問題ではなく河合塾本体の教職員に問われていることである。

コロナ禍が加速するネオリベ

当面の短いスパンではコロナ禍の問題がある。オンラインビジネスは仕事の「出来る」労働者を過重に収奪し、仕事で「できない」労働者をたちどころに淘汰する。コロナ禍以後の労働市場は悲慘この上ないものになるだろう。オンライン化ができる業種、出来る企業にとっては、これがより効率的な労働形態であるから、コロナ禍が去ってもテレワークは増えたままになる。

一方、オンライン授業では、ついていけない児童・生徒・学生が大量に産出される。教育を受ける権利の平等性は破壊され、彼らを置き去りにすることが恰も自明のよう

に処理されてゆくだろう。

これからのニッチ産業 日本語学校の重要性

私の死後に続くであろう長いスパンでの教育のアンダーグラウンド、つまり、文科省管轄でないニッチの教育産業の最大の課題は、日本語学校の大転換である。これは三大予備校や東進ハイスクールのような収益性を重視せざるを得ない大組織の身の丈には合いくいかもしれない。また、労働者として経済的な見返りの少ない、非営利に近い事業となる可能性は大きい。しかし、そこに巨大なマーケットが出現することは間違いない。

この四半世紀を展望すると、日本国籍を保有せず、日本語を母語としない人口の比率が、二五%から三〇%に達するだろう。外国人労働者は二千万人を超える。しかもその多くは青少年である。だから、外国人労働者の送り出し側の機関や、日本の受け入れ側の団体のブラック極まりない現状とそれに癒着した日本語学校の現状を根本から糾して、外国人への日本語教育に、国際連帯の媒介機能を担わせることができるかどうか、この国の将来に決定的な影響を与えるだろう。魯迅にとつての藤野先生を広範に大衆的に生み出せるか、これは、教育産業とか教育労働の課題であると同時に、内向きの極限のようなこの国を変える原

動力を組織化する運動でもある。

バブル期に高学歴遊民が予備校講師になったのとは全く別の覚悟が求められる。生徒は傷つき心身をゆがめられ苦しんでいる。日本語学校の講師は語学を教えると同時に傷の癒し手でなくてはならない。生徒の苦しみは生徒の数だけ多様だ。介護師をしている若い友人小峰輝久が同人誌にこう書いた。「たつたひとつの解放はない。解放は苦しみの数だけある。」(『臨』特集「格差のデザイン」)

個別の苦しみに寄り添うのはケアである。外国人と日本人に橋をかけようとする日本語学校の講師はケアラーであると同時に苦しみの数だけある解放を繋ぎ合わせる工作者でもなければならぬ。

ネオリベの世界は、市場原理の絶対化によって外部不経済を極大化させる世界である。長期的に見るとこの国の労働生産性も低落して行く。これは、予備校の危機などという次元を超えた、もっと大きな危機である。コロナを介してそれが加速されることが危惧される。グローバル化を推進する勢力は、資本制が破局に直面すれば、古典的なエンクロージャーどころではない新たな本源的蓄積(収奪)に向かう。そう簡単に資本制が崩壊するとも私には思えない。長い罅迫り合いが私の死後も続くだろう。

大学の變貌

——アカデミック・キャピタリズムを超えて

主任研究員 野家啓一

はじめに

一 昨年の春に文教研主任研究員を拝命してから、一昨年と昨年の夏に文教研合同研究会に出席する機会を得た。この会では、予備校の教育とは何であったかが、文教研の各研究会の主宰者などからさまざまな形で論じられ、啓発されると共に大いに刺激を受けた。その議論のなかでは、「公教育」の縛りが無い分だけ、予備校が自由に教育の可能性を広げてきた点が強調されていた。同時に「予備校教育」がこの間どのように変質していったか、なぜそうなったのか、について多くの出席者が強い危機感と問題意識をもっていることが強く感じられた。

昨年の合同研究会では、基調報告を行った青木和子先生が「新自由主義的教育の展開」を軸にして、一九七〇年

代、八〇年代から現在に至るまでの教育の流れを非常に簡潔にまとめられ、示唆されるところが多かった。その報告を聞いていて、新自由主義の奔流を前にして予備校がもつ危機感は、現今の大学がもつ危機感と根底ではほぼ同じ構造ではないかということに気づかされた。ここでは、新自由主義的教育の展開にともない、大学の側の教育・研究体制が——改革か改悪かは知らないが——いかに變貌してきたかについて、ラフスケッチを試みたい。

1 大学制度の変遷

八〇年代以降の新自由主義教育の進展という角度から見ると、大学の方ではホップ・ステップ・ジャンプと三段跳びで新自由主義教育のいわば一番の尻ぬぐいというか、最後の締めくくりの役目を果たしてきたという位置づけにな

るかと思われる。まずホップは一九九〇年代の「大学設置基準の大綱化」。これによって、戦後の新制大学にはどこにでもあった「教養部」という組織が解体され、わずかの例外を除いて消滅した。ステップは一九九〇年代後半の「大学院重点化」という施策で、大学院の入学定員が増えるとともに質が低下し、「学歴ロンダリング」などという言葉も囁かれるようになった。そして最後の仕上げが、二〇〇四年に実施された「国立大学法人化」であり、このジャンプによって行政的には国立大学教職員は非公務員化され、研究面では「アカデミック・キャピタリズム」という言葉も登場するようになったのである。

そのあたりの流れを簡単にたどっておきたい。戦前の帝国大学というのは、ご存知のように、ドイツのフンボルトの大学理念を体現したベルリン大学をモデルにして講座制という制度が厳密に守られるような形で組織化されて行った。それが敗戦を機にアメリカ型のリベラルアーツ教育が導入され、それまでの旧制高校が教養部に横滑りするような形で戦後の新制大学が構想された。つまり、専門学部の方はドイツ型の講座制、初年次の教養部の方はアメリカ型のリベラルアーツ教育というハイブリッドな形で、戦後の教育体制は始まった。その矛盾が噴出してきたのが一九六〇年代の後半、ちょうど私の学生時代である。大学闘争を

はじめとして、この場合は下からというかボトムアップの形でその矛盾に対する告発がなされたと言えよう。それが一九六九年一月の東大安田講堂陥落を機に沈静化して、今度には八〇年代に入ると上から、文部科学省の方からトップダウンの形で大学改革（解体？）が推し進められるという、そういう展開になっていった。これが大まかな戦後大学の変遷の歴史とすることができよう。

2 大学設置基準大綱化と大学院重点化

大学改革三段跳びのホップに当たる「大学設置基準の大綱化」というのは、要するにこれまでは、大学の教養教育においては自然科学、社会科学、人文科学の三分野それぞれ十二単位、計三十六単位が必修になっており、それをクリアしないと教養部を出て専門学部に進学できなかった。私の同期生で教養部を裏表四年間やつてもその三十六単位が取れなくて退学になった友人がいたが、従来はそういうシステムの中で大学が運営されてきた。加えて戦後の教養部は旧制高校から横滑りしてきた教授陣が多く、ちょうど東大で言う駒場と本郷の対立のようなものがどこの大学にも根深くあった。それが大学設置基準の大綱化によって、各大学が自由にカリキュラムを編成していいとなった途端に、ほとんどの教養部が、国立大学では東大の教養学

部を除いて解体・消滅するにいたった。もちろん私立大学の方は国際基督教大学をはじめ教養部が残っている大学があるけれども、国立大学のほうは縦割り、つまり一年生から各専門学部にも所属するという形で、学部主導で教養教育が行なわれることになったわけである。

それとともに大学院の方は、ロースクールやメデイカルスクールが独立している諸外国と違い、日本では大学院はもともと学部の付属物のような形でしか存在していなかった。それが九〇年代に入ると高度専門職業人の育成という経済界・産業界からの要請で、「大学院重点化」という動きが活発になる。これが三段跳びのステップの段階である。予算の増加という撒き餌につられて、旧帝大を中心として多くの国立大学が、それまでの学部ではなく大学院をいわば基盤にして、そこから学部や教養課程の教育を担当しに出かけるような体制に移っていった。こうした教養部の解体と大学院の重点化によって、先ほど指摘したドイツ型の講座制からなる専門学部とアメリカ型のリベラルアーツ教育を基盤とする教養部との間にあった矛盾や対立は、ある程度は解消されたと言つてよい。その反面、教養課程および大学院の教育がある意味では崩壊に瀕した。つまり人文系の大学院では入学試験に普通は必ず第二外国語の試験、ドイツ語とかフランス語とか中国語などの試験が課せ

られていたが、大学院の大幅な定員増によって、そうした大学院の試験がまともにできないような状態になった。はつきり言えば、東大や京大などの難関大学では、学部に入るよりも大学院に入る方がはるかに簡単になったわけである。だから学部で東大や京大に入れなかった方々も大学院には入れるようになったことから、こうした傾向は「学歴ロンダリング」と呼ばれている。つまり、総じて大学院の学力が低下したわけである。哲学系の大学院では、ドイツ語やフランス語など第二外国語での演習や講読ができない所まで出てきている。その結果、以前ならば学部の三々四年で教えていたことが大学院で教えられ、教養部で教えられていたことが学部の三々四年で教えられるようになった。つまり、ワンランクずつ大学生の学力が落ちていったというのが、この二十年くらいの大学の動きだったと言えることができる。

ただ一方で、講座制のもとでは、これまで教授・助教授・講師・助手というポストの序列が厳密に守られていた。つまり財政面では教授ポスト、助教授ポスト——いまは准教授——にそれぞれ予算が配分されるという形で運営がなされ、これは積算校費と呼ばれる。それが二〇〇四年の国立大学法人化とともに、運営費交付金という形になり、ポストに予算がつくのではなくてファンドという形

で、それも大幅に減額されて——一年ごとに一パーセントずつ、つまり十年で一割ほど減額され続けてきたわけだが——ポストについていた予算がファンドという形でまわって大学に交付され、それをどう配分するかは各大学の運営方針次第ということになったわけである。

そうすると、いままでは教授ポストには必ず教授の能力を持った者を雇わなければならなかったわけだが、教授一人の予算で助教（以前の助手）二人を雇えるので、そうすると教授を雇わないで助教を二人雇う、あるいは助教二人のポストを潰して教授一人を雇う、そういうことが可能になった。それで大学院重点化のためには大学院の授業を担当可能な教授が必要なので、その当時は助手ポストを大幅に削って教授ポストを新たに作る（上位振り替えと言う）ということが行なわれた。その結果、たとえば京都大学では文学部の助手（助教）ポストが数えるほどしか残っていないとか、私が入った東北大学文学部の助手（助教）ポストはローテーションで、昔は一講座に必ず一人の助手がいたわけだが、いまは何年かに一度しか助手（助教）ポストが回ってこないという苦境に立ち至っている。

助手（いまは助教）というのは、学部学生と教授・助教（いまは准教授）を繋ぐ接着剤のような役割を果たしてきたわけだが、そのポストがなくなっただけで、研究室運

営に支障をきたすようになった。それでも何とかやりくりをしながら今日にいたっているというのが現状である。そういう意味では講座制が——大学闘争のときも講座制解体というスローガンがあったが——いざ解体してみると、今度研究室そのものが成り立っていないかという痛しかゆしの面がある。これは医学部の医局と地域医療との関係についても同様のことかが生じていると思われる。さらに大学院重点化に伴って、留学生三十万人計画という政策を文科省が打ち出したのだが、とても三十万人などは無理で、いまだに十万人を超すかどうかのところに留まっている。その大学院重点化によってできた歪みは、特に人文社会系の大学院において、高学歴層の就職難という形で露呈しており、改善の兆しは見られていない。

3 国立大学法人化の功罪

先ほど述べたように、二〇〇四年の国立大学法人化を通じて、公費予算がポストにつくのではなく、ファンドという形で大学が自由に配分できることになったので、どうしても国立大学は理工系学部が中心になっていることから、工学部や医学部に重点的に配分され、逆に人文社会系学部の方は予算が削られて、これまで継続的に購読してきた紙媒体の学術雑誌の購入もままならなくなり、途中で購読を

やめざるをえないという惨憺たる窮状が人文社会系では続いている。

他方で、国立大学法人化の前後から「競争的資金」ということが叫ばれ始め、それを押し進めるために「競争によって個性輝く大学」というスローガンが大学審議会の答申に掲げられたことがある。その行き着く先は、要するに外部資金の導入が大学の至上命題になること、言い換えれば研究を進めたいのなら資金は外部から獲得せよ、というわけである。現在の大学制度の中で外部資金を豊富に導入できる部署と言えば、基本的には理工系、とりわけ工学部と医学部が筆頭であろう。したがって、当然大学内での発言力も工学部や医学部が強くなる。つまり外部資金導入の額によって発言権が増えたり減ったりするという状況になり、学長もまた工学部か医学部からしか選ばれないという傾向が、東大を除くほとんどの国立大学で続いている。

ただ一方では、人事に関しては公募制というシステムが通常となり、これまでのようにボス教授の差配で就職先が決まるということは、以前に比べればほとんどなくなっている。その意味では大学の人事に関しては透明性が増しており、なかには一種のオーディションであろうか、公募の上で最終選考に残った候補者に模擬授業を課して採用を決めるといった大学も増えているので、大学の採用事情もだ

いぶ様変わりをしているのが実情である。

4 アカデミック・キャピタリズムと研究不正

それで、他方の研究体制の面では先に「アカデミック・キャピタリズム」という言葉を使ったが、そのきっかけは、一九八〇年にアメリカの上院で「バイドール法」という法律が成立したことにある。つまり、いままで大学などの研究機関や研究者は特許を持って利益を得てはいけないということ、特許を獲得して事業を興すことは禁止されていた。アメリカではそれがオープンになったのである。それゆえ、大学の研究室で開発したさまざまな発明や発見がそのままベンチャービジネスに繋がっていき、むしろそれが奨励される時代になった。私たちの学生時代は「産学協同反対」と大書された立て看板がキャンパスに乱立していたのだが、いまは「産学協同」が奨励され大学の中期目標にも掲げられる時代になったのである。このように大学が主体となってベンチャービジネスを始めるようなことが、日本ではだいたい二十年遅れて、九〇年代の終わりごろに「大学等技術移転促進法（TLO法）」や「産業活力再生特別措置法」といった法案が通り、やはりアメリカと同様に大学など研究機関が特許を保持し、研究者個人が特許を基にしてベンチャー企業を立ち上げるといったこ

とが法的に可能になった。それに伴い、これまで「研究」と言われていた活動が「知的生産」と呼ばれ、「研究成果」が「知的財産」と呼ばれるようになった。まさに「アカデミック・キャピタリズム」という名の通り、大学自体がベンチャー開発に血道をあげる「起業家大学」に変わっていくような状況になったのである。

それと同時に、研究姿勢にも大きな変化がみられるようになった。特にバイオサイエンス関係では、FFP (Fabrication, Falsification, Plagiarism) つまりデータの捏造・改ざん・盗用など、そうした研究不正がSTAP細胞事件をはじめとして増加の一途をたどっているのである。東大ではそれが基で教授が懲戒解雇になるという事件もあったが、そういうアカデミック・キャピタリズムの負の側面と研究不正の増大とが表裏一体になってアカデミズムを侵食してきたというのが、ここ二十年ほどの極めて憂うべき状況であろうと思われる。

それと裏腹に、二〇一五年には「文系学部不要論」が浮上し、国立大学は理工系だけでいい、文系、人文社会科学系の学問は私立大学にまかせればいいといった主張が文科省で公然と議論されるようになった。これにはさすがに経団連などからもクレームがつき、その後なりを潜めたようであるが、自民党の文教部会や文科省内には相変わらず、

イノベーションに役立たない文系学部は国立大学には不要だという考え方がいまだに根強く残っているようである。

5 大学図書館をめぐる

最後に少しばかり大学図書館のことに触れておきたい。私は二〇〇五年から七年間東北大学の図書館長を務めていたが、その頃から急激に増えてきたのが電子ジャーナルという学術メディアである。理系の教員のなかには電子ジャーナルさえあれば図書館の建物なんていらないと宣言する人も多くいる。そういった趨勢に対抗して、図書館としてのアイデンティティをどう形作るかというのが、私が図書館長を務めていたときの大きな課題であった。その頃から「アクティブラーニング」という言葉が中学や高校でも叫ばれるようになり、大学にもそれが波及してきて、図書館の中に「ラーニングコモンズ」という共通スペースを作ろうという動きが活発になってきた。これまでは図書館というのは「静粛」という張り紙がしてあって、図書館で私語や議論するのはもってのほかであった。ところが二十一世紀に入る頃から、むしろ静粛ゾーンとラーニングコモンズのように議論をしてもいいゾーンというのがゾーニングされて、あるいは下の階は静粛ゾーン、上の階はラーニングコモンズという形で棲み分けがなされ、図書館の中

で活発に議論をしたりゼミを開いたり、そういうことが盛んになされるようになったのである。名古屋大学の図書館にはたしかスターバックスが入っているはずだが、図書館にカフェテリアを併設するところも多くなってきた。つまり図書館というのは単なる読書や学習の場ではなくて、アメニティスペースというか、大学のキャンパスの中で、そこで学生が一息つけるような、軽食をとりコーヒーを飲めるような癒しのスペースにしようというのが、最近の動向である。現在図書館では電子ジャーナルの隆盛の一方で、つまり理工系の方は図書館の建物自体要らないという考えが主流なのだが、人文社会系はあくまでも図書館がなければ学問自体が成り立たないような分野であり、むしろ図書館をアメニティスペース化しようという動きが活発化している。

ただ、予算の面から言うと、電子ジャーナルがいま東北大学の場合だと、私が図書館長をやっていた時代でも一年間に七億から八億ほどかかり、東大では十億から十二億くらいを費やしている。電子ジャーナル市場はオランダのエルゼビアやドイツのシュプリンガーという出版社をはじめとする寡占状態で、しかも個別にジャーナルを契約できない仕組みになっている。つまりパッケージ制になっていて、福袋形式で人気の高いジャーナルと人気のないジャー

ナルとをセットにして売るといったような巧妙な販売方法をとって利益を上げている。ともかくいまの大学図書館は、電子ジャーナルとアメニティスペースをどう両立させるかということが大きな課題になっていることを付け加えておきたい。

おわりに

それから最後に一言、青木先生の基調講演の中で、年次進行している新指導要領の中で「公共」という新科目が高校での新しい道徳教育の役割を担うということが報告されていた。学術会議の中に哲学委員会という組織があり、そこに「哲学・倫理・宗教教育」について検討する分科会があつて、それでも「公共」教育の問題が議題にのぼっている。私の友人が新しい「公共」の指導要領や教科書を調べたところ、「公共の扉」という、公共の授業内容に関するモデルケースの紹介のような部分があり、そこには一言も「批判」という言葉が出てこないとのこと、これは「公共」にとつて大きな問題だと分科会で話題になったことがあつた。

私は哲学の授業の時に、当然カントの批判哲学とか著者の『純粹理性批判』とかを取り上げるのだが、学生に「批判」とはどういうことかを聞いてみると、ほとんどの学生

は「批判」というのは悪いことだと考えている。つまり相手を非難するとか論難するとかそういうイメージで、批判とは悪いことだという固定観念が学生にはある。どうも他人を攻撃することが批判だと考えている。だからカントは三冊も批判をタイトルとする哲学書を書いたという、カントというのは相手を批判ばかりしている悪い哲学者だという、そういう筋違いのイメージを持っている学生が最近が増えている。

だから今回の「公共」という新科目の中でも、どうも批判という行為がポジティブなイメージでは捉えられていない。それゆえ、「批判的議論」の重要性という観点から「公共」に関わる問題をもう一度考え直していく必要がある。そういうことを学術会議の方でもいろいろ議論しているところなのだが、やはり高校から予備校、そして大学は、まさに本来の意味でまともな「批判精神」を身につけた学生を連携して育てていかなければならない。その点では予備校の危機感はそのままだ大学の危機感につながっている、そういう時代に入っているのではないか。そのことを確認して稿を閉じることにはしたい。

III 予備校という独自の教育空間で

予備校空間におけるドストエフスキイ

——若者たちに託す夢

ドストエフスキイ研究会 芦川進一

〔1〕「河合文化教育研究所」設立の理想

五年前、河合文化教育研究所のHPに「ドストエフスキイ研究会便り」の掲載を始めるにあたり、私は研究所設立（一九八四）の理想について再確認を試みました。ここにその冒頭部分を紹介させて頂きます。今回与えられたテーマを考える際に、これが私の出発点となり、また結論ともなると思うからです。

河合文化教育研究所が設立されたのは、バブル経済が最盛期を迎えた千九百八十年代の半ばでした。この研究所設立の出発点となったのは、物質的経済的繁栄のみを追求する日本社会を向こうに、予備校「教育」の現場から初めて可能となる「文化」を産み出そうではないかという

理想でした。

その理想を実現すべく、研究所に関わる全員が土台としたのは予備校という教育空間の独自性であり、そこから自らに課したのは、浪人という極めて不安定な状況に置かれた若者たちに、受験勉強に真剣に取り組ませるという、まずは予備校として当然の課題でした。これに加えて課されたのは、彼らの揺れ動く鋭敏な感性と知性に対し、この時期にこそ世界の一級の知的巨人たちとの対峙を迫るという課題でした。これら二本の柱によって、二十歳前後の若者たちに人生を貫く知的探究への基本的意欲と姿勢とを身に付けさせよう、その上で彼らを大学に送り出そう、このような「教育」の課題と理想を追求することから、予備校独自の「文化」を生み出す土壌も育まれるはずだ、以上のような展望の下に河合文化教育

研究所が生まれたのでした。今思い起こしても、それは地に足の着いた「文化」への展望であり理想、そして「教育」への姿勢であつたと思われまふ。

当然のことですが、それと同時にこの文化教育研究所に集つた全員が、予備校「教育」の現場でする努力と表裏一体の形で、各自それぞれの専門分野において「文化」に向けた地道で誤魔化しのない努力を自らに課したのでした。若者たちとの対決と、世界の一級の先哲・知性との対決、そして自分自身との対決。——少々青臭い表現が続きますが、これら三層にわたる緊張感こそが、歩み始めた研究所の事務局員と研究員とを支え、そして衝き動かす目に見えない力であり絆であつたと私は理解しています。（「ドストエフスキイ研究会便り」——）

予備校における「文化」と「教育」の可能性を見つめての、「河合文化教育研究所」（以下「文教研」と記します）設立の理想。そこを貫いていた三本の柱について、私の思いは今も変わりません。今回「予備校教育」の在り方について論じることが、それ故私にとって、この研究会での三十五年を通して見えてきた、ドストエフスキイ研究会と文教研の理想と現実について、改めて確認し報告することに他なりません。

[2] ドストエフスキイが担う問題、そして予備校

以前、文教研の合同研究会でもお話ししたのですが、ドストエフスキイを語る時どうしても最初に確認しておく必要があるのは、四十歳を過ぎて初めて訪れた西欧社会について、翌年彼が記した報告記『夏象冬記』（二八六三）のことです。

彼が英仏両国で目撃したのは、ヴィクトリア女王の治下、産業革命の最先端を驀進するロンドンの街で繰り広げられる人間疎外と神疎外の壮絶な光景と、ナポレオン三世の下、相対的な安定期を迎えた社会で、フランス革命の理念を忘れ去つた小市民たち、精神を「縮こまらせ」つつあるパリっ子たちの満ち足りた姿でした。前者を支配するのは「異教神」バアル、後者を支配するのは「小銭の神」マモンであると断じ、これらサタンに対する「何世紀にもわたる精神的抵抗と否定」の必要を記した上で、ドストエフスキイが提示したのは、ヨハネ福音書第十一章の「ラザロの復活」でした。死して四日、既に墓の中で死臭を放つラザロに向かい、イエスが叫びます——「ラザロよ、出で来なれ」。

この後『罪と罰』（一八六六）から『カラマーゾフの兄弟』（二八八〇）に至るまで、彼が一貫して取り組んだのは、近代西欧に手を引かれて陥つた墓場から、人類は果た

して抜け出ることが可能か？ 可能であるとすれば如何にして？——この問題でした。「ラザロの復活」の問題が、現代世界を舞台として繰り返しドラマ化されてゆくのです。些か乱暴な要約ですが、私はこれがドストエフスキイ世界の基本的骨組みであると考えています。

ところが大学でドストエフスキイとの取り組みを始めて以来、私が出会ってきたのは、ドストエフスキイ文学を愛する数多くの読者たちにせよ、専門家たちにせよ、この作家への関心の高さと反比例して、彼らが示す聖書世界への驚くほどの無関心さでした。ドストエフスキイ世界の豊かさと同行きは測り知れず、この世界へのアプローチの仕方エフスキイ世界に足を踏み入れるや、そこに展開するのは、上に確認したように、正に「ラザロの復活」を核とする聖書の磁場でのドラマであり、聖書世界の理解なくして、この文学世界が孕む問題について本質的思索を試みることはまず不可能なのです。明治以来、「和魂洋才」の名の下に西洋文明・文化を採り入れてきた我々日本人は、その基盤をなすキリスト教との取り組みを怠ったまま今に至ったのですが、ドストエフスキイ受容に於いてもまた、全く同じ轍を踏んだのです。

最終的に私が選んだ道は、アカデミズムの場でのドスト

エフスキイ研究は捨て、一人でドストエフスキイ世界と聖書世界と対し、『夏象冬記』以来この作家が取り組んだキリスト教的磁場の問題について、一言で言えば「ラザロの復活」について考えることでした。小さな学習塾を始めた延長線上で、また或る縁で、私は丹羽理事に河合塾に招いて頂き、「予備校」の教室で英語を教えつつ、文教研でドストエフスキイ研究を続けることになりました。冒頭に挙げた文教研設立の理想に対する熱い思いには、このような背景があることを、まずは確認させて頂きました。

以後「文教研」での三十五年間、私が続けてきたのは、自分自身のドストエフスキイとの取り組みと、大学入学後予備校に戻った若者たちとドストエフスキイと聖書テキストを読み進めること——これら二つの作業です。前者については、ライフワークたる『罪と罰』論（二〇〇七）と『カラマゾフの兄弟』論（二〇一六）とを、事務局の加藤さんの編集で、文教研から出版して頂きました。後者については、予備校生たちとの『夏象冬記』講読の報告書である『傾ちた苦艾の星』（一九九六）の出版（文教研）がありますが、今回は殊に以下の[3]と[4]で、若者たちと続けた勉強について、その経緯を二段階に分けて報告すること、[予備校における本来的教育とは何か]という問題への私の解答とさせて頂きます。

[3] ドストエフスキイ空間としての予備校

研究会を開始して、まず私が驚かされたことは、予備校生活を経験した若者たちが、ドストエフスキイ世界に極めてスムーズに入ってゆくという事実でした。(勿論それは全員ではなく、直ちに拒否反応を示し、会を去る若者も少なくなかったことは記しておかなければなりません)。周知の如く浪人生は、それまでの公教育の軌道から逸れ、いくら勉強をしても合格するという保証がないまま、予備校で普通一年か二年の受験生活を送ることを強いられます。ここで彼らは、人生には必ずしも定められた道が用意されているわけではないこと、自分自身で切り拓かねばならない道があることを知り、自らが選んだ道に至るまで、何らの保証もありません、不安の内に日々を送らざるを得ません。この浪人経験がドストエフスキイ世界への道を開いてくれるのでしょうか。『罪と罰』に触れた若者たちは、作品が始まって間もなく、酒で身を持ち崩し、娘をも売春婦の身に追い込んだマルメラードフと出会います。そしてなご娘から酒代をせびるこの卑劣漢が酔い潰れて「もうどこにも行き場がない」と呻いても、彼らは決して他人事と思いません。マルメラードフの呻きは彼らの胸に沁み、ドストエフスキイ世界に更に踏み入ってゆく導き手となるのです。このよう

なドストエフスキイと若者たちとの出会いを、私は数限りなく目撃させられてきました。

ドストエフスキイと若者たちが如何に出会い、この作家を通して彼らが如何なる青春の足跡を刻んだかについては、文教研のHP内に、事務局の相京さんの協力で、「ドストエフスキイ研究会便り」を掲載し、そこに二年前「予備校 *online* (グラフィティー) — 私が出会った青春 — 」というサイトを設け、延べ五十人ほどの例を報告してあります。

[4] ドストエフスキイを介した学びの永遠性

次に私が驚いたこと、と言うよりはドストエフスキイ研究会で突き当たった現実には、「時間」という大きな壁でした。つまり私は、予備校での浪人経験の下地が、若者たちのドストエフスキイ理解にそのまま繋がることへの感動と共に、その若者たちが更にこの作家と取り組み、彼が提示する様々な問題を正面から考えようとする時、限らない「時間」を必要とするという、当然と言えば当然の現実とぶつかったのです。上に記したように、ドストエフスキイ世界とは、近代世界が陥った人間疎外と神疎外の問題を、聖書の磁場の中で複雑な人間ドラマを通して考察してゆくという、人間学的にも思想的にも宗教的にも、実に困難で高度な問題性を抱える世界です。いざ若者たちがこの世界

と本格的に取り組み始めると、マルメラードフの「もうどこにも行き場がない」という言葉に感動するだけでは、なかなか先に進めなくなるのです。研究会の開始から十年が経ち、五百人ほどが学んだ時点で大きく立ち現れてきたのは、ここで学んだ若者たちが大学を卒業してから、ドストエフスキイとの取り組みを如何に続けてゆくかという問題でした。彼らが衝き当たったのは、この作家が『夏象冬記』の旅で出会った現実、即ちバアルとマモンによる人間疎外と神疎外の現実が、西洋に倣い近代化を進め、恐るべき戦争に踏み込んだ末に、敗戦まで体験した日本社会を、更に根底から侵食するに至った現実だったのです。文教研はその活動の場を予備校から、自ずと社会の中に広げて行つたと言えるでしょう。予備校「教育」の現場から「文化」を生み出そうという理想が、実は如何に遠くにあるか、私は思い知らされました。

十年ほどの試行錯誤の末に、私はそれまでの一年単位で研究会を回転させ、希望者には大学卒業時、或いは大学院までの継続を認めるという態勢を廃止し、原則として新規の募集も中止することにしました。代わって、研究会で学んだ後に、社会でそれぞれの専門の仕事に就き、或いは大学院に進み、その中で改めてドストエフスキイを学ぶ必要を感じるに至り、かつ私の下で学びたいと「自ら」やって

来た若者たちと、新たにドストエフスキイと聖書テキストと取り組むことにしました。この試みにも様々な問題はありましたが、ここでその詳細を報告する余裕はありません。その後十五年、この若者たちが社会の中で如何にドストエフスキイと聖書と向き合い続け、如何に思索を深め、各自の専門に生かしてきたかについては、先に記した「予備校 study」に多数の例を報告してあります。これを本論の「付説」としてお読み頂ければと思います。

おわりに

予備校を土台とする文教研に籍を置き、ドストエフスキイと向き合ってきた自分にとり、「予備校における本来的教育」とは、あらゆる面で末期的相貌を示すこの日本社会で、自分自身がなおドストエフスキイを学び続け、「ラザロの復活」の問題を始めとして、彼が担った問題を若者たちと共通の課題とし、それへの解答を探り続けることだと思っております。予備校「教育」の現場から「文化」を産み出そうという文教研の理想は、依然遙か遠くのものでしかありませんが、この理想が見失われぬ限り、また冒頭で確認した「三層にわたる緊張感」が失われぬ限り、如何なる困難の中でも、予備校も文教研も共に生き続けると私は信じています。

批判勢力としての存在価値

現代史研究会 里中哲彦

おびただしい数の言語をしゃべる七九億人近い人類のうちで、英語を母語にする人たちが特権的な地位にいる。しかも、その僥倖に感謝するどころか、英語を母語としない人たちに英語をしゃべることを熱心に勧めている。不公平きわまりない。英語圏の人たちは「フエア」(Fair)であることを大切にするというが、けしからんことにこのアンフェアは問題にしようとはしない。

こうした「英語支配」の構造は、インターナショナルリズムに見えて、そのじつ英米人にとつてのナショナルリズムではないのか。言語学者の田中克彦は『国家語をこえて』(筑摩書房)という本のなかで、「既存の言語はすべて特定の民族と国家の権力と威信に結びついており、またそこで作り出された強力な言語的首都の存在は、絶え間なく非母語の話し手を差別し、おとしつけるのである」と述べている。

わたしたち日本人の多くは英語コンプレックスをかかえている。結果、英米人を「高級人種」(中島義道)とみなし、英米人のように英語をしゃべることをかっこいいと思いついて入っている。言語の世界分布図は「帝国主義の夢の跡」(富岡多恵子)であつて、まことに「言語は権力である」(大石俊一)といわざるをえない。

英文学者の反骨漢・中野好夫は「英語を学ぶ人々のために」と題したエッセイで、英語を学ぶことの陥穽(おとまり)についてこう言及している(一九四八年発表)。

「語学が少しできると、なにかそれだけ他人より偉いと思うような錯覚がある。くだらない知的虚栄心である。実際は語学ができるほどだんだん馬鹿になる人間の方がむしろ多いくらいである」。新渡戸稲造や内村鑑三といった人々には、それまでの日本人に見られなかった「サムシン

グ」があった。そして、「それが新しい日本の指導に大きな力をなした」。ところが、その後の英文学者や英語の先生たちはどうか。「一人の例外もなしに、意気地なしであり、腰抜けであり、臍抜け」である。そこでこれから英語をやるうという人に望みたい。広い視野をもった、「人間に芯」があるような人物になってほしい。語学学習は「どうしたものかよくよく人間の胆を抜いてしまう」ような「妙な魔力がある」から「よくよく警戒してもらいたい」。

ここでいう「胆」というのは、人間の芯のこと、すなわち日本人としてのアイデンティティのことだろう。そこで、わたしたちのまわりにいる英語学習者を眺めてみよう。

英語を崇拜するあまり、英米人の発音や発想に気をとられ、話の中身を聞かず、上っ面だけを聞いているような人がゴマンといる。英語を使っているようで、じつは英語に使われてしまっている。そんな英語の下僕になっているような英語のセンセイがいる。英米人的な論理や態度をすべて無批判に称揚し、同胞の英語力のなさをあげつらう姿は、二流の英米人になろうとしているようでおぞましく、またひどく見苦しいものである。

明治の文豪・夏目漱石もまた、「私の個人主義」という講演のなかで、西洋という権威に迎合してしまう「他人本位」(西洋かぶれ)の生き方に警鐘をならし、独立自尊の気

概をもった「自己本位」の生き方を提唱したが、この「自己本位」の思想こそ、わたしたちが英語に向かいあうときに忘れてはならない心がまえではなかるうか。

現在、大学入試に大きな異変が起こっている。

二〇二〇年、「センター試験」が廃止されて「共通テスト」に変わったが、その「改革案」はとりわけ英語試験においてもっとも顕著であった。「四技能」とは、英語を「読む・書く・話す・聞く」という能力のことをいうが、当初、外部試験(英検やTOEICなどの民間試験)を導入して、「読む・書く」だけでなく「話す・聞く」能力を測定したいという狙いが盛り込まれた。

推進したのは、文部科学省や経済人(経済同友会など)である。一見、素晴らしい入試改革のように思われるが、問題はいくつもあった。世界に冠たる翻訳文化をつくりあげた、従来の英語教育における「功」の面への言及がなかったことがいちばんの問題点だが、制度面でも欠陥がいくつも露呈した。列挙してみよう。

一、民間業者による試験はパターン化しているので、受験機会が増えるほど、点数があがる傾向がある。それゆえ、裕福な家庭の受験生が有利になる。

二、業者試験が開催されるのは都市部に偏っている。こ

れは著しく公平性を欠くものである。

三、業者試験では「秘密性」の保持に問題がある。試験問題の漏洩はないだろうか（センター試験においては、その管理は徹底していたと言われている）。

四、スピーキング試験はどのような問題が出され、どのように採点されるのか。発音やリズムといった問題も含め、ジャパニーズ・イングリッシュはどの程度まで容認されるのか。そうした基準が示されていない。

そもそも四技能入試の導入には、「センター試験ではスピーキングとライティング試験をやっていない」という根本的な誤解があった。センター試験では、リーディング力とリスニング力を測ることで、発信力（スピーキング力とライティング力）も上手に測定していたのである。「有識者」ならそこを見抜かないといけないのに、四技能入試を推進した会議のメンバーはそこを見落としていた。

そもそもこの入試改革は、英語の「社内公用語」を推進する三木谷浩史（楽天の代表取締役会長兼社長）が大学入試にはTOEFLを使うべきだと当時の安倍首相に進言して動き始めた改革案だった。それが記述式問題や英語の民間試験の導入に結びついていったのだった。しかし、外部（現場の先生・教育界の研究者・受験生・保護者）から多くの

批判を浴びて、文科省の有識者会議は「実現は困難であると言わざるを得ない」とし、ついにこの構想は頓挫するに至ったのである（二〇二一年六月）。

いま日本の英語教育は、英語を学ぶことの「必要性」と「危険性」を深く考えたことのない、「胆」を失った政治家・官僚・財界人・教育者によって動かされている。

これまで予備校は「受験産業」でありつつも、「公教育」のあり方を自由に批判できる立場にあるといわれてきた。がしかし、二〇〇〇年以降、その軸足の比重を大きく「受験産業」のほうへかけ始めた予備校は、こうした動きに対して批判することなしに「恭順」したのである。不健全な「公教育」を批判しない予備校は、ものの本質を考えない、たんなる「受験産業」の一部にすぎないのではないか。

「予備校」、その不可思議なる存在の行方

日韓文化交流研究会 新井勝憲

一九七〇年代に新聞雑誌の紙面を賑わせた「新左翼」という語がほとんど死語と化して久しいが、ことによると、半世紀の後、「予備校」という言葉も、干涸らびた化石のように歴史の下層に沈殿してしまっているのではないだろうか。

戦後における日本の十八歳人口は、二度のピークを形成している。敗戦後のベビーブームの世代である一九六八年（二五四万人）、そしてその子の世代である一九九二年（二〇五万人）。その後はほぼ下降線の一途をたどり、二〇二〇年現在では一一七万人、二〇三二年には一〇二万人にまで落ち込むと予想されている。

「予備校」が、さながら祝祭空間のような状況を呈したのは、十八歳人口のピークを経験した二つの世代の出会いにおいてであった。団塊の世代、全共闘世代などと呼ばれ

もした親の世代は、従来の公教育では得られない知的刺激と狂騒を「予備校」に持ち込み、子の世代は受験地獄とバブル崩壊による先行きへの不安を紛らわせるかのようにすすんで〈祝祭〉に感応した。

十八歳人口の急激な減少と大学進学への価値の低下に加え、デジタル化の進行と新たな受験メディアの登場が「予備校」からその存立基盤を奪い取り、やがて「予備校」が表舞台から姿を消すのは、現実生活における人々の実践的活動を基底にして唯物史観を立ち上げたマルクスを持ち出すまでもなく、当然の理ではないだろうか。

さて、「予備校」における本来的教育とは何か。へあだ花のように狂い咲き、散りゆく「予備校」に「本来的教育」ほど似つかわしくない言葉はない。かつて「予備校」に参集した二つの世代は、〈本来のあるべき姿〉こそ「い

かがわしい」と喝破し、また「教育」が国家のイデオロギー装置として巧みに作動することを直感したからこそ、いまここでの生の充溢に賭け、「祝祭」を生きたのではなかったか。〈あだ花〉としての「予備校」が後世に語り継がれるに値するとすれば、その一点を描いてほかにない。

酒が脳髄に沁みだしたここからは、私的述懐に落ちる。

忘れ得ぬ人として、いまでもその相貌が鮮やかに甦り、ときに心中で対話を交わしながら、現在の自分の位置を確かめることができるのは、牧野剛さんだ。他の全共闘世代の面々が、過去を恥じるかのような大人ぶりを演じ、あるいは、今の講師は劣化していると自らの劣化を顧みることなく口にしてはばからない姿を晒すのを目の当たりにするにつけ、牧野さんは偉大だったなとつくづく思う。教壇に置かれた女性のパンティーを頭からかぶり、恬淡とした牧野さんの写真は、いま見ても心が和む。

フランスの哲学者ジャック・ランシエールが、独自の教育哲学を展開したその著『無知な教師』の冒頭で、興味深い話を紹介している。一九世紀初頭、フランス文学の講師ジョゼフ・ジャコトは亡命先のオランダでルーヴェン大学の職を得たものの、ジャコト自身がオランダ語をまったく解せず、一方受講した学生たちのほうはフランス語を解さ

ない。そこでやむなく一七世紀の作家フェヌロンの長編小説『テレマックの冒険』の対訳本だけを生徒たちに手渡し、それをもとに自分たちでフランス語を学ぶようにさせた。ジャコトは生徒たちにフランス語の基本的な要素について何の説明も与えなかった。綴りも説明しなかった。生徒たちは知っている単語に対応するフランス語を独力で探し、そして独力でそれらの単語をつなぎ合わせて、今度は自分でフランス語の文章を作れるようになった。『テレマックの冒険』を読み進めるにつれて、彼らの文章の綴りや文法はますます正確になり、小学生ではなく、作家が書く文章のようになっていった……。

教師（講師）はやたらに説明をしたがる。しかもその説明が先行する説明者からの借用であることの自覚がないまま賢しらに説明することで、「学識豊かな者と無知な者、成熟した者と未熟な者、有能な者と無能な者、知的な者とばかな者に分かれた世界という寓話」を強固に延命させ、生徒の中にある可能性を奪い取っていく。ランシエールがジャコトの知的冒険から引き出している哲学的洞察のひとつは、「無知なるものは別の無知なる者に、自分でも知らないことを教えられる」ということだ。

牧野さんは、疎外論だの物象化だの、そんな言葉がまったく通じない「無知なる者」を前にして、ただ「無知なる

もの」となりきること、教壇に置かれたパンティーを頭からかぶってみせる。そのとき「無知なる」塾生たちは、「無知なる」牧野という得体のしれないテキストに遭遇し、それぞれが独力でその読解を試みようとしたのではなかったか。ランシエールの言葉を借りるなら、牧野さんは、「偶然の出会い」という出来事」こそが「制度化し具現化した、不平等への信仰を覆すに足る力を持つ」という信念のもとで教壇に立つておられたのではないだろうか。

大人数の集団対面を前提とした「予備校」の行方については、耐用年数を終え、歴史の地層に吸い込まれるように、やがて社会の表舞台から姿を消してゆくと、先に触れた。では、河合塾はどうなるのか。「予備校」という言葉が社会的に認知されるようになったのは、一八八〇年設立の三田予備校あたりからで、たかだか二百年も持たずにその命数は尽きる可能性が高い。しかし、「塾」は、平安時代に大学寮で教える学者が自宅で別途弟子を採った「家塾」を嚆矢として、その歴史はゆうに千年を越える。大変革期にあった幕末には咸宜園（大分・廣瀬淡窓）、鳴滝塾（長崎・シーボルト）、松下村塾（山口・吉田松陰）、適塾（大阪・緒方洪庵）、洗心洞（大阪・大塩平八郎）、梅花塾（大阪・篠崎小竹）等が多くの逸材を輩出し、その他にも江

戸・京・大坂を中心に、無名ながらも高度な教育内容を誇った個人的な私塾が数多く存在したことは周知の歴史的事実である。人類が世界的な転形期に直面しているいま、河合塾もそろそろ、「予備校」という発想にとらわれず、その名にふさわしく、「無知なるもの」が「別の無知なる者」に出会い、新たな知の可能性を開いていく「塾」的な場を目指してはどうだろう。その際、ICTや映像を排除するには及ばない。最新の技術をも取り込みながら、公教育には実践不可能な、世界各地ともつながる「塾」的なネットワークを構築していけばよいのではないか。収益は、ICT等を活用した教育・受験情報の切り売り、大学への浸透、一般市民の生涯教育へのサポートなどで確保すればよい。肝心なことは、人を育てる教育産業としての中核に「塾」的な場を据えることだ。その創造のためには、そして有為な人材を引き寄せるためには、さまざまな「叛乱」を呼び込み、河合塾を再生へと向かわせる、「予備校」としての最後の「祝祭」が切に求められているように思う。存亡の危機にある河合塾に問われているのは、そのエネルギーが残されているかどうかである。

予備校における本来的教育とは何か

大学基礎教育研究会 大竹眞一

予備校の目的は、受験生を志望大学の入学試験で合格させることであるのは疑う余地はない。合格させるためには入試問題が解けるようにならなければいけない。そのためには学力をつける、学力をつけるには学んでもらわないといけない。「学ぶ」ということは極めて「自発的」なことである。

ゆえに、「学べ」と強要しても学ぼうとはしない。むしろその強要は「学ぶこと」にマイナスの要因となる。なぜなら、学ぼうとすること、考えようとするには大きなエネルギーが必要だから、自ら発する動機なくして学ぼう、考えようとはしないからである。むしろ、学ぶことは面倒なことでありそれを強要されることは迷惑であると感ずることだろう。

1 「学ぶ」ということ

動物は自発的な「学ぶこと」が、DNAに組み込まれているようである。猫の子は、狩りの仕方を親猫から学ぶし、子猫同士でじゃれあいながらその練習をする。何かを狩りの対象に見立てて一人で遊んでいることもある。彼らは自発的に学ぶ。楽しみながら学ぶ。《好奇心》の固まりのようである。何も猫だけではない。犬も、アザラシも、ペンギンも、動物の子供たちは、実に積極的に学ぶ。人間も動物の一つであるから、「学ぶこと」がそのDNAに組み込まれているはずである。

若者は、好奇心の塊であるはずだ。

好奇心をもつと自ら勉強する、好奇心があるのだから、なぜそうなるのかとかどうすれば解決できるのかとか、自ら

考える。もちろん、好奇心ですべて解決するわけではない。まだ学んでいないことの知識が必要なら、書物や先生に教えを請わねばならない。ここに、教育が介入する。そして、自分が納得するまで考え学ぶ。楽しみながら！

好奇心は「自発性」の大きな要素の一つである。

2 大学入試の数学の学び方

ここで、大学入試の数学の学び方について述べるが、数学に限らず他の分野でも、多かれ少なかれ、同じような状況はあると思う。

大学入試の数学で難しいといわれる問題の多くは良問である。良問は、理詰めで解決できるような内容で、いわゆる解法パターンとかをはずすような方向でオリジナリティをもった問題が多い。よく受験参考書にある解法パターンなどでは歯が立たず、

できるだけ深い数学の素養、考え方を身に着け、理詰めで追いかける

ということができるようになければならない、これが数学では一番重要なことである。受験生はそこを学ばなければならぬ。そうすれば、入試問題ぐらいなら必ずうまくいく!!

さらに言えば、断片的な知識としてのパターン化やマニュアル化は、楽しくはないだろうし、将来何の役にも立たない。それどころか、そのような方法で受験勉強をすればするほどその根底となるパターン化とかマニュアル化とかがすべてというやり方が身につく、

考えることの放棄につながる。

これでは、若い諸君の将来にとって最悪である。

もちろん、数学には知識も必要である。高校の数学でも重要な公式の一つに、座標平面上で点 (x_1, y_1) と直線 $ax +$

$by + c = 0$ の距離を求める公式 $d = \frac{|ax_1 + by_1 + c|}{\sqrt{a^2 + b^2}}$ がある。

これも便利なパターンととして丸暗記するだけでは使いこなせるとは言い難い。実はこの公式にある絶対値の中身の符号は、これらの点と直線の位置関係を表している。こうしたことは教科書を見てもどこにも書いていない。この公式の証明を考察する中で気づいてくることなのである。公式の証明のなかで、さまざまなかが見えてくる。だから、公式の証明は（公式を理解するうえで）重要なのだ。公式の証明は入学試験に出題されるから覚えなければならぬというの、ちよつとずれた感覚である。公式の証明の中には数学の基本的な考え方や思想がぎっしりと詰まっ

ている。公式の証明を学ぶと、こうした基本的な考え方や思想が身につくのである。定理や公式は、何千年にもわたる数学の歴史の中で多くの先哲が関わって作り上げたものである。それを学ぶということは、

先哲の知恵をありがたく受け取りそれを身に着けるということである。

3 現在の受験勉強の現状

現在の受験勉強の現状はどのようなものか。このあたりから考えてみる。

効率化を望むことはエネルギーの消費機関である人間にとって自然である。しかし、効率化は思考を停止する。私の日々の行動も、実際相当効率化されている。朝に家を出て地下鉄の駅まで徒歩。駅では改札機を通り抜けホームに立つ。電車が来たら、それに乗り……と、ほとんど考えずに行動している。

数学の勉強で効率を求めることも自然である。公式、定理も考え方をパッケージにしていつも用意しておくものがある。もちろん、公式、定理はその証明や用いることのできる条件など、十分に身に着けておかねばならない。丸暗記して使えばよいという効率至上主義の受験生はときにおかしな質問を持つてくる。

*

「先生、おかしいんですけど。」

「何が？」

「ええっと」

$$-1 = (-1)^1 = (-1)^{2 \times \frac{1}{2}} = ((-1)^2)^{\frac{1}{2}} = 1^{\frac{1}{2}} = 1$$

となるのですが……」

この生徒は、 $-1 = 1$ が得られて不思議がっている。 -1 が 1 に等しいはずがない。

指数法則の典型的誤用である。絵にかいたような誤答例だ。

$$(-1)^{2 \times \frac{1}{2}} = ((-1)^2)^{\frac{1}{2}}$$

は成り立たない。指数法則 $a^x \times a^y = (a^x)^y = (a^y)^x$ は正の数、 a と x は実数) は負の数 $a = -1$ に対しては適用できないからである。

ここで彼の第一の問題点は、公式を覚えるだけで証明を学んでいないことである。証明したことがあれば正の数 a に関する定理であることは深く理解しているはずだ。

「指数法則は負の数 -1 に対しては適用できないよ。」

「先生、僕、調べたのです。ネットに『指数法則は複素

数の範囲にまで拡張できる』と書いてありました。だから負の数―に対して適用したのです。」

筆者は思わず笑ってしまった。誤りである。

「ネットに書かれていることには、誤りがかなり多い。」

「えっ、そうなんですか?!」

ネットに書かれていることを、根拠もなく、納得もせずそのまま正しいと思っている。彼の第二の問題点は、思考が停止していることである。

*

このように数学の受験勉強において、いわゆる解法パターンとか受験テクニックだとか言う断片的な知識を使う練習ばかりするようなかなりまずい勉強をしている人が多い。これでは数学ができるようにはならないばかりか、受験対策としても効率が最も悪い。そして、先程述べた《考えることの放棄につながる》のである。

パターン化の弊害は、何も考えずに当てはめることと、そのパターン以外のことを認めないということにある。もちろん、根はひとつ、

断片的なパターン化、マニュアル化は思考を停止させるということだ。数学は思考の学問だから、思考を停止する

ことは数学から最も遠いということになる。数学だけに限らず、およそ学問は思考抜きでは存在しえない。

4 受験勉強は大学入試の合格だけが目的ではない

極めて本質的なことであるが、受験勉強というのは大学入試の合格だけが目的ではないことである。大学入試はスタートにすぎず、大学に入ってから、さらには将来の人生のためにある。そこで身に着けた、さまざまな考え方、知識、そうしたものが直接に間接に将来の勉強に、さらには将来の人生に、様々な示唆を与えるはずだ。この将来まで視野に入れたような勉強は、すでに述べたような、

《できるだけ深い数学の素養、考え方を身に着け、理詰めで追いかける》

ということである。ちよつと逆説的だが、このような勉強が合格への最も近い道となる。受験だけを目的とする断片的な、解法中心の、パターンに頼る勉強はかえって効率が悪い。大学に入ってから、うんと楽しくさまざまな勉強するために受験勉強をするのである。

5 予備校における本来的教育とは何か

ある予備校のパンフレットに、「授業でわからないことは

後に残さず、すぐに質問することが重要です。」と書いてあった。驚いた。すごくいい勉強法のような気がするかもしれないが、誤った数学の勉強法に陥る罠が隠されている。

何が分からないのかも分からないうちに「この問題、わかりません」と質問して、先生に答を乞う、こんなことで学力がつくことは決してない。質問して教えてもらうことが勉強だと錯覚している生徒もいる。質問だけで学力は伸びない。質問して学力が伸びるためには、生徒もそれ相応の準備が必要である。生徒のひとりごとが何か疑問があるとき、その生徒自身がそれについて十分に考えさまざまな思考をして懸命にそれを追求するとやがてその疑問の本質が分かり始める。その上で疑問が解決したとき、単に答を得るだけでなくその疑問に関してほんとに深く理解し、答以上のことを得るかもしれない。こうしたときに学力はぐんとついている。

疑問とは、その答えがわからないという単純な構造だけではない。その疑問がどうして起こるのか、なぜ解決できないのか、それがわからない。だから答を見出す方法がわからず、答がわからない。

「授業でわからないことを、すぐに質問する」と、少なくて、

わからなかったことをじつくりと考える機会を失ってしまう

ことは確かだ。質問の答えてもらっても断片的な知識を得るに過ぎない。そんなことではまたすぐに同じように行き詰まってしまおうだろう。その上、

自分で考えて理解できたときの喜びも奪い去ってしまう。

この喜びは実際に経験してみないとわからない。家に帰ってからわからないことを、もう一度ゆっくりと考えてみる、時には数日考えてみる、自分で考えてわかることも少なくはないはずだ。

予備校の教育は、教科内容を表層的に教えることではない。深く、心底理解するまで学ぶ、そこまで生徒に要求する。もちろん一年という短い期間に、そうした教育が完成するのはかなり厳しいわけだが、少なくとも、これを目標して生徒に対応していくのが、本来の目的である大学入試に合格するのに最も有効な方針である。生徒は学問への好奇心が養われればおのずから学力をつけていくものである。それも楽しみながらである。

予備校の講師が直接的に生徒の学力をつけているのではなく、あくまで、学力を伸ばしていくのは生徒自身であ

る。筆者は、予備校の講義では数学がいかに面白いものであるのか、という事が伝わればよいと思っている。というか、講義しているときも唯々数学を楽しんでいるだけだ。この問題はこんな背景からつくられていたのか、こんな考え方、こんな観点もあるのか、入試問題ですら数学的に面白いことが多い。

講師が数学を自ら楽しむこと、予備校における本来的教育は、結局これしかないのかもしれない。

6 予備校講師を取り巻く問題

講義しているときも数学を楽しんでいるなどと言っていると、「お前は能天気なやつだなあ」と言われかねない。

予備校講師をとりまく様々な問題点があるからだろう。

最も大きいのは、大学入試問題そのものに関する点だ。入学試験で試される学力の質も、受験する大学の出題の質により、必要とされるものが異なる。大学の出題の内容はその大学で学ぶために必要な学力を試すものと考えれば、それぞれの大学の社会の中で演ずる役割に応じたものとなるはずである。大学・大学院の大衆化に伴って、大学の目的・質も多様になってきている。

・本来の大学の目的である研究をするための学問の府、

・実務や技術、資格を得るための実務・技術者養成機関、
・その他、宗教など固有の目的を持つ
それぞれに、入学試験の意義も異なるので、それに対応する出題の質が用意される。

学問の府では、出題される先生方はいわば自らの弟子を選ぶ試験であるから、それに応じた読解力・分析力・思考力を見出すような出題となる。一方、実務・技術を養成するところでは、その基礎となるべき学力、適応力、勤勉さなどを評価するような出題となることが多いだろう。その他、大学の多様化に伴って入学試験も多様化していく。予備校における本来的教育になじまないような出題をする大学も増えてきている。

そのような大学を受験する生徒は、入試問題は易しいのに、なぜそんな難しいことまで勉強しなければならないのと思うかもしれない。しかし、予備校の本来的教育の線が崩せば、もはや予備校の存在価値はない。ますます講師にとって難しい時代に入ってきたなあ、という感がある。

問を立てる

経済研究会 公文宏和

入学試験問題に単純な漢字の書き取り、計算問題などがある。一義的に答えが決まっているものである。修得度を確かめるものだろう。高度な推論や、演算手続きが必要で、解答に至る過程を評価するような高等な問題もある。いずれにしても大学は足切りの為ではなく、よい学生を選抜するために入試を行っている。予備校の模擬試験はもっぱら形式と傾向を真似る。真似るべきは、どのような学生に入学許可を与えるかという理念であるのだがなかなかそうはならない。

一九七九年の共通一次試験の導入に際して、反対する声が上がった。文部省はそれなら二次試験で工夫しろと言った。工夫の一つが小論文入試である。小論文問題の特徴は、解答者に問の再指定を求めるところにある。

課題文が問題提起的なものもあれば、設問が簡単な問い

であることもある。たとえば、「法と自由についてあなたの考えるところを述べよ」であったとする。やみくもに法について知っていることを書き連ね、また自由について書き連ねると焦点がぼやけた散漫な文章にならざるを得ない。また自分の考えではなく教科書の知識の受け売りである。「あなたの考え」を述べていない。

設問を再指定して焦点をはつきりさせる必要がある。受験生なら、教科の知識を生かして民法と個人の自由の関係に絞って議論してみようとするだろう。受験生が不得手なのは設問の捉えなおしである。私なら設問をこのように理解して論述すると宣言することが再指定である。授業時間中、先生の話の話を遮って質問をすることが許されない、じつと黙って聞くだけの教育を受けて来た受験生は設問の再指定など思いもよらない。もちろん数少ないエリート校で自

由な雰囲気があふれている学校は別だが。

予備校には自主ゼミという課外活動がある。教科の枠を超えてものを考える機会を作ろうと思つて英語の長文を読みながら議論をすることを続けてきた。左派が左派の文章を読んだのでは面白くない。素材は、『エコノミスト *The Economist*』と『フォーリン・アフェアーズ *Foreign Affairs*』から選んだ。前者はイギリスのインテリが読む雑誌であるから英文がむづかしい。後者はアメリカの雑誌で平易である。ゼミに参加する受験生の中には、帰国子女もいて僕なんかよりずっと英語が読めるものもいる。ある時、経済研究会で外国人の思想史専門家を招いたことがある。英語の報告を大学の思想史の専門家が通訳した。あとで、自主ゼミ参加の帰国子女がぼくにあの通訳は大事なところを飛ばしたり間違つたりしていたよと教えてくれた。

記事や論文一本読むのにだいたい、十週くらいかかった。短い文章をめぐつて様々な議論をして何が問題かを話し合つた。ここで問いを立てるということを学んだのである。問われて初めて答えるという受け身では、大学に入學後、勉強する動機が失われる。大学に入った後も、修士号をとつたほうが就職に有利な工学部生や公務員試験を目指す法学部生などお勉強の大学生もいるが、相変わらず受験勉強である。なかなか、自分で問いを立てそれを追求する

という具合には行かない。小論文入試を積極的に取り入れた大学の狙いは大学入学後も勉強の動機を失わない学生を選びたいところにあつた。

小論文入試が一種のブームになつて多くの大学が採用するようになった。それほど高邁な動機のない大学も参加した。点数がどのようにつけられるかよくわからない小論文が、恣意的な足切りに使われたのではないかと思われる。今考えれば、女子学生の足切りに使われたかもしれない。特に医学部で。点数を配分しておきながら小論文は適性を見るためだと公言するところもあつた。しかし、慶応の藤沢キャンパスはそんなケチなことをしなかつたように思う。女子学生が束になつて合格していったからである。

大学は一人でもいい学生をとりたいたいと考えている。偏差値ランキングだけで大学を比べられるとつらい思いをする。神戸大学法学部でぜひとりたいたいと思う学生が入学手続きをしなかつた。あとで調べたら、東京大学に入学していて臍をかんだ。入試問題に工夫するのは偏差値ランキングを出し抜いて優秀な学生をとりたいたいからである。

あなたの考えを述べよと要求されているのに、生意気なことを言つてはいけないから、正しい知識だけを記述しなさいと高校の先生は指導する。この先入観を壊すのが小論文指導の第一歩。

受験生にいったのは大学の熱意にこたえて遠慮せずに考
えるところを書いて来いといったことくらい。こんなところ
がぼくの予備校での実践だ。

経済研究会余録

先の文章で、外国人の思想史研究家を招いたときの話を
書いた。これと同じように、経済研究会では——この一
月で一五一回を重ねるが——、その中で何度か外国から研
究者を招いたことがある。そのうち印象に残っているもの
を記しておく。

フランスのレギュラシオン派の第一人者ロベール・ボワ
イエ氏を招いたことがある。レギュラシオン派は、市場に
ついて独自の分析装置を持っている。市場といえば、ミク
ロ経済学という名称で大学で開講されている。これは新古
典派といわれる学派の演繹的理論である。経済学は元来、
経験科学であるはずなのに、本末転倒して観念論になっ
た。その理論が司法試験のような資格試験にも、公務員採
用試験、企業の採用試験にも使われるので、履修生が多
い。そしてこのミクロ経済学の市場こそが市場だと人は思
い込んでいる。これに対して、レギュラシオン派は、市場
の登場者が利害対立の調整をすることを通じて、市場が形
成されるという、新古典派とはまったく異なる市場観を提

供する。ボワイエ氏のこのレギュラシオン理論は新鮮で
あった。

また、ある時上海政法学院の法哲学者倪正茂（ニイ・
ツェンマオ）さんを招いた。日本で法哲学といえば、さまざ
まな実定法の基礎を明らかにする学問だと思われる。
しかし中国の法哲学は、実定法のあらゆる分野をカバーす
る包括的法学である。民法から商法、刑法から刑事訴訟法
まで、倪さんはあらゆる分野をカバーする著書をたくさん
出版していた。人治に対して、法治Ⅱ法の支配を実現する
ために苦闘している実践的法学者の姿は、当時市場経済へ
の移行を進めていた中国の新しい息吹だと感じられた。

河合塾と私

日韓文化交流研究会 中田勝也

大学受験科生として河合塾に在籍し、大学院を経て講師として再び身を置くこととなった私は、部分的ではあれ、河合塾の産物であり、言うなれば「予備校河合塾の申し子」であるとの自覚を有している。したがって、私人の履歴とともに河合塾における教育の意義を確認したい。

八〇年代を席捲した校内暴力のイメージを地で行く中学生活をそれなりに楽しく終えようとしていた私は、高校入学試験の一週間前に近所の書店で幸運にも「愛知県公立高等学校入学試験過去五年問題集」を発見して受験勉強を開始し、一日一カ年分の課題をこなして入学試験前夜に受験勉強を終えて高校入学を果たした。小学生の頃、地域の子供会のキャンプに参加して川で溺死した児童の親が引率した子供会役員の母親達を訴えたという報道に接し、持ち回りの役員を前年に引き受けていた自身の母親の存在を想像

した私は、その訴訟案件のやりきれなさを痛感し、その実像も知らずに弁護士なる職業を目指そうか、などと思う一方で、いや消防隊員の方がカッコよく人をレスキューできるのではないか、といった漠たる思念も抱きつつ、河合塾お得意の偏差値他業界基準の彼方から高校に入学したため、入学後は想定外の優等生という評価を得てしまい、レスキュー隊員への道が狭まるのに反して大学入学という不遜な未来が現実味を増していった。司法の道については、知れば知るほど世間的な名誉の香りがつきまとう点に疑念を抱き、やはりまずは人間そのものを考えようという法学部から教育学部へ、さらには人類学を経て、人間や世界の根源へ、学問の始まりへ遡行せんとして哲学へと志望を変更（偏向）させていった。

サッカーに熱中しながら塾・予備校とは無縁に過ごした

私は、幸いなことに、高校の授業と自学自習を待みに臨んだ二次試験の数学で返り討ちに会い、峻拒したはずの「高校四年生は河合塾で」という当時の名古屋地域高校生お馴染みのスローガンを甘受して、一九八六年、人生初めての塾通いを開始した。

厳密に言えば、河合塾初体験は前年度の高校三年時の「オープン模試」公開解説授業だった。名駅校（18号館）の規模と私服姿の大受生たちにわずかに圧倒されたが、何よりも驚いたのは、模試の英語文を「これはつまらないから解説しない」と言い放ち、当該模試とは異なる英文を配布・解説し始めた英語講師の登場であった。「そんなアホな！」と思う一方で「なんかわからんけどオモロい！」と共感した時、その年度の私の不合格は決していたのだろう。こうして開始された塾生活は、これぞまさに「予備校における本来的？教育」というものであったと思う。全講師とは言わないが、少なからぬ講師達は教材の設問を「必要以上に、手取り足取り」説明することはなかった。それよりも、主題の本質、出題の背景や前提、さらには日々の感慨や自らの課題、世界や社会の諸問題等々、要するに、講師という一人の人間が、自身の生で学び考え、思い知った知見・経験を人生の後輩達にぶつけて来るといふものだった。だから塾生たちも自分なりに「人間や社会」を感じ、

考えざるを得なかったのである。また、このスタイルが「いわゆる受験学力」の向上に貢献しなかったはずもない。なぜならば、教材の設問の細部は自ら考えることとなり、また解答を常に自己採点するため、配点の妙なども自然と理解できるようになるからである。

当然ながら、講師の話題は知的・学問的背景にも及ぶため、例えばジグムント・フロイトの精神分析などは、現代文や漢文、英語など数名の講師が言及し、また書店や辞書他でついでながら主体的に調べもしたために知識を蓄えてしまい、結果的に国公立大学二次試験の英語問題でフロイト入門編ともいべき長文が出題されるという〈必然的偶然〉に見舞われることにもなったが、その際、和訳すべき傍線部の内容に不足を感じ、英文外の知識を動員しつつ存在しない架空の関係詞節を虚構して捕捉したことを記憶している。文章全体の内容が既知のものゆえに、試験時間も大幅に節約でき、英語の試験中に合格を確信してしまったが、もし仮に、その補足が減点・不合格に帰結するならば、そのような大学はこちらから願い下げだという気概もともなっていた。こうして英文読解を相対化する姿勢には、中部地区小論文科改組（解体？）により英語科に転属することとなった馴染みの講師が指導経験蓄積を意図して授業後に催した英語読解自主ゼミ参加の好影響もあったは

ずである（ついでにゼミ後打ち上げの一杯の旨さを知り、後には講師の転居の手伝いや家庭教師紹介により経済的恩恵にまで浴することにもなった）。

さらに、授業と同主題（作者も？）の評論が模試に出題された旨を批判的上申に及んだ現代文講師が、即座に教材科に電話をかけ、にわか確認できないながら誠意のこもる謝意を示した時には、生意気盛りの若造の軽拳を大いに恥じるとともに、当該有名講師の塾生対応の真剣味に圧倒されかつ畏怖したことにも言及しておきたい。

枚挙にいとまが無いこれら貴重な経験を積み重ね、河合塾にて「主体的学び」を遂行した私は、志望大学合格直後の三月、哲学専攻を踏まえて選択したフランス語・ドイツ語の参考書を手して先取り学習を開始した。英語は大学では自習の対象であった。入学後程なく、現在はドイツの大学で講じる、私が学んだ現代文講師の著書が刊行され、名古屋今池の書店で購入に及んだ際、著者の友人だという店主に動機を問われたが、答える以前に元塾生であるという事実は洞察されていたと思う。この事は著者に伝えておこうと彼は言ったが、書店近くには私が足繁く通うことになる映画館（館主は河合塾講師でもあった）も在り、こうして繋がる文化圏・人間関係なるものがかつて日本の各所に濃密に存在したことを、今われわれはあらためて考え直す

べきではないだろうか。

当該著作については、哲学・精神医学の領域を横断する内容の刺激的な意義を、大学一学年も終えていない私は捉え得なかったが、この時点では「より立ち入った間に対する正面切った解答はもっていないようにみえる」と著者が言及している精神医学者・木村敏氏の論究が、後に深く静かな感動を持つて私によりみがることになった。

大学入学を課されたこともないにもかかわらず博士課程まで籍を置いてしまった大学を離れて河合塾へ舞い戻り、世の教育観そして河合塾自体の変質を感じつつ講師生活を始めた私は、京都大学退官後に河合文化教育研究所の主任研究員となられた木村氏を中核に同研究所が主催する「河合臨床哲学シンポジウム」への参加を望みつつも、講習会他の業務でそれを果たし得ないでいたが、数年前ようやく願ひ叶って上京した。担当職員の話では、東京大学講堂に参じた河合塾講師はおそらく私だけであったが、それは甚だ残念なことである。その際、若い医学者の発表に対する木村氏のコメントが、先述の元河合塾講師の著作で言及された当の概念をめぐるものであったのだが、この碩学は、三十年の間、「Intra-festum イントラ・フェストウム（祭りの只中）」の意義について臨床の現場で不断に考え抜いて来られたのだとあらためて思い知るとともに、学問と時間

というものがもつ重味について考えさせられ、席をあぶれて座っていた階段教室の床の冷たさや腰の痛みなどは消えてしまっていた。

私の河合塾での学びは、例えば「アクティブ・ラーニング」転じた「主体的学び」、「高大接続」といった流行の施策の諸々を含み、また「一人一人を大切にす」「第一志望大学合格」といった現行スローガンを超越したものであることを疑うことはできない。私は自然に河合塾を介して高校と大学を接続し、大学入学後は主体的に学んだのである(例えば、大学二年次に休学し、一年は線路工夫と家庭教師で資金を得、続く一年は哲学研究の備えもありヨーロッパを知るためにフランスへ勝手に遊学したように)、また運よく志望大学に合格したとはいえ、もし「第一志望大学合格」をなしえなかったとしても、「河合塾で学んでよかった」と口にしたであろうことは断言できる。

したがって、「予備校における本来的、教育」の成果の一部であると自負する私は、今現在も河合塾は、まさに「intra-festum」において、未だ始まってもしなければ既に終えられてもいない可能性のうちに在り続けているのだと信じてやまない。

河合塾の果たすべき役割について

進学教育事業本部 福永就夫

「予備校の『教育』とは何か」といったお題に沿いながら少し私の考えを述べてみたいと思います。青木和子先生が予備校は『教育』の本来的目的である『人格の完成を目指す』『教育的磁場』であるという言い方をされていますが、故茅嶋先生が毎年開講説明会で述べられておられたお話を思い出します。「我々河合塾というのは、高校と大学をつなぐそういう役割を果たすんだ」という話をされておりました。我々予備校の主な対象である十八歳という時期は、大学に進学するのをきっかけに、人間としての人格の形成であったり、人生について考えたり、将来につながる興味の見え方であったり、いろいろなことを考える、そういう時期なのだと思います。その時期、つまりは高・大の接続領域に我々はかかわっているわけです。

文部科学省や大学が、今回「高大接続改革」と言っており、大学入学共通テストのことばかりが世間では注目され

ておりますが、本来の高大接続改革は大学自体の改革が先であり、そこで育てたい人材像に合わせて大学入試が変わっていくものです。ただし、現実には、大学が求める人材像とそのために必要な学力・素養がさらに高尚なものになったとしても、高校現場での教育がそこについていけないのが実態で、そのギャップはさらに広がることになっております。実はそこを埋めることこそが我々河合塾が果たすべき役割なのではないかと考えています。

他の先生のご意見で、我々河合塾の授業の側面として、「自由競争にさらされた商品としての授業」と、一方で「教育としての質を担保する授業」という表現がされておりました。商品としての授業という部分は予備校として大学に合格させなければいけないという使命があり、そのために各教科で入試問題を徹底的に分析し、テキストとしては非常に質の高いモノを作っていますので、それを使えば

ある程度の学力がつくという、そういう授業が担保できているところは河合塾の最も強いところだと思います。ただしそれだけで本当に良いのかというところが、先生方が議論されている部分だろうと思います。我々が、塾生自身の知識の構築にどこまで関わられたかといったことが「予備校で教える」ということが持つ本来の意味なんだと青木和子先生は述べられています。高校と大学を繋ぐ人格の形成時期に我々は関わっているわけですから、そこに対して我々は、授業を、「テキストを」教える場ではなく、「テキストで」それをあくまでネタとして使いながら、人格の形成であつたり知的好奇心の涵養ということを行っていく。そのことを河合塾では授業を通じて先生方はやっていただいていたと思っております。そのことが予備校である河合塾の本当の姿だと思っております。

ただし、そこには課題もあります。目の前の生徒は常に変化しているがそのことに気づき対応できているかという点です。入試が変わってくると予備校に来る生徒も変化してきます。特に近年の入試状況と我々の募集の結果を分析した結果では、決定的にいままでと違うのは、私立文系志望の浪人生が予備校に来なくなり始めている点が特徴として挙げられます。これは私大がかなりの数の合格者数を増やしてきており、今後はおそらく文部科学省が合格者数の

定員超過率の縛りも無くすのではないかという噂も立っています。そうなると私立の文系、さらにはそれに連動して国公立の文系の生徒は、ますます大学に合格してしまうと思っております。結果として我々が浪人生として受け入れるのは国公立の理系の生徒が中心になってくる。そのような変化が今後起こってきます。

このように、毎年やはり目の前の生徒はかなり変化してきておりますので、そのことを敏感に感じ取り、ある程度そういったところに合わせた形で、青木和子先生の述べられているように教育としての質を担保する授業というものをいかに構築していくかということが大事なんだろうと思えます。

一方、結城先生は、前回の合同研究会で生徒と教師が向き合って「人間力で勝負していくんだ、それしかない」と述べられています。やはりそこをしつかり担保していかないといけない。これから変化してくる生徒に対応しながら、我々がどのように人格形成にかかわり大学に繋いでいくかということ、その部分での柔軟な対応が必要になると思えます。いまの生徒は、中学までの塾が徹底的に手取り足取りのやり方で関わっています。個別指導塾が流行っているのがその典型です。そのため学習力がかかり落ちておりますし、自ら学ぶということができない。授業で知的な

好奇心を植え付けても、じゃあ自分でどのように探究し学ばよいかわからない。河合塾の授業では、英語は週に三コマくらいしかなくそれだけで英語の力が付くわけない。自分で学習する部分が絶対的に必要になるわけですが、いくら授業でハツパをかけたとしても、実際に自分でどのようにやったら良いかわからない、そういった生徒が非常に増えております。そのような状態を踏まえたうえで、どのように生徒に投げかけていくのか。いままでは授業中に全体に対して投げかければ済んだかもしれませんが、これからは一人ひとりにちゃんと向き合ってやらないと、たぶんそれは伝わらないのではないかと思っています。

もうひとつ申し上げるとすれば、今回コロナで活用した、リモート学習・オンライン授業の件です。実は新型コロナウイルス対策でオンライン授業をやったことについて、大学受験科生にアンケートを取りました。結果として対面授業と映像授業ではどっちがあなたに向いていますかという質問では、全体の八割が「対面授業が向いている」と答えています。河合塾に来ている生徒、特に浪人生は対面授業じゃないともたないわけです。「なぜか」という質問には、「モチベーションがもたない」それが理由となっています。大学受験科の授業は一週間、朝から夕方までずっと授業を受

けなければならぬのに、それを対面でなく自宅自分で主体的に見ていくというのは、実際にはもたない。それで「計画的にできなかつた」という答えも出てくるわけです。ただし、そうは言っても一割ほどの生徒は映像授業でもいいと言っている。これは自分のペースでやれると言っているわけですが、この自分のペースで自立してやれるという生徒は、昔は非常に多かつた。勉強の仕方がわかつていて自分でどんどんやれる生徒がいたわけですが、そういった生徒はたぶん今は大学に受かつてしまつてあまり予備校に来ていない。現役生の塾生の中にはそういった生徒がまだいるのかもしれませんが、そういった生徒は東進などの映像主体の予備校を選んでいる可能性があります。

我々はやはり八割の大受生が対面を望んでいる以上（グリーンコースにおいてもやっぱり対面授業をずっと望んでいた）、対面授業が我々の授業の姿だというのが今回改めてわかりました。ただし、一方で入試に必要な全教科の学習を効率よくやるため、あるいは、不得意科目の学習をひとりひとり単元別に学ぶ、そういう場面には、映像やICTを使った一人ひとりに合った授業・手法で学習できる仕組みを準備していくことは必要だろうと思っています。スポック（SPOC）という双方向でオンラインを使ったバーチャルな集合授業をやる手法では、各教室は少人数で

もオンライン上では全体で多人数の授業に仕立て上げ、全国の様々な生徒の意見や解答を聞いたりできます。そういった手法なども研究していかねばならないと思っています。

映像授業で今回改めてわかったことは、スタジオで収録したものと、無人の教室で収録したものの、生徒がいる教室で収録したものの三種類があったのですが、収録した授業の中身を見ると先生の授業スタイルがぜんぜん違いました。やっぱりそれぞれの状況に合わせた授業スタイルがありますので、それが映像授業の難しいところだと思っています。

今後、河合塾は対面授業というものを主体としながらも、必要な場面では映像を活用するといった場合、どういうスタイルになるのかということの研究しないと、簡単に映像を使えばいいということではないということを今回改めて認識しました。この部分は今後さらに研究を進めていきたいと思っています。

「予備校文化」の三大特徴

牧野 剛

■この一文は「キムパの会17年のあゆみ記念文集」である『この街を歩いた夏』（2009年）に収録された『キムパの会』の存在理由・意味への一考¹の後半部分を抄出したもの。「予備校文化」を作り、背負った牧野さんが「書き残す絶対の必要と責任が私にもある」と、「キムパの会」と竹国友康さんのことに触れたもので、註釈はすべて「記念文集」からの引用です。なお、今回掲載にあたり、新たにタイトルをつけ、一部改行し、補充も行いました。（相沢範昭）

「キムパの会」を主宰し、二〇年に渡る、日韓の民間レベルの、若者たちの交流を続けてこられた竹国さんたちの行動は、特筆するに値するものであるに違いない。その内容は、他の人たちの証言によるとしても、彼の書いたものや発想については、ここに書き残す、絶対の必要と、その責任が、私にもあることを、感じて¹いる。^{註1}

さて、その一つ。竹国さんの著書『ある日韓歴史の旅 鎮海の^{チネ}校』では、たとえば、日清・日露戦争の主だった戦場が、実は

この街を歩いた夏

キムパの会
17年のあゆみ
記念文集



坂道で、風が吹く
この街を歩いた夏
あの頃と 同じ景色
あなたの声聞いている
今までもこれからの間で
一人立ち止まることもあるだろうけど
変わらない想いを手がかりに歩いていこう

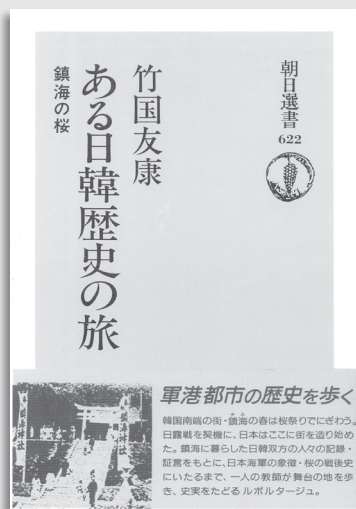
●註1：日韓学生交流活動「キムパの会」は、1991年秋に設立準備を始め、翌92年夏に最初の交流会を韓国プサンでもった。以来、日韓の政治的な「波」にときにもまれながらも、そのかん、一度も途切れることなく、2007年夏まで、双方の若者たちが16回をかぞえる交流会をとおして出会いを重ねた。その数は、1000名をこえる。そして、一年一年ごとの地道な活動を協働してすすめるなか、友情が生まれ、信頼関係も築かれていった。この「事実」は、これからも、かわらず、残る。

【竹国】

「清・露」や日本国内でもなく、その戦争の名前とは違って朝鮮半島や朝鮮周辺であったこと、又、それ故に、「勝利国」日本が、その「勝利」の結果、「勝利」を祝って植えた鎮海の桜が、侵略者日本の象徴として、戦後韓国人達に切られたこと、しかし、その後、又さまざまな理由によって再度植樹されたことが書かれる。そののみならず、日韓・日朝の交流史として記憶されるべき、もっと細かいが、読む者の心を打つ、民間レベルの交流が、実は、歴史の中で数多くあり、その一つ一つの事実によって、書きつけられて行くこととなる。これこそが「キムパの会」の形成へつながっていくものだろう。【註2】

ところで、こうして多くの人々が考えても見なかった発想や展開を、竹国さんは、どうしたことによって考えたのか、そして、そのことを通して、何を目標として会を進めて行こうとしたのか。それには確実ではないが、次の様なことが深く関係していたと思うのである…。

河合塾東京地区の英語科の講師菅川進一は、自著『罪と罰』における復活』（河合文化教育研究所刊）の「あとがき」において、次の様に書く。《大学紛争の後、…河合塾にお世話になり…約二十年間を過ごしてきた。河合塾の中にはどこか旧制高校的な



●註2…キムパの会の設立趣意書に「政治的な大文字に踊らされない」と書いたとき（1991年）、私は、たぶん、国家や民族を自明視する言葉と距離をおき、それと「向き合う言葉」を構想しようとすこし力んでいたのだろうと思う。

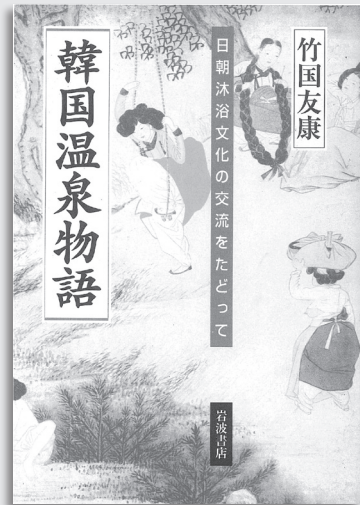
その後、日韓の「あいだ」という現場を歩きながら、『ある日韓歴史の旅 鎮海の桜』朝日新聞社を書いた1999年には、私は、「地域」という視点を立て、お互いの顔が見え、名前を呼び合うことのできる「関係」を築いていくことを提起した。そして『韓国温泉物語 日朝沐浴文化の交流をたどって』2004岩波書店を書くころには、その顔を思い浮かべ名前

気風も存在し、世を向こうに置き世を憂う慷慨の志士的な姿勢や細かいことには拘泥しない伸びやかな雰囲気もそこに見られ、…風通しのよい空間であった。…エリート大学の階段から一時的にでも締め出された若者が集う「予備校」という空間が持つ、…戦後日本の特殊かつ興味深い一現象としての「予備校文化」ということがあるとすれば…》

ここに書かれた「旧制高校的な気風」、「予備校文化」は、私見によれば、ことに「キムバの会」をも買っていたとも思われる。

その理由の第一は、先に書いた竹国さんの、この会を作るに当たったの発想そのものが、まずそうであった。「予備校文化」とは、芦川が書くように、「予備校」や「予備校生」の在り方は、「世を憂う慷慨」・「細かいことに拘泥しない志士的な姿勢」に明確に表されているのであろう。それは、大学や学問がその内容や行動・発想に一般社会的な表面としての価値や理解・了解にこだわることにあるとすれば、むしろ、裏面としての価値や、真実の方に重点があるものと言える。つまり、世間の価値への反逆としての視点である。竹国さんの著作がそのものだ。

第二に、それ故に、その内実は、人々の表面的な価値や華ばな



で呼びかける相手とは、いま私が直接知っているだけかだけでなく、時空をこえた未知の「だれか」のこともあるのではないのかとようやく気づいた。その過去・現在・未来の「だれか」と私（たち）のあいだに、ゆたかな「地域」や「関係」がひろがっているさまを思い描けるようになった。たったのこれだけが、17年のあいだに、私が歩んだ数歩の道のりだった。

【竹国】

●註3…2007年8月、16回目の交流会がブサンでおこなわれた。参加者はみな、それが最後の交流会であ

しさとは無縁なところがあり、むしろ、裏や闇の中にこそ、本当のことや真実があるのではないかという、発想の転換でもあることだ。つまり、「見方」だけでなく、実体として何かを闇や裏に作り出し、実際に行動することである。それが、実際に「キムパの会」の設立となって、行動となった。

第三に、それは、人々との関係を実際に含むものであらざるを得ない。なぜならば、単なる視点や発想・夢だけでなく、それを実体化するように、現実的に動くことこそ、「予備校」に一番問われ、「受験生」にも要求されているものであるからだ。当然にも具体的な人間の関係という実体によって夢や希望は保たれるであらう。【註】

こうした三つが、私は「予備校文化」の三大特徴であると考えられるものであるが、竹国さんを中心とする「キムパの会」は、まさしく、その具体的な一つの姿であったと思う。こうした「文化」が、この二十年間の「予備校」河合塾の中で、まちがいなく開花し、受粉し、実を作り、多くの塾生・OB・OGたちに共有されて、社会・世界へ広がって行くことになった。これこそが、私たちがぼんやりと考えていた私たちの将来と希望であったと思う。

ことを知っていた。しかし、その交流会にはじめて参加した学生にとっては、それは「最初」の出来事であったはずだ。そこで、はじめて見た夢もあつただろう。

キムパの会の17年は、そうした一人ひとりの夢の積み重ねであり、その足し算、かけ算であつたと思う。たとえてみれば、それは、参加した、のべ1000名をこえる若者たちが、じぶんの紡いだ糸をそれぞれもち寄って、ひとつのおおきな布を織りあげたようなものだ。その布は、見る角度によって、色あいも表情も変化する。整然と緻密に織られているわけでもない。「反目や誤解、そして別れもあつた。布のところどころには、ほつれた糸が飛び出てもいる。それでいいのだ。キムパの会が、そして私が「生きていた」ということは、たぶん、そういうことなのだ。1991年に私が見た夢は、未完のままだ。いや、そもそも終わりのある夢などはない。夢はいつも未完であり、更新されてもいく。だから、私もまた、17年まえの夢をさらに未来へと投げかけ、若い学生たちのように新たな気持ちで「最初」の一步をもう一度踏みだし、「旅」を続けていくだろう。キムパの会は終わったが、夢にも「旅」にも終わりはない。

【竹国】

汝からキミへ

——塾訓とキヤッチフリーズから考える

メディア・カルチャー研究会 小林貞弘

ポスターに溢れる「キミ」

「汝自らを求めよ」という河合塾の塾訓は、もはや時代錯誤なのだろう。このように思ったのは、河合塾のポスターなどで散見する「キミ」のせいである。

- キミを加速するチカラになる。(二〇二一年度)
- 変わりたいキミへ。(二〇二五年度)
- 合格するのは、いつものキミだ。(二〇二六年度)
- 挑戦を続ける人になろう。受験の先に、大学の先に、キミの未来はあるのだから。(二〇二六年度)
- キミはまだ自分の可能性を知らない。(二〇一八年度)
- キミの最高記録を、キミはまだ知らない。(二〇一八年度)

■質問できる。相談できる。河合には、キミの味方がいる。(二〇一九年度)

■キミが、いちばん望む合格へ。(二〇一九年度)

■ひとりひとりの合格プログラムを、キミへ。(二〇二〇年度)

■合格するその日まで河合塾はキミと走り続ける。(二〇二〇年度)

キヤッチコピーだけを見ると、陸上競技大会やスポーツ用品のそれにも転用できそうなものさえある。広告だからと言ってしまえばそれまでだが、いずれにせよ、氾濫する「キミ」と、塾訓のなかの古めかしい「汝」は、まるでそぐわない感がある。漢字の「君」ではないカタカナの「キミ」からは意味が後景に退き、音ばかりが耳にすんなり

入ってくる。

しかし、その響きには、空虚さと軽々しさが漂っているように思われてならない。身軽なキミが河合塾を踏み台にして「高く跳ぶ」(二〇二一年度)ことができたとしても、である。

汝の退場、哲学の喪失

汝とキミ。どちらも目標に向かって受験勉強に勤しむ学生である点では、同じである。しかし、この二つの二人称の間には、埋められない乖離が横たわっている。この乖離は、塾訓が昔日のものとなって、そこに込められていたはずの人生哲学なり教育哲学なりが無力化していった事態を示唆しているようだ。

現在の私たちには、例えば、全共闘世代の講師たちが経てきたような激烈な時間が決定的に欠けている。あまりにも平穩に大人になってしまった私たちは、社会や時代と真剣に対峙しなければ醸成されない観念や言葉を持ちあわせていない。私たちがせいぜい使えるのは、使い古された、当たり障りのない言葉である。妙に前向きで、毒にも薬にもならないような常套句である。

講師にとつて、「汝自らを求めよ」という塾訓は、既に形骸化しているのかもしれない。だとすると、生徒に求道

者のような態度を求めることなど到底できないはずだ。そもそも「キミ」と化した生徒が自ら切り開くべき道などものは残されていないからだ。

生徒が歩く道は、自分から求めて探すものではなく、あらかじめキレイに舗装されて用意されている。しかも、心優しい伴走者がびつたりと寄り添って、キミをゴールまで確実に導いてくれる。サポートも情報も万全だ。私たちに完璧なシステムがある。そう、「河合塾ならだいじょうぶ」(一九九八年度)なのだ。なにしろ、創設以来の基本理念が「すべては一人ひとりの生徒のために」なのだから。

もともと特別なオンリーワン

生徒の背景には、スマホの普及が一段と加速させたネットワーク社会がある。SNSに代表されるように、コミュニケーションのあり方が劇的に変わり、ライフスタイルが多様化していった。多様性の尊重が声高に称揚され、誰もが「個」として、特別なオンリーワンとして承認される。そんな一人ひとりの生徒を受け入れる器が「キミ」である。このキミは、高度に抽象化されていて、誰にでも当てはめることができる。

その一方、私たちは、コンプライアンスの遵守を強く求められ、ハラスメントにならないように細心の注意を払っ

ている。そして、私たちは、生温い類のメッセージを、根拠も希薄なままに、キミに向かって発信し続ける。いわく、「自分を信じよう」「楽しむつもりで頑張ろう」「君には無限の可能性がある」「最後まで諦めない」……。

本当に望む未来があるのなら、挫折や失望、ときには厳しい言葉を浴びても堪えなければならない瞬間もあるはずなのに、だ。私たちは、それらを周到に生徒の前から排除しようとしている。結果的に、生徒は、教育の対象として以上に、保護や支援の対象としての側面を際立たせる。耐性に欠け、やたら打たれ弱い「キミ」と化した生徒が過剰に溢れることになる。

キミに降りていく私たち

もちろん河合塾が悪いと言いたいわけではない。河合塾もまた時代や社会の変化に応じて、その趨勢のなかにあるのにすぎないからだ。

実際には、変えていかざるをえない（適応するしかない）部分ばかりで、主張するほど「変わってはいけない」「忘れてはいけない」部分など、もはや残されていないのが実状だろう。他の予備校と差別化された、河合塾だからこそこのサービスを提供することは、現状ではかなり難しそうだ。教科の内容や講座の種類なら、どこの予備校でもそれ

ほど変わらないはずだ。

予備校の最大のサービスは授業であり、だからこそ、講師は河合塾の財産とされている。しかし、財産として殊更丁重に扱われるのに相応しいかどうかは、あやしくなっている。入試のためのデータや秘伝のテクニク、輝かしい合格実績を誇る講師ならば、予備校の規模や数に応じてあまた存在しているはずだからだ。

問題は、そこに河合塾らしさがあるかどうかである。

塾のアイデンティティである塾訓が顧みられなくなれば、そこに込められた哲学は共有されなくなるだろう。強く言う、厳しいことを言うことへの遠慮や躊躇、あるいは、恐れのようなものが蔓延している。それに、きついことを口に出せば、か弱いキミに圧をかけ、場合によっては傷つけてしまうかもしれない。「汝」という言葉の響きや重みに、キミは引いてしまうだろう。

キミが階段を上ってくるよりも先に、講師の方から降りていかなければならない。タメ口でもニコニコ笑って許してやらなければならぬ。講師は、偽装された優しさとのりの良さを手にするようになった。その代わりに、時には生徒にとって悪役になることも厭わないという覚悟と、講師である以前の大人としての責任を手放してしまったようだ。生徒は、講師に対して畏怖はもとより緊張すらも覚え

なくなつたとしても不思議ではない。

スマホを片時も手放せない、たくさんの人に承認された
い（高く評価されたい）という点では、講師も生徒も同等
である。いや、むしろ「河合で熟す」（二〇〇七年度）べき
は、生徒以上に私たちの方かもしれない。私たちは、あま
りにも臆病で幼稚になつてしまつたのではないだろうか。

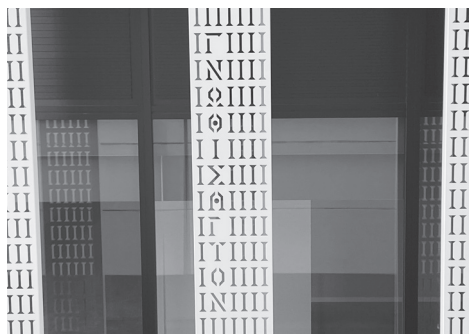
本質に回帰する

時代や社会が変わり続けるなかで、受験のあり方も予備
校のあり方も常に変化の波にさらされている。ときには制
度に翻弄されてしまうこともある。そして、コロナ禍の閉
塞感は、社会に暗い影を落としている。コロナ以前の日常
は、しばらく取り戻せそうにない。先行きは全く不透明で
ある。

強力な羅針盤が必要だ。

これからさらに重大な転換点を迎えたときに、講師は、
「なぜ教えるのか」「なんのためにこの教科を教えるのか」
という根っこの部分に原点回帰することができらるだろう
か。マスクに隠れて表情が十分に見えなくなった生徒を相
手にしても、その教科を学ぶ理由や目的を本質的なところ
まで伝えることができらるだろうか。彼らとは、やがて画
面越しにしか会えなくなるかもしれない。

本質に生徒を導き、生徒と講師が学びの喜びを共有する
ことに、河合塾が培つてきた哲学や文化があつたはずだ。
大きなハコを建てたり、小さなハコを地図の上に加えた
りするのも悪くない。景気の良い話で喜ばしいかぎりだ。
ただ、それ以上に、河合塾という学びのコミュニティを支
える、原点回帰を見据えた新しい帰属意識のあり方を探る
必要があるのではないだろうか。少しくらい時流に逆らつ
てやりたい。その方が新しい。



新校舎（河合塾千種校）の壁面。ギリシア文字で「汝自らを
求めよ」とある。原点回帰か、あるいは、たんなる意匠か。

孤独が基本

認知と記号研究会 柳原慎也

「予備校における本来的教育とは何か？」

先ず、この議題を改めて頂いた時、二語について疑問が生じました。一つは、「予備校」とは河合塾限定なのか予備校一般なのか？という疑問、青木さんの文を拝見し、後者だと判断しましたが、もう一つの語「本来的教育」で思考が停止しました。

そもそも、予備校なるコンテクストに「本来的教育」が存在するのかが疑問、否、「本来的教育」が無いことこそ予備校の存在意義だと考えるからです。勿論、「予備校」という看板を掲げれば、授業料と受験が必然的に含意され、金銭が介入する立派な経済活動の場と見なされま

す。しかし、授業料に対し何を提供するかは一定でも無ければ普遍的でも無い。経営主体の側からは「〇〇大学××人合格」という形で実績をアピールするが、それは一つの

結果であって、教育の内容とは直接関係が無い。そこで、授業料の「対価」あるいは「見返り」に焦点を当てつつ、私的経験中、予備校という存在が世の注目を集めた二つの時代の二つの予備校について語りたいと思います。この場合、一つは、(1)一九七〇年代の某予備校午前部、もう一つは(2)一九八〇〜一九九〇年代後半の河合塾です。

(1) 一九七〇年代、某予備校

当時私が在籍していたクラス状況の説明から始めると、クラスのほぼ全員が東大文科系志望者で、入学時の選抜試験によりかなり高い学力が保証された生徒ばかりでした。従って、ほぼ全教科が、初講から基礎〜中上級レベルの知識は飛ばし、いきなり上級レベルから始まっていた。そこで、「対価」の話になる訳ですが、ここで関係者を

便宜的に、(a)予備校事務局、(b)講師、(c)受講生、(d)受講生の親、に分類すると、授業に關し、(a)(d)の存在も介入も皆無、受講生の間では話題にすら登りませんでした。つまり、〈講師〉と〈受講生〉で完結した場でした。過度の緊張と弛緩の中、二十歳に満たない二百人の生徒が、講師一人に對峙し、各人各様の「対偶」を無言で引き出そうとする姿と場の雰囲気は、前代未聞の経験となりました。常時柔和に接してくれた友人の中に確固たる自我を内包しつつ屹立する峨々たる絶壁の姿を見た時、忘我の境地に達したものです。

今でも鮮明に残る二つの授業があります。一つ目は英文解釈の授業です。この予備校の売りは東大合格実績ですから、当然ながら、ハイレベルの知識と問題が求められる授業が多いのも事実ですが、この授業だけは、板書、プリント一切無し、講師自身が選んだ文章（特に、小説とエッセイ）をウィットとユーモアと自身の経験を交えながら淡々と語り、時にハツとするような名訳を織り込む授業でした。確かに、法学、経済の志望者の中には欠席者もいましたが、ある者には英語の小説文を読む快感を、またある者には、単語のもつ強さ、しなやかさ、微妙なニュアンスの違いを実感させてくれました。押し付けや強制を一切感じさせずに……。

二つ目は日本史の授業です。この授業もまた、細かな知識や年号の理解と習得は一切生徒任せで、講師はひたすら時間の流れと発生し生成される事象を弁士の如く語り継いでゆくものでした。庄巻は、年二回の大補講で、午後から九時間連続（三十分の休憩一回）で四〇〇人教室超満員。二回目は早慶の本試と重なるため、受験せずに補講に出た強者もいたぐらいです。専門ではないが、私が今でも、日本近現代史に惹かれ続けているのは、二回目の大補講（明治（現代）のお陰です。

以上、一九七〇年代の二つの特徴的な授業について述べましたが、他にも素晴らしい授業が目白押しでした。こうした授業がなぜ当時の受講生に響き、誰に強制された訳でもなければ、誰が主導した訳でもなく、ほぼ個々人の判断と意志に従って参加し、自然な流れとして膨大なパワーになり得たのかということが重要です。以下に箇条書きで記しておきます。

[Keypoints]

1. 講師アンケートが存在せず、講師自身の多彩な知識と経験に裏打ちされた持論を存分に發揮できた点。
2. 高校出たての未成年者を一切子供扱いせず、意思と判断力をもった一人の人間として同じ平面で対等に接してくれた点。

3. 生徒が無駄な権威や規則に押さえつけられず、千変万化の現実に対応できる知恵を身につけるきっかけを与えてもらえた点。

(2) 一九八〇〜九〇年代後半（河合塾）

私が河合塾で講師を始めたのが八〇年代中盤、当時の河合塾は関東で三番目の横浜校が開校したばかり、英語の全講師数が二十名前後、講師を大別すると、旧都立名門校の有名講師、オーバードクター、七〇年安保闘争を語る闘士の三タイプでした。ここで、十数年前の「教わる側」から「教える側」への転換となった訳ですが、教える時代も、場も、システムも異なる中、どこから手を付けて良いのかわからず、初年度は暗中模索状態でした。中でも「講師アンケート」は、かつての予備校に存在せず、ただ驚愕するしかないシステム、つまり市場原理主義の権化そのものに映りました。講師が常に晒されるこの評価基準がいかに講師を萎縮させ、自由闊達な授業を阻害するばかりか、安易なポピュリズムをどれほど助長するか容易に想像できました。私は初年度こそ首の皮一枚で凌ぎきりましたが、それ以降この制度に対し無意識のうちに超然と振る舞う術を身につけるようになりました。

さて本題の「対価」に戻ると、この時期の河合塾の授業

は、(1)（一九七〇年代）で使用した記号を使えば、(d)（塾生の親）の干渉や介入は無く、(b) vs. (c) あるいは (a) / (b) vs. (c) となり、講師と塾生との暗黙の了解で展開されました。ここで、当時典型的だった河合塾の授業風景を数例ご紹介すると、

・ 授業前、不定期だが教卓に飲食物（酒を含む）等々が置かれ、生徒側が講師に勧める形で授業展開。特に学期最終講では恒例行事であった。

・ 講義について、塾提供のテキストの使用は講師の判断で変更可能。授業内容はほぼ講師に委ねられ、テキスト解説とテキスト外の余談や歌舞音曲の割合も講師次第。

・ 他の講師を飛び入り参加させ、掛け合い授業展開。

[Keypoints]

1. 講師は自由に授業を展開していたように見えたが、同一教科の所謂「人気講師」のコピーや亜流が多く、独自の色だけで生徒を惹きつけていた講師はほんの一握りだったと思います。この頃「カリスマ講師」や「超人気講師」という呼称が生徒のみならず、講師の口からも出てくるようになりました。

2. 公私共々、講師が集団で行動する傾向が強かったという印象があります。冷静に彼らの行動を眺めてみる

と集団内には役割分担とヒエラルヒーが不文律として存在していました。

以上、私が直接経験した二つの時代の二つの予備校の授業を紹介しましたが、類似点、相違点両面あります。

(類似点)

講師が自分独自のコンセプトを前面に押し出し、授業の时空を自由にコントロールした結果、受講生は親を介させず、嬉々として自由意志で参加し、各人各様の満足感と収穫を携えて予備校を去り、後の世代にも語り次いだという点。

*私見ですが、右の授業を積極的に享受した生徒の方が目的達成率は高かったと記憶しております。

(相違点)

・(2)の時代には「講師アンケート」が厳然と存在し、講師と受講生双方に微妙だが多大な影響を与える中で、「自由な」授業でした。

・(1)の時代では、予備校事務局サイドは一切介入しませんでした。が、(2)の時代の河合塾では、かなりの事務局職員が講師と共闘し、流れを作っていた印象を受けました。

長年予備校と関わり、私なりに予備校が輝きを放っていたと感じられる二例を挙げましたが、誤解していただきたいのは上のどちらか、或いは両方が、「理想の」「本来の」「本質的な」教育などと言うつもりは毛頭ありません。最後になりますが、私にとつての予備校とは、思春期まで公教育の桎梏に囚われ、無意識のうちに当然と見なしてきた凡ゆるものが、単なる一つの相に過ぎず、知性、知識、経験、を蓄え駆使し、そこに厳密な思考と繊細且つ大胆な行動が伴えば千変万化の相が眼前に広がる可能性があることを示してくれる一つの間だと思えます。

予備校にあるのは「本来の教育」ではなく「本来の教育に見えるある時代のある場の教育」があるだけであると思えます。

予備校における教育とは

人間教育の場としての河合塾

河合塾はここ半世紀で巨大化した。ほかの予備校にはない規模である。巨大になったにもかかわらず受験予備校、学習塾である。また人間教育の場でもある。河合塾生を取り巻く環境は歴史とともに変化している。時代の変化が環境の変化に影響している。

塾生をとりまくさまざまな人たちは、高校までとは異なり、より多くの講師や職員スタッフで成り立っている。多くの教職員と接することで、塾生が持つチャンネルと教職員のチャンネルが合致する機会が増える。チャンネルが合致した教職員からの学習面やメンタル面など様々な指導が塾生に伝わるのが可能になる。その内容こそが塾生にとってのエネルギとなる。人と人が接することから得

メディア・カルチャー研究会 松尾敏之

ることができることこそが人間教育である。河合塾に来ることからこそ得ることができる塾生の安心感や心のよりどころは、特にいまの時代では必要である。

講師がおこなうわかりやすい授業はもちろんのこと、個別質問に対しての指導、さまざまな不安を持つ塾生への不安解消になるカウンセリング的役割もおこなっている。河合塾OBである私も多くの講師から解法を学んだほか、学習の必要性やおもしろさも学んだ。入試直前のメンタルケアも入試当日の不安軽減になった。

教材作成や模試作成は時代に即した内容になっている。センター試験や共通テストなど入試改革を研究し、受験指導をおこなうなど時代の先取りをする。

現代社会に精通した講師がおこなう授業のなかでの話は塾生の将来の指針になる。特に大学に関する情報は、これ

から入学する塾生にとつては必要な内容である。

職員スタッフによる学習指導や受験指導も数多くのデータや過去の指導実績をもとに塾生ひとりひとりの個性を理解した上でおこなう。職員スタッフが大学や高校を訪問してそこから得ることができた情報の多さも情報の河合塾を支えている。高校や大学への情報提供も、河合塾の信頼につながる。

河合塾の拡大期には対面授業のほか、衛星授業やネット授業を配信し、全国の大学受験ランキングを全国放送で提供し、社会貢献をおこなった。

塾生の居場所として居心地がよりよくなり快適な学習環境になるように、自習室はもちろんのこと、講師や塾生が中心になっておこなわれる自主ゼミ、受験合宿や海洋セミナーをおこなったり、運動会や遠足、コンサートなどプレ大学生として大学で体験するような環境を作ったりもした。高校生時代とは異なった立場であることでしか味わうことができない体験をし、その体験を生かして心身ともに健全になる環境のなかで学習をおこない、第一志望での合格をつかんで、スムーズに大学での学生生活や研究につながっていく。

人と人が接する中での教育の可能性

しかし一方で気になることもある。映像授業やリモート授業を担当していると、対面授業と比べて学習内容の理解度が低い印象がある。成績上位の生徒や学生はデジタル機器を使った授業と対面授業の学習効果の差はない。成績上位でない生徒や学生はデジタル機器を使った授業での学習効果は低い印象がある。

大木充(二〇一〇)(京都大学)「e-Learningにおける紙媒体の必要性」の研究論文によると、電子媒体より紙媒体の方が優れているのは「携帯性」「速読性」「見つけやすさ」「書き込みやすさ」であると書かれている。

文章の異なる箇所の比較をし、深く読みこむことは紙媒体が効率的である、と柴田博仁氏ら(二〇一一)(富士ゼロックス研究技術開発本部)が「紙と電子メディア——読みの書きのパフォーマンス——」の研究論文に書かれている。

中村智之(二〇二一)(東洋大学)の「オンライン授業による教育効果」では、学習効果について電子機器より黒板が高い。特に理系科目については高く出たと研究論文に書かれている。また受講者の点数格差が大きいがわかり、意欲の高い受講生には効果があったと書かれている。

電子媒体を使うことより、本来の学習法で学習効果が高

くできると書かれている研究論文が上記以外にも複数確認した。学力上位の生徒や学生は別にしてほとんどの生徒や学生は、文章の速読性、深く読み込むことは電子媒体が劣っていて、学習効果も低いことが明らかになった。

予備校は時代の先取りをする必要があるが、教育の面ではより学習効果が出る、人と人が接する中で教育、そうした本来の教育により、生徒の学力がつき満足度が高くなることを忘れてはならない。

河合文化教育研究会主催でおこなわれている文化講演会や研究会について

河合文化教育研究会主催の講演会や研究報告は塾生だけではなく、社会一般の方に情報の提供をおこなう。塾生、一般参加した生徒や保護者にとつて、ほかの講演会では得ることができない知識や情報を得ることができる。最近の例では、JAXAの研究員によるはやブサの研究開発と地球の誕生の講演があった。参加した塾生や一般生にとつて宇宙への興味や関心がでる。大学医学部教員による最新の医学研究の講演は医学部受験生にとつて将来の研究目標が明確になる。iPS細胞の研究をおこなっている大学教員(塾OB)の講演会では先進の医療の知識を得ることができ、地理研究では実際に特殊な地形の現場に行つてその

地形や歴史の話を聞くことで、からだで内容をマスターできる。などなど塾生や参加者にとつては体験学習のいい機会になり学習効果があがる。研究会では共通テスト本番実施前の段階で、関係機関からの情報入手ができ、共通テスト対策を考察し、塾生指導に役立つ。

塾内でおこなわれている学校ガイダンスについて

受験生本人および保護者が学校入試担当者からの必要な情報が手に入る。職員スタッフも参加をし、一般的な入試情報にはない入試情報、たとえば合格者数や実質倍率、合格決定方法の詳細や合格最低点などの重要な情報を引き出すことができる。その結果、受験生および保護者の安心につながる。

現役生コース(グリーンコース)での

チューター制度について

この制度は、ほかの塾や予備校ではおこなわれていない制度であった。現役大学生や大学院生によるグリーンコース生への指導をおこなう。授業自体は講師によるものだが、チュートリアルアワーによる学習指導や進路指導、また個別学習指導や相談、問題解法指導はチューターがおこなう。現役大学生や大学院生などからの進路指導である

ので、大学での学びや研究の話、大学生活などについてグリーンコース生がダイレクトに聞くことができる。

チューター自身は、塾内でコミニティのひとつとして社会体験ができる。とくに将来、教育関係の仕事を考えているチューターにとっては、社会体験の一つになっている。チューター経験者たちが現在についている職業は、教員はもちろん、医師や弁護士、国会議員など幅広い。彼らは社会適応力があり、かつ学習能力が高い。彼らからのグリーンコース生への指導はグリーンコース生にとって有意義である。それに加えて、そのチューターの子どもたちも塾生として通っている。

このような多方面にわたる学習環境ができ、人間教育ができるのは、河合塾のうつつわが大きいからである。河合塾にかかわる教職員スタッフは、素晴らしい能力を持った集団であり、その集団が積極的に活動し、塾生指導をおこなう。また、そとに向かってエネルギーを放出する。そのエネルギーに対して興味や関心を持った生徒や保護者が河合塾に集まってくる。これらのことは現時点ではAIではできないことである。

河合塾の歴史を振り返り、現在の河合塾に不足しているものを確認し、他塾ではまねができないことをおこなっていく必要がある。

受験と教育

女性論男性論研究会 吉田理恵

教育には段階がある。脳の認知機能の発達段階や学習段階にに応じて教育を進めていかなければ、適切な学習効果は得られない。紀元前の中国で子供に学習を始めさせるのは六歳くらいがよいとされていた記述がある。子供の認知機能の発達が経験からわかつていたのであろう。

ある一定の知識と教養があれば、学ぶ意欲がある者は、素晴らしい人物・学術成果に触れることによつて乾いた砂に水が染み込むように新しい知識を得ていくだろう。学ぶことが楽しいことだと実感できれば、生涯成長し続けるきっかけを得ることになる。これはなにもものにもかえがたい。河合塾の塾訓『汝自らを求めよ』は、「自らを求め、学びつづける人」を支援するという意味であるが、受験のための教科教育に終始しがちな予備校で、一部地域で行われてきた文化講演会は大きな意味があった、と思う。

中村哲さんの文化講演会を聞いて、尊敬する人としてその名前をあげる生徒は多い。人生に大きな影響を与えたのである。

しかし、学ぶ者の知識と教養が、その段階に達していないればどうだろうか。

考え方は二つ。一つめは優れた学術成果を雨のように降り注げば、どれかがきつかけとなつて目覚めるに違いはない、という考え。もう一つは理解が可能な段階までまずは導く必要がある、ある一定段階まで達していなければどんなに優れた学術成果でも消化吸収できない、学ぶ意欲を持たせられないという考え。

私は公立高校、学習塾、予備校を教師・講師の立場で渡り歩いて来た。

公立高校はクラス担任、副担任がいて三十〜四十五人程

度をフォローする。教科担当は週に十七〜十八コマ、成績を出し、担任に各教科の成績を届ける。部活や校務文掌も忙しい。問題がある生徒がいれば家庭訪問も必要になる。担当するクラスの全生徒名は写真付き名簿でできるだけ早く覚える。ただし忙しすぎて授業準備がちゃんとできないことが多い。

学習塾はさまざまだから、私が経験した一例でいうと、講師一人あたり一〇〇人程度を割り当てて担当させていた。欠席者フォローは毎回必ず授業担当講師から行う。一〇〇人程度の担当生徒へは三者面談、出願面談まで行う。なんなら債権回収も業務だ。講師は職員でもあるので、掃除・電話のオペレーター・入塾面接は日常業務である。会長、社長、常務をはじめとしてほとんど全てが講師出身の学習塾であった。

生徒との距離が一番遠いのは残念ながら予備校である。授業は基本的に週一回、毎日違う校舎のこともある。名簿はあるが、座席を定めていないことが多いため生徒の誰が誰かわからない。欠席者を把握しフォローすることもままならない。校舎で把握しているはずだが、講師までいちいち連絡はない。また、校舎での把握にもシステム上限界があり、正確ではない。せめて高額な支払のある講習会の欠席は、その都度確認してフォローしたい、せめてプリン

トを渡したいと言っても窓口がない。講習会生は担当が決まっていないようだ。講師の立場では生徒個人の連絡先はわからないのでどうしようもない。改善を訴えてきたが、校舎業務が忙しいとかで、逆に予備校のやり方に慣れてくれ、と言われてきた。

教育の本質は相手を見ることから始まる。予備校では大人数で授業を行ってきたが、授業を受ける側の生徒のことはどれほど見てきたのだろうか。一クラスの生徒数が増えれば、講師からのメッセージが自分のためだと考えない生徒は増える。つまり聞いていない生徒は確実に増える。

新型コロナウイルスの感染拡大により二〇二〇年四月から六月まで政府の緊急事態宣言と休業要請により河合塾も対面授業を映像授業に切り替えた。緊急事態宣言明けに生徒達と対面授業で会って茫然とした。四月〜六月の基礎固めの時期を映像授業で受講するとこんなにも頭に入っていないのか。映像では目と目をあわせ、理解の度をさぐりながら、表現をかえることはできない。生徒も聞き流して当然だろう。

それ以前に映像をすべては見えていない生徒も多かった。生徒の怠慢を責めているのではない。自宅にいて、毎日九〇分三〜五コマの映像授業を視聴し続けるのがどれほど大変かということだ。映像授業担当講師の力量はむしろ素晴

らしかった。ただし通常授業であればきつと使っているだろうプリントや練習問題を使えない、生徒の反応を見ながらの説明ができないなどの制限が多すぎる。

しかし、下位層は壊滅的であったが成績上位層のダメージはそこまででもなかった。つまりある一定段階まで学習が進んでいれば、映像でも教育は可能だということだ。小学校・中学校で二〇二〇年四月〜六月の緊急事態宣言による学校の休校でダメージが大きかったのがよくわかる。大学では比較的映像授業が進み、二〇二一年現在でもある程度継続されているのは、それなりの教育効果が見られたからであろう。ただし、「それなり」ではあるだろう。

偏差値と聞く力は正比例するように思う。成績下位クラスではちよつとした連絡事項にも手間取る。聞く力がないから授業内容も頭に入らない、だから成績も伸びないと言ってもいいかもしれない。そのまま映像授業・大人教授業での効果が出にくい理由とも重なってくる。あまりにも当たり前のことを実感する機会であった。

生徒個人個人を見ていこう、という流れには大賛成である。教科担任制という発想が予備校に入って来たのも歓迎する。毎年の生徒の合否結果の分析に、各教科レベルまで落とし込んだものがあれば、教科担当講師自身の改善も可能になる。長年講師をやっていると、自分の教え方が一番

だと思い、アンケートの数字が悪くても改善しようという発想にはならない。「私の授業はレベルが低い生徒には理解できないのだ」と思っている講師は多い。しかし「私の授業では生徒は大学に合格できない」なら、予備校の存在意義から考えても、青ざめ、改善に着手するしかない。もちろん教科担当講師にどこまで責任を持たせるか、という問題はあつた。合否の結果は本当のところいろいろな要素が複雑に絡み合っているのが難しいかもしれない。しかし共通テストの得点なら現在のシステムでも教科担当ごとにデータが出せるだろう。

とはいえ大学入試合格のためにはそれだけでは足りない。教科担当としては授業についてこれない生徒を拾い上げ、アドバイスすることもできる。しかし特定の教科が苦手な場合、そこに時間をかけることに意味があるかどうか。この判断は一講師ではできない。国立受験をあきらめて私立受験に切り替えるなら、苦手教科を切り捨てるのは必要なことだ。苦手だからといって教科担当講師が力を入れてアドバイスや添削をしても最終的に志望校の変更によって無駄となることは多い。調整が必要である。この生徒の第一志望大学に合格するためにはこの教科を伸ばす必要があり、苦手は苦手でもこの教科は平均点がとれば合格できる、とか。調整役が可能なのは、生徒の成績全部を

把握しているチューターであろう。

高校・学習塾では皆が教師であり講師であるので、ちよつと間違えば責任のなすりつけ合いになる。逆に言えば、間にチューターが入る予備校でのみ可能でありながら、やれていなかったのがこの調整であり、今後の予備校、第一志望必要なものもこの調整ではなかるうか。

四月の浪人生に限って言えば、自分自身で学び続けられる領域にまで達している生徒はほとんどいない。高一の一学期の内容が頭に入っていない生徒もとても多い。

教える側の自己満足を脱して生徒にとって価値がある学びとその楽しさを伝えること、自ら学習が進められるよう基礎を叩きこむこと、この二つの条件を整えば、河合塾の塾訓『汝自らを求めよ』つまり「自らを求め、学びつづける人」を生み出すことができるのではなかるうか。

「もう一つの教育」から見えて来ること

——エンリッチ講座の場合

文教研 相京範昭

「もう一つの教育——予備校に見る教育の新たな展開

——文化行事を通じて、若い世代の知的好奇心を刺激する

エンリッチ講座——」

これは河合塾が発行している『Guideline』に掲載された記事（一九九五年十一月）のタイトルでした。河合塾の文化講演会は全国各地で実施されていますが、東京首都圏では「エンリッチ（ENRICH＝心や生活を豊かにする）講座」と名付けられています。狙いとしては「本来的に瑞々しい感性を持つ世代に、知的刺激を与え、好奇心を喚起し、現代社会の抱えるさまざまな問題への意識を高め、知的バックボーンの形成を目指す」ものです。「創造力の源は知的好奇心と批判的精神。深く思索して構想力を培い、漕ぎ出せ知の大海原へ。」と宣言したこともありました。

また、実施内容をまとめた小冊子『エンリッチ講座ファイル』では、「河合塾の《プラスアルファ》 きく・みる・わかる、考える」というキャッチフレーズが表紙を飾っています。ここで言う「プラスアルファ」はもう一つの教育を意味しています。予備校では、第一には「志望する大学入学」が目的と言われていますが、プラスアルファの一つとして、文化講演会などの活動があると、一九九〇年代から、いやもつと前から主張してきたと思います。

「挑発」——常識をゆさぶり疑問を生み出す

その点を確認したうえで「きく・みる・わかる、考える」を考えてみたいと思います。まず「きく、みる」は五感を働かせることの強調ですが、次の「わかる」は理解すること。ただし、理解すると言っても単に新しい知識を得

るだけではありません。予備校でわざわざ外部から講演者を迎えるには意味があります。冒頭にあげた『Guideline』の特集でも最初の小見出しに「実施のねらいは『挑発』と『対話』とありますが、その「挑発」の意図するところは、単なる「教養講座」ではないということです。

ふだん接している常識的な考え方や文化とは異なるもの、マスコミなどではあまり報道されない世界を積極的に企画します。エンリッチ講座で「常識をゆさぶり、疑問を生み出す」、そのことの一例としてこんなことがあります。国際化に対応するとして、多くの大学が国際という名を持つ学部を改称し、志望者が増えたことがあります。海外で活躍している講演者には前もってこう伝えました。「国際的な活動をするには何が必要ですか？進学先は？語学は？国際機関は？」という質問が必ず出ますが、それに答えるだけでなく、辛かったことや失敗したことをたくさん話してください」と。すると「ここではサーブス抜きで本音を話せばよい」と理解し、海外活動で必要なのは「何でも食べられること」「身体を鍛えていること」「誰とでも話せること」「好奇心を持つこと」「日本の文化を知っていること」などを強調して語ってくれました。

「対話」——聴くこと、質問を考えること

ふだんの受験勉強はたぶん段階的・重層的になると思われますが、じつさい社会の第一線、最前線で活動している人たちは、柔軟な考え方や自由な発想の重要性をよく語ります。つまり、「わかる」だけでなく「考える」こと。それにはどうしたらよいかということですが、まず第一に、講演内容に疑問を持ち、意見を発したり、疑問を言葉にして質問することが大事なだと伝えていきます。ですから、「エンリッチ講座」では講演者と塾生との「対話」が最も重要視されるわけです。司会者には事前に「講演中は必ず質問を考えながら聴くこと」を強調してもらいます。なかには「講演内容のメモは取るな、聴くことに徹底せよ、書くなら質問だ」という司会の講師もいました。その結果、講演終了後、必ず質疑応答が活発に行われます。質問によって内容的が絞られ、本質を突く真剣な質問が、逆に講演者を挑発します。そして、鋭い質問は、他の塾生に対しても影響を与えます。「同じ世代の人が、あんな凄いことを考え、質問している」という事実は、彼らに非常に大きな衝撃を与えます。

そのような質問の連続で記憶に残る講座がありました。講演が終わった途端、一斉に質問の手が上がりました。司

会の講師がとつさに、「これだけの質問者に一つひとつ答えたら時間が足らなくなるので、まず質問を板書してみます」と言い、黒板いっぱい質問を区分けしながら列記し、結局、その質問の構成にそって講演をやり直しました。それは講演慣れしていた演者が、通り一遍の講演内容になっていった所を塾生たちが見事に衝いた瞬間でした。当然、その講演会は長時間になりましたが、緊迫感が持続して充実したものとなり、講演後は双方ともに極めて満足感あふれたエンリッチ講座となりました。

このような「対話」によって、講演者と塾生、塾生同士が互いに刺激し合い、緊張と発見が出現する空間は「会場の空気がうごめき、あたかも〈知の有機体〉の触覚が伸びてゆく」ように見える恍惚的瞬間の連続となります。

「対話」は講演を振り返る形となり、それぞれの内部で講演内容が再構築されることにもなります。それは自分の理解を確信し、自信にもつながります。しかし、挑発と対話が本当に自発的に産み出されるようになる「場」をどう作るか、これが重要となります。それはやはり、存在感ある講演者の選定にあると思います。さまざまな分野の最先端で、まわりの常識にとられずに、独りでも挑戦する人、夢と現実のギャップに向き合う人、地域や現場に密着して社会の不条理に立ち向かう人、その切実さと姿勢に「リア

リティ」を発見する塾生は、自らを重ねます。そして、そこから出てくる率直な質問は必ず講演者に伝わります。

予備校生活は独り立ちへの通過儀礼

「私はたくさんの人を取材して来ましたが、この教室に入って、まず一番感じたのは、みなさんの眼に力があるということですよ」と言って満員の塾生に話し始めたのは、東日本震災直後の七日間、『石巻日日新聞』を発行した武内宏之報道部長でした。ここではすでに、講演が始まる前に「場」が作られており、質問と対話の空間が形成されてきました。そのとおり、集中した密度の濃い講演時間はアツという間に過ぎ、質疑応答も次々と手が上がり、それの一つひとつ丁寧に、沈着冷静に応える武内さんの姿がとても印象的でした。そして、塾生の感想文に「テレビなどを中心に《自分をかばってなくなった家族の話》などといった部分が美談として取り上げられているが、《自分が助かってこそ周囲を助けられる》《自助を第一に》という言葉には現実と向き合って報道してこられた方だからこそその重みを感じた」とあり、武内さんの存在感に十分に応えたものでした。

そのような空間はいかに形成されるのかということですが、エンリッチ講座などの文化的イベントへの誘導を、ふ

だんの塾生との接触ではかっているのが、河合塾の講師です。その意味で、エンリッチ講座は、事前のポスターチラシの制作や講演者への事前交渉、そして講師の力による共同作業とも言えます。

また、じつさい講座へ誘う仕掛けを入塾の早い時期にやっていました。それが「わいわいとーく」というイベントで、数人の講師が「テーマがあってもよいし、なくても何でもよい」とにかく「わいわい」語り合うというもので、狙いは次のようなことです。

「河合塾に入塾してちょうど一ヶ月たったころは、受験生生活に慣れはじめると同時に、浪人という境遇に不安が生じてくる。でも、いづれにしても、頼れるのは自分。何事も独りで考えていかなければならない。いつてみれば、河合塾での予備校生活はこれから独り歩きするための通過儀礼でもあるのだ。河合塾では質問大歓迎。思っていることを遠慮なく質問し、意見をたたかわせる。講師と生徒が話す目の高さは対等なのだ。河合塾が伝えたいことは、好奇心を持って自分から求めさえすれば、いろんな宝が発見できるということ。《わいわいとーく》はその雰囲気を与えたいイベント」と呼びかけますが、こうしたイベントを全校舎でエンリッチ講座の導入編として実施した年もありました。

「コンサート」——身体を通じて了解する言葉

そういった時期や仕掛けの一つとして「邦楽コンサート」も二十年近く実施してきました。これも他の講座と同様、知名度のある人物ではなく、新しいことに挑戦している演者を選んできます。時期は基礎シリーズの終わる七月上旬で、「夏に向けての激励コンサート」と名付け、ここで一旦リラククスし、夏を一気に乗り切るエネルギーをつかもうと位置付けます。しかし狙いの奥には「尺八や箏（琴）の《なま》の音」を聴かせることにあります。会場は教室の日常ある机を取り払い、コンサート会場風に扇形に椅子を配置し、視覚的にも非日常、異空間の雰囲気を作ります。そのように設定した会場で、初めて聴く「なま」の音に感動し、背筋を伸ばして、一心に聴き耳をたてている光景が出現します。人の息づかいが一本の竹を通して響く尺八の音に涙を流すもの、箏曲の弦が奏でる音から「何かに包まれている感覚が生まれてくること」に反応するもの。そこには孤独な予備校生活の中で、未知の世界に独りで立ち向かっている現実と同時に、しかし、何かたくさん人の関係性の中に存在していることを、身体を通じて了解する瞬間にもなっているのだと思います。

ふだんの「知識を積み重ねること」とは異なる世界を知

ることになるのです。

決断の背中を押す「風」に

思えば、一九九〇年代には講座の企画提案が三十以上出て、その調整に苦劳しましたが、ここ数年は企画が少なくなり、逆にこちらから提案し、講師に司会をして貰うことも多くなりました。講師のアンテナが質量ともに変化してきたと言えます。このコロナ禍で、エンリッチ講座は教室不足のため実施できなくなっていますが、あらためて文化講演会の意義を見出し、もう一つの教育を作っていく必要があらうかと思えます。

有り体に言えば、エンリッチ講座は、けっして、入試のため、大学生活のため、就職のためだけあるものではありません。社会に出て数年後、必ず何かの決断に迫られる時があります。むしろ、その時にこそ、本人は気がつかないけれど、そっと決断の背中を押す「風」のように、予備校で生活した空間でしか体験できなかった、その身体の記憶がよみがえる瞬間にこそ、エンリッチ講座の役割があるに違いないと思えます。

IV 自己教育という現場

「あの人」のことなど

一九六六年四月初旬の新学期初日の朝、陽光に包まれた伝習館高校の校庭の壇上から、まるで喧嘩でも売るかのようはこちらを睨め回すひとりの坊主頭の男がいました。大卒出立での新任教師らしい殊勝な態度はカケラも無く、肩を怒らせ片手をズボンのポケットに突っ込んだままの不遜な態度とその風貌は、どう見ても刑期を終えて出所したばかりの危険人物にしか見えません。

挑発的態度を受け止めかねて戸惑う全校生徒のざわめきで、マイク無しの彼の挨拶は良く聞き取れないままでしたが、少なくとも、私には彼が何かに本気で喧嘩を売ろうとしていると感じられて何だか嬉しくなり、「面白い奴が来たな」と思わず口にしたものです。

これが、その後半世紀以上に及ぶ付き合いとなる「あの人」を約一八〇〇名の生徒のひとりとして遠くから目にし

た最初でした。

彼が副担任として配属されたのは高二の私立文系クラス。私は高三で国立理系クラス。ですから、授業での接点は全く有りません。聞こえてくるのは後輩たちを通しての破天荒な授業の噂のみ。

初めての対面は生徒会主催の新入生歓迎討論会。テーマは何と「幸福について」。私にはその教科書まがいの通俗的テーマ設定が恥ずかしくて我慢ならず、討論会を断固粉砕すべく乗り込むと、そこには生徒に混じって何と彼の姿。開始早々私はテーマを「快樂について」に変更することを要求。「何故だ」と生徒会側が問うので、少し粋がつて、「オスカー・ワイルドは、幸福は快樂の薄められたかたちに過ぎないと喝破している。より本質的な議論をするためにもここから始めよう」。

ニヤリと笑ってそこに早速切り込んで来たのが彼でした。サルトルの実存主義思想が幅を利かせていた時代です。から、議論はそこから実存、自由といった問題に発展して行き、あとはほとんど彼と私のふたりの出会いの場になった次第。

斯くて、生徒会討論会粉碎と、併せて、新入生に対する知的爆撃に成功し、気になっていた「あの人」と初めて直に言葉を交わすことも出来たのでした。

討論会からやや経った、確か五月。初夏の陽射しが色濃く残る放課後の街中。街中とは言っても校門を出てすぐの昭和堂という書店の前で彼と遭遇。すれ違いざま、チョツと格好を付けた渋い顔をして、「おう、お前。珈琲の美味いとこ知らんか」。「近くに、私の行きつけの越山こっさんという店があります」。これが彼と私的に交わした最初の言葉。

二階の窓際の奥の席に運ばれて来た珈琲の前に、「珈琲には煙草が合いますね。先生、如何ですか」と私のホープを勧める。と、一瞬、この野郎、生意気に俺を試しているなという表情を見せた後、彼は黙って自分のロングピースに火を点けて深々と一服。目の前で煙草を吹かす小癪な生徒などもの数では無く、そんなことは俺の知ったことでは無い、お前の問題だと言いたげな感じで無視。小脇に抱えていた『金閣寺』をポンとテーブルに置いて曰く、「お

前、三島をどう思う」。

その時まるで映画の一シーンのようなふたりの遣り取りを興味津々の面持ちで見聞きしていた女店員のAさんは、以来、私たちの熱烈なファンとなり、私が制服姿で入店しても黙って灰皿を置いてくれるし、私の珈琲代もいつの間にか彼の付けにしてくれるようになりました。越山が「あの人」の最もお気に入りのお茶店になったことは言うまでもありません。

「あの人」の名は茅嶋かやしまひろかず洋一。師としてはあくまで「茅嶋先生」。河合塾の同僚になってからは、講師同士が互いに「さん」付けて呼び合う中、私だけがいつまでも「先生」では何だか変な感じもし、ある時思い切って「さん」付けて以来、TPOで両呼称を使い分けてきましたが、あの世で再会したら、多分敬意を込めて「先生」と呼びかけることでしょう。

尤も、中学・高校時代、軽蔑しか覚えない相手であったとしても、少なくとも先生や年長者と対する場合はいくらか口論が激したとしても敬語で通したものです。

大正生まれの父よりは明治生まれの祖父から身近に影響を受けて来たせいでしょうか、どうも私は万事に付けアナクロ的傾向が身に染み付いてしまっているようです。

ともあれ、私が教育について何かを語ろうとする時、ど

うしても先ずは茅嶋先生に触れざるを得ません。

高校時代に出会って以来のこの五十余年間、彼の存在や振る舞いや言葉が常に私の試金石となつて来たからです。

いささか大仰な言い方になりますが、青年期の私には、この人となら共に死ねるかどうか、この行為に命が賭けられるかどうか切実な問題意識としてありました。そして幸福にも、たとえ負け戦であつたとしても最後まで共に戦えると思えた幾人かの先達がいました。今、あらためて、そのことに感謝したいと思います。

十七歳という私の混沌の時代に最初に出会つた「本気で生きている男」、そして、その生き方がそのまま人を育むことに直結していた存在、それが茅嶋洋一という人でした。

ある時、学内で「茅嶋は原田をテロリストに仕立てようとしている」という噂が立つたことがあります。私が親に持て余され彼の下宿に転がり込んでいた時期に、深夜柳川の堀割に小舟を浮かべて「風蕭蕭として易水寒し、壮士ひとたび去つて復た還らず……」と吟じ合つたことこそあります。しかし、無論彼にそんな意図などあろう筈はありません。しかし、妄想にまみれて生きていた頃の私は「おい、原田。ヤルゾ！」という彼の一言をどこかで待つていた節があつたのも事実です。

しかし、彼は一度たりとも特定のイデオロギーや思想を

人に強いたりするようなことはありませんでしたし、自分と異なる立場にいる人間の言葉も、そこに一本の筋が通つていて、それがその人自らの言葉である限りにおいては尊重する態度を堅持していました。

論理を大切にしましたが、決してロゴス一辺倒の人ではありませんでした。ストイックな身の持し方はしました。誰よりも花を愛し、詩を愛し、エロスのものを尊重する人でもありました。

花と詩とエロス。それらは私にとつてもこの上も無く大切なものです。

海と溶け合う太陽。そこに永遠を視るとは、己が腹中において、即ち、全身全霊をもつてそれを感じずるということ。別言すれば、他なる者としての光景に自らが身も心も浸されるということ。勁くしなやかな言葉はそれを能く受ける者の身の内深く食い込み、優しい愛に満ちた眼差しの前には人は幼子のように嬉々として己が身を委ねます。

そのような契機を得て初めて、人は自らを更新し、真に生きることが出来るのです。生命存在としての人間を貫く原理はエロスです。その原理はあらゆる人間関係を根底で貫いており、教育も又別では無いのです。ロゴスを大きく包み込むエロス、或いは、ロゴスの深部で熱く滾るエロス。それこそが人や世界を揺さぶり、大きく変えていく力

を持つのではないでしょうか。

さて、先に、知り合ったばかりの茅嶋先生を煙草で試したことを書きましたが、そもそも試験というものは教師の側が生徒の側に一方的に課するものでは無いのです。

かつては、幼稚園はいざ知らず、小学校ともなると新任、特に新任の先生の初講時には、歓迎の印として教卓の中に蛙や蛇などを入れておくものでした。或いは、僅かに空けた入り口の戸の上の隙間にチョークまみれの黒板消しや、雑巾、時にはバケツの類を挟み込んで置いて、先生が入室しようとして戸を開けた瞬間に頭上に落下させるのです。被害に遭って、無視すれば良いというものでも無し。怒れば良いというものでもニコニコ笑っていれば良いというものでもありません。まさに、生徒にとっては未知の先生その対応の仕方を皆で固唾を飲んで見守っているのです。子供だからと言って決して馬鹿には出来ません、子供にとっては自分の身を預ける切実なこの一年が懸かっているのですから。この洗礼を大爆笑の内に或いは感嘆の内に見事に潜り抜けることの出来た先生だけがこの一年間のクラス運営を保証されるのです。

そして、勿論、仕掛ける悪戯の種類やスケールは、女の先生か男の先生か、新人かベテランか、屈強であるかそうで無いかといった様々の条件の違いによって決定され、そ

の匙加減の妥当性によって子供の側も又試されるのでした。ここに、本来在るべき教師と生徒のスリリングな関係の雛形があります。丁々発止の遊戯性の中から生まれる互いのリスベクト。それが知の伝達や形成の在り方の中にも求められているのです。

つまり、真に「知」と呼ぶべきものは、単なる情報や知識の蓄積や処理にあるのでは無く、既成の枠組みでは捉え切れない未知の可能性に自らを賭して挑み続けること、そして、それを可能にさせる信頼関係の内にこそ存するのではないのでしょうか。

危険なものと接する際どい境界に蔵された豊かな世界、それとあい互るスリリングで緊張感に満ちた行為の醍醐味は、故に「教育」のものでもあります。更に、私にとつては、私の最終の持ち場である「身体表現」、つまりは「舞踏 (BUTOH)」のものでもあるのです。

学校は、ある意味で言えば、特に近代の学校というのは全部国家の意思がかんでいて、生産性を向上させるために教育しているわけだから、だから養成機構でしかないから、あそこへ行っても子どもが根源的に持つてる力は引き出されないから行かなくてもいいんだという意見が、片方で非常に鮮やかな意見としてありますよね。これは、理論としては鮮やかだけど、子どもそのものが、その前に否応もなくもう社会化されているから、自分だけ学校へ行かないと、自分だけ帰属場所がないような感じがしたりして、もうそれだけでなにかある不幸な感情を持つとか、いろんなことが実際にあるわけでしょう。だから、一方で、つまり学校へ行かなくていい、とは言えない。しかし、逆に、学校へのつきあい方をちょっと工夫してのりこえればいいじゃないか――まあ学校に行つて学校を利用しろ、と。そういうことも子どもの個々の現実をみたら言えない。だから、その辺のつきぬけ方というか、実際にどういうふうにするかというのが、すごく難しいと思うんです。

コスモではなにかをするというよりも、なんかをしないうようにしたという効果はあります。その効果はすごくある

わけです。学校にずっとイヤイヤ行つてたんだとか、行かなくなつて家でプレッシャーを感じてた子どもが、コスモで「それでいいんだよ」というふうに一言言われたことから、解放されてすごく生き生きしてきたという例はね、それはもういっぱいある。

コスモは、基本的に子どもに強制をすることはせんぜんない。いまの学校教育の在り方からはなるべく自覚的に遠いところに身をおいて努力をしてやっているから、そういうことはないんだけど、それでも心の中に、やっぱり教育理念みたいなことがみんなあつて、「教育」におちいつてしまう可能性はある。なんかやつぱりそういうのはまっすいんじゃないか、つてことは常に問い直されてはいます。

でも自分がこうやつて勉強していて、数学はこんなにおもしろいもんだつていうのがあつて、それを生徒にわかつてもらいたい、伝えたいつていうのがあるわけです。だから、こうなつたら生徒にとつていいだろうと思つてやっているよりも、俺はこういうことが楽しいから、おまえらも楽しいと思つてほしいという、そういうエゴイズムでやっているんで、そうなつたらその子が偉くなるだろうとは思つてないわけです。でも、そのところが、たぶん大事じゃないかなという感じがする。ほんとうは、みんなエゴでやつてんだから、エゴだつていうことを始めから出

した方がいいんじゃないかというね。

その時に、もしそういうことを抜け出る点があるとしたら、それは、なんかやって、生徒の反応で自分が変わっていきつつということにかかっているでしょうね。

僕は教えていけばいいことって何かあったら、自分が数学がよくわかるようになってきたことなんですよね。生徒が拒絶反応をおこしてきた時に、「なんでわかんないのかな、こんなこと」と思うでしょう、こっちは、特に簡単なことほどね。そこを悩むわけですよ。じゃあ、どうやって説明したらいいのかってね。そしてそれを自分で研究しているうちに、なんかバツとわかって、ああ、こんなことだったのか。ぜんぜん違うことだったんだな、というようになことに気がついたり。そういうことが、よくあるんですよ。そういう意味では、ほんとうに文字通り生徒に教えられるということがしばしばあるわけです。

学校教育のみならず、教育一般が問われるところまで来ている、という現状認識は一方で僕にもあるわけです。どんな自由な教育でも教育をほどこすんだ、と思ったときに陥穽に落ちる。だから、どんな教育理念もはや語ることにはできないという。そういうところに来ている。しかし、その一方で、毎日、生身の子どもたちを目の前にして、——「コスモに来ている子どもたちなんかは実際みんな「教育」で苦しめられてきた子どもたちでしょう——その

ときに、僕らがどうするか、自分が変わることも含めてどうやって関わっていくか、その関わり方っていうのが多分大事なんじゃないかと思うんですよ。

「コスモの数学の講師たちは、日々数学をどうやってたらうまく教えられるかってことを一生懸命考えています。そのことで、子どもたちと向いあっている。だけど、それで「教育」がどうのこうのと言っているわけではない。たとえば数学を教えて、生徒が数学をわかってきて生き生きしてきたっていうことがある。すると、そういうことですら「教育」という名の強制だという批判もおこりうる。

でも、ちょっと考えてみたらわかることだけど、生徒たちはぎつともつと心が広がっているか偉いっていうかね、そんなにそんなもんで人生が決まったと思ってるわけじゃないから、もっと軽くとらえているのじゃないかなあ。ちょっとそこで遊んでもおもしろいっていう面を、ぜったい持つてるはずだから、そこんとこを認めないと。逆にあんまり教育の無効性みたいなことを言いつぎちゃつと、一人ひとりの人間のことをバカにしちゃうつとつか信頼してないことになる。

このへんの教育についての断言できなさということだけはかかえもって、考えていきたいんですけどね。

（小林一歩「教育—反教育の境界線上で考えること」より抜粋。『河合おんぱさず』第二号、河合文化教育研究所刊、一九九二年）

綺想の教育学

—— 試論

書物は神の援軍だ。

僕の最終学歴は事実上幼稚園中退であり義務教育も受けていないに等しい。英国で生まれ、ドイツやポーランドで父と母と共に平穩に暮らしていた僕は、父の事業が思わしくなくなり、日本に居る父方の祖母の家に預けられたのだった。祖母は腹違いの姉ばかり愛し、自分になつかない僕を激しく憎んだ。

恐ろしい巨人達が眼を覚まさないうちに塹を出て、背中に翼の無い子供は安息の一時を得たいがために異郷の街を走らねばならない。そのような暮らしの中では、目新しい言葉達が寶石のように綺羅綺羅と並んだ分厚い書物こそが寡黙で饒舌な友人であり、また最良の家庭教師であった。言葉は時折嘘をつくが僕を上手に騙してくれる。ポエジーが無いと生きてはいけない時代だった。

身体表現教育研究会 天津孔雀

知識欲が人一倍旺盛でありながら学びの環境を保障されていない子供にとっては知らない言葉を教えてくれる者が、さながら神に見えたものだ。ラーメン屋にもストリップ小屋にもゲイバーにも神は居る。東大出の歴史学者が場末の中華料理屋で餃子を焼きながら欧羅巴の宗教史を僕に聞かせてくれた。塵紙交換のおじさんが僕に百科全書をくれた。

学校に行かない僕の学びの場は主に神社の石段と「世界のダンス」の楽屋だった。森閑とした境内の石段に腰掛け僕は夢中で本を読んだ。僕にとってはそれはまさに文字化された神の声であった。上田敏の華麗な翻訳に魅せられ、日夏耿之介の綺語煉金に幻惑され、そして十一歳の時に鈴木信太郎の訳でポオドレルを知り、のめり込んだ。それ

からは濫澤龍彦、三島由紀夫、寺山修司、中井英夫、ジャン・ジュネ、ジョルジュ・バタイユが次々と僕の先生になった。

「世界のダンス」というのは温泉町の外れにあつた怪しげなストリップ小屋である。名前の通り踊り子の姉さん達の国籍は様々で、露西亞、フィリピン、カザフスタン、英国、アメリカ、仏蘭西、独逸、ポーランドと実に多様な美人揃い。誰しもが何かしらの事情を抱え、煌びやかな下着姿で踊っていた。露西亞人のマリーさん、英国人のクラリッサ。美しい呼び名が芸名か偽名か本名なのか雇い主のヤクザのおじさん夫婦ですらわからない。三十数年前の大陸の寒い晩。大人達が怒号を上げて言い争っているアパルトマンの一室から逃げ出して、僕はパジャマで裸足のまま繁華街を歩いていた。頭の上からカタコトの日本語が聞こえる。「アンタ、家はドウシタ。カエラナイノ？」

やがて十頭身のウエヌスは僕の手をとり「世界のダンス」の楽屋に連れて行つた。そして出前でオムライスをとつてくれた。以来数年間、ビールの空き缶と聖書が隣り合わせでピンクの絨毯の上に転がっている小劇場の楽屋が僕の学びの場所となった。義務教育を受けられない環境にあるということは、子供にとって必ずしも悲劇だとはかぎらない。「世界のダンス」の踊り子の中には露西亞の国立

バレエ学校で途中まで学んだという没落貴族の令嬢が居て、彼女は僕にテーブルマナーや挨拶の仕方や優雅な身のこなしを徹底的に教え込んだ。そしてどんな時も、何者に対しても毅然とした態度で接することを僕に厳しく言い聞かせた。彼女が所持する小さな折り畳み式のアイコンがあつて、僕が教えられた通りに上手に挨拶等が出来た時には、ご褒美としてそれを開いて見せてくれた。

ドッチョやマザッチョの系譜にあるような筆致の画家の手による聖母像は未だ遠近法の確立していない時代の古拙な描写がかえつて愛らしく僕に宗教美術に親しむきっかけを与え、後に心酔することになるフランドル派やラファエル前派を知る足掛かりとなった。

学校に行かなかつた僕は国語・算数・理科・社会を正式には教わっていない。しかし、それだけが教育ではない。信念を胸に燃やし人としての尊厳を持つて毅然として生きていくために学ぶべき種々の事柄は、残念ながら教科書や参考書には明記されていないからだ。大切なことは全て啓示としていたるところに散りばめられている。それを感じ取り理解するには学歴でも知識でもなく柔軟な心と神への愛が必要だ。

十四歳になつた年に「世界のダンス」は店をたたみ、独

りになった僕は自己教育を続けた。僕はとにかく美しくなりたかった。美を得るには常に美の中に身を置くことだと思いついた僕は、西欧の古典絵画の画集を次々と開き、小さな部屋をモーツァルトやバッハ、受難曲や鎮魂歌で充たした。古本屋に山積みの海外のファッション誌は色彩の勉強にうってつけであり、化粧と衣裳におけるエレガンスは古道具屋のガラスケースに並んでいる人形達が教えてくれる。

義務教育をほとんど受けず、成人式にも行っていない僕は歳をとらず子供のまま、性別もない。僕の自己教育はまだまだ続いてゆく。

私の教育体験談

文教研事務局 南 博

専門学校部門での現場経験はあるものの、予備校部門での校舎経験はわずか半年、研究会活動もしていない私ごと
きが投稿させていただいてよいのか、という迷いがあった。そこで、私には重すぎるキーワードを勝手に外し、保護者、学生、教職員といったさまざまな立ち位置での単なる経験談の例示だけさせていただくことにした。

広辞苑の「教育」の項で

人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動

という、一見単純明快だが、よく読むと色々と考えさせられる記述を見つけた。これにしたがって私自身の体験談を述べさせていただくことにする。

保護者の意図

「他からの意図」の、「他」とは講師や学校といった教育の提供者のことだと思いが、ここでは、拡大解釈して保護者の意図を述べる。

私には三人の子供がいて、おかげさまで全員が今のところごく普通の勤め人になっている。意図をもった働きかけ（後述）も多少はしてきたつもりだが、「親の言うことなんか聞く耳持たず」の私のDNAを受け継いだ三人は勝手に進路を決めてきて学費納付書だけハイよろしく、だった。

河合塾の模試判定結果でも高校ランクでも、学力レベルは二男↓長男↓末娘の順であった。ところが、進路に対する意識、その結果としての学歴もこの逆順になるから世の中は難しい。

末娘は小さい時から「獣医になる」という目標を掲げていたのだが、学年が上がるにつれ、自分の学力とのギャップを自覚せざるを得なくなる。私は、獣医が無理なら動物看護師ということで、名古屋市内のまともそうな専門学校で資料請求までしたが、本人は無視。私への反発があったのかもしれないし、当時の飼い猫が定期的に通院していた動物病院での看護師の立場の弱さに嫌気がさしたのかもしれない。結局、生物系の勉強や研究もできる農学部を志望することになったが、高三の途中で軽い登校拒否状態になり、ただでさえ低い学力がさらに低下した。センター試験はなんとか受験できただけ、という状態だったし、私大も全滅で、河合塾のお世話になることになった。実は、私自身の意図は登校拒否状態の改善だけだったが、名駅キャンパスの教職員のみなさまのおかげで登校拒否症はすぐに治ってくれ、高校時代にはほとんどなかった学校での話を自分からしてくれるようになった。おかげさまで、あまり期待していなかった学力までそれなりに伸びて、センター試験こそ二連敗だったが、第一志望の私大に合格できただけでなく、有能なチューターに背中を押されて、ワンランク上の大学にまで合格できた。よほど居心地が良かったのか、その大学の修士課程にまで進学でき「我が家で最低学力だったはずなのに最高学歴者」となった。博士課程

までの学費はきついぞ、と心配していたら、さっさと就職先を決めてきて、念願の田舎暮らしで地方の独立行政法人で農産物の担当をしている。私の場合は、幸運にも期待を大きく上回る成果をいただけただけだが、一般的に親の期待というのは単なる願望や妄想になりがちである。実は、わが家では夫婦そろって「子どもが」三人もいるんだから一人くらい大金持ちになって親に贅沢三味させろ。」と、半分本気で子どもたちにも話していた。

望ましい姿が降臨

冒頭の広辞苑の記述で「望ましい」の主体は何だろうか。「させ」だから「他」が有力だが、「本人」でもおかしくはなく、おそらく両方だと思う。私自身が二十年弱にわたって勤務した専門学校ならば就職先の企業が望む人材にまで知識・技術・人間性を成長させて内定を勝ち取ることであるし、予備校であれば志望校が望むレベルまで学力を伸ばして入試で合格を勝ち取ることである。そのためには、望ましい姿を自分自身で描き、こうなりたいと思いつむことが大切だと思う。私自身の幸運な体験を紹介させていただく。

私自身がIT業界を目指したのは、大学卒業の寸前である。特に興味も知識もなかった、というよりコンピュータ

の存在すら知らなかったのである。大学の授業で初めてその存在を知ることになるが、その時は、悪友がどこかから仕入れてくれた正解プログラムをそのまま提出しただけだったので、興味も知識もなし、のままだった。しかし、しばらくして幸運なことに「望ましい姿Ⅱになりたい自分」が天から降ってくることになる。

面倒くさがり屋の私には苦痛でしかなかった卒業研究での実験データの整理を、研究室の先輩の助言があつて大型コンピュータで処理することになった。今ならパソコンかスマホアプリでちょちょい、だろうが、当時はちよつとしたことでも超高額な大型コンピュータしかなかったので、その恩恵に預かれた人はごく限定的だったのである。先輩から何枚かのカードを借りて、この後ろに自分のデータをパンチしたカードを加えるだけだから私でもできた。これをカードリーダーで読み込ませると、プリンターのところへ移動するわずかの間に素晴らしい結果が出てくるのである。「これだ!」と感動して、コンピュータを飯の種にしよう、と即決した。

私の娘のように小さい時の夢や目標を持ち続けることができる人は実は少なく、目標自体がなかったり、あいまいだったり、あきらめたり、見失ったり、というのが大半だと思う。知識や技術習得による能力向上や進路に関する

正確な情報提供が教育機関の重要な役割だと思うが、学生や生徒の将来像を形成するために色々な事物や考え方に触れる機会を提供するのも同じくらい重要だと思う。

価値を実現する活動

これまた主体が悩ましいが、学生・生徒にも教職員にも使えるはずである。ただし、双方が同じような内容と水準の価値を想定し、その実現を目指す意識がなければまともな成果は得られず、いずれかが玉砕する、という悲惨な結末になる。

私の専門学校勤務時代の信じられない事例を紹介する。専門学校というのには一般的には最終学歴なので、卒業Ⅱ学位取得が重要な達成目標である。例えば、就職先から内定通知をもらっていても、卒業が確定しないと正式採用にはならない。卒業式までに学費支弁が困難な学生には一定期間の延納を認めたくえで、学費納入が完了した時点で卒業扱いとする、という運用をしていた。

ところが、学費支弁に苦慮していた某保護者からとんでもない要求が出た。学費を完納できていないが卒業式には参加させてもらえないか、式典への参加が無理なら卒業証書なしの空のケースだけお借りして、すでに予約済の晴れ着で写真だけは残してやりたい、とのことである。娘の将

来と晴れ着写真のどちらが大事なんだ、晴れ着のレンタル代を学費に充てるべきだろ、とその時は考えてしまった。

しかし、価値観というのは人それぞれであり、自分の価値観を押し付けたり、他人の価値観に口出ししたりすることは、特に教育現場ではやってはならない行為だと思う。

学校関係者はもちろんのこと、学生・生徒にも授業内や校内では、きつく禁じるべきと私は考える。右記の例では、この非常識な保護者の要求を受け入れて、学生本人が傷つかないように極秘での特別対応をした。内定先企業にも高卒待遇で入社、卒業確定後に専門卒待遇、といった心暖まる例外的対応をしていただけたと記憶している。

教育現場というのは喜怒哀楽の宝庫であり、真剣勝負の場でもある。教育サービスの提供側、享受する側、それぞれでのさまざまな立ち位置において教育現場に関わることでできた私は幸せ者である。

V

研究会の地平

数学の視覚化から概念の意味へ

カブリ・ジオメトリ研究会 福島 一洋

予備校とは、小・中・高校のような校則のあるような学校ではないところであり、その場所での教育とは「一人一人の生徒さんにこうなつて欲しい」という思いをもつて接する」ことなのではないかと思ひます。

我々、カブリ・ジオメトリ研究会では、「一人一人の生徒さんに数学の公式や定理の持つ意味を知つて欲しい、考へて欲しい」という思いから、数学の様々な概念を、数学ソフトを使用し、動的に視覚化して、意見交換をし、授業で実践しています。今では、高校でも導入され始めていますが、概念の図形的意味を重視した動的な視覚化教材を用いた授業を先進的に始めることができたのは、公教育ではない予備校だったからではないでしょうか？ 図形的な意味から、数学概念に隠された深い意味へと導かれます。こ

うした意味を考えることは、何事においても重要であり、一つ一つの物事の意味を考えながら生きることに繋がると考へています。河合塾で特別授業を担当されたことのある数学者の銀林浩さんも、『人文的数学のすすめ』のなかで、「人間は意味を附与しなければ一瞬も生きていられない動物」と述べておられます。

僕は高校を受験した時からあまり学校に行きたくはなく、数日は行きましたが、家から学校までの距離がかなり遠く、学校の規則も厳しかったなどの理由から十六歳の時に高校を中退し、河合塾のCOSMO（河合塾旧大検・高卒認定試験コース）にお世話になりました。

COSMOで小林一路さんから数学を教わるまでは、それまで学校の教育で習ってきた、単に暗記しただけの公式

や定理に与えられた数値を当てはめて答えを出すだけの、何も意味を考えていない生徒の一人でした。小林一路さんの授業では、公式や定理の持つ意味や概念を一つ一つ教えてもらい、意味を考えるようになりました。この意味を考えるということとは、当時の僕には強烈に感動した覚えがあります。

折に触れて聞いた話から、高校数学の内容とも関係の深いパスカルやデカルトが、数学者であり、哲学者であることも知りました。ニュートンとともに微積分学の創始者であるライブニッツは、高校生には、哲学者として知られています。これらのことは、意味を通じて、数学が哲学と結びついているのではないかと思えます。

大学卒業後、河合塾の講師になり、小林一路さんたちのチームに入り、公教育の枠組みにとらわれない意味を重視した教材を作成し、モントリオールの数学教育の国際学会のプレナリー発表に招待された河合塾チームのアシスタントをきっかけに、メルボルンの学会では自ら発表することができました。また、僕たちの作った動的視覚化のソフトが、フランス語に翻訳されて、フランスのユニヴェルサルス百科事典 (Encyclopaedia Universalis) の CD-ROM 版に採用され、英語版はカナダのシュブリンガーの学習教材に

も採用されて、世界の多くの数学教育者からも支持されました。

文教研の二〇一五年の合同研究会では、「非ユークリッド幾何学の動的視覚化」について研究会の共同研究の内容を、僕が発表しました。

ここで触れておきたいのは、ポアンカレやクライン自身が行った数式の視覚化です。ガウスたちの数式による非ユークリッド幾何学の論理はとても難しく当時の多くの数学者も理解ができませんでした。そこで、ポアンカレたちは、図形としてモデル化して分かりやすく表現しました。

その後、一般の数学者にも理解がひろがり、大学の教育課程のなかにも組み込まれることになりました。高い概念は発見された後、分かりやすく表現することが必要になります。視覚化が歴史的にも行われてきました。

もう一つ、COSMOでは忘れられない思い出があります。それは牧野剛さんと出会ったことです。牧野さんは、当時、授業の後で僕とよく一緒にソフトクリームを食べに行っていたのですが、ある時、ソフトクリームを注文したら僕のが五巻きで普通サイズ、彼のは三巻き半の小さいサイズが出てきて、すごい剣幕で店員に詰め寄って作り直さ

せて出て来たのが十二巻き半という超特大サイズで笑うしかないというエピソードがあつて、とても学校の先生とはかけ離れた人でした。

選挙の時には、毎日突っ走って、一生懸命生きている姿を見せてくれる人でした。

そんな彼だから、学校教育では絶対に教えてくれない、人の生き方のようなものをいっぱい教わりました。それは、今となっては、僕にとって通常の高校では聞いたことのない言葉であり、内容でした。

彼らから僕が教わった共通するもの。それは、「物事の意味を考える」ことであり、彼らもおそらく「僕にこうなつて欲しい」という思いがあつて接してくれていたから今の僕があるのだと痛感します。最近では、僕が講師になつて、生徒と講師という立場が逆転したからというものもありますが、以前のような強烈に物事を訴えてくる人々が減つたように感じて、何より、予備校が学校の延長のような場所になつてきているような気がしてなりません。今回、予備校の存在の意味を考えさせていただいた、この執筆を依頼された文教研の皆さんに感謝いたします。

〈コラム〉

「日本近代・思想史研究会」の紹介

茅嶋洋一

当研究会は、思想史的側面から、〈日本近代〉とは何であり、それを突き動かし、また領導した思想的文脈とは如何なるものであったのかを検証することに研究の主眼をおいている。だが、日本の〈近代〉を探るためにはその前史としての中世末・近世の日本社会の文明史的な姿を明らかにすることが不可欠であるし、〈日本〉の近代を対自化するには、世界的視野から光を当ててその固有の像を形づくる必要があるとも考えている。

とはいえ、我々は学究的で静的な「研究」を目指しているわけでも、行っているわけでもない。会員内の研究会はその活動の一部にすぎず、九州地区を中心とする塾生・講師・職員とその周辺を対象に、講演会・公開講座・研修会等の企画・運営やパンフレットの発刊を通じて、「日本近代」や「歴史」についての通念的理解からの解放をも企図しているのである。それはまた、戦後歴史学を主導してきた「唯物史観史学」や「実証主義史学」等の描く進歩主義的歴史像がネガティブに位置づけてきた、あるいは闇に葬ってきた人物や事象にも視点と角度を変えて見直すことにもつながる。

そのような企図に基づいて催された講座や講演会の中か

らいくつかを拾い、そのタイトルと呼びかけ文の一部を紹介することによって、当研究会の基本的なスタンスを推し測っていただく資としたい。

★当研究会が企画した講座・講演会の紹介

○朝鮮史から日本史を見ることと、韓国から日本を見ること——日本人研究者の朝鮮史への想い

韓国・成均館大学教授・宮嶋博史

近代国民国家の成立は、その自己像としての物語、即ち『国史』を不可避に紡ぎだす。それはまた同時に、他者像を創出することと不可分の構造を持つ。東アジア・朝鮮半島と日本列島におけるその近代の鏡像関係を根源的に考察する作業は、表層的時局への喧しい反応⇨ナシヨナリズムの煽情的言辞の横行という状況の中で、とりわけ必要な営為といえよう。日本・東京大学から韓国・成均館大学へと、その身と眼を移して考察を続ける宮嶋氏の言葉に耳を傾けたい。

○国民国家の物語⇨『国史』を超えて——東アジア共有史への試み

早稲田大学文学部教授・李成市

国民国家の物語⇨『国史』からの解放の試みを説く李成市氏の言説の深奥には、『国民国家・日本』という歴史的な幻想共同体の現実の中で〈在日〉として生きる彼の存在形

態を抱えざるをえない燠火のような想いが感じられた。その彼の言説は、〈東アジア・九州島〉の住人をもって認じる私の、『国民国家・日本』の物語Ⅱその『寸胴の歴史観』への確執と、異なる立場からの接点と共感をもって響いてきた。

○内なる江戸——日本近世文化再考

九州大学名誉教授・中野三敏

江戸という時代と文明は、近代においてはまず否定の対象として語られてきた。だが、日本近代が極まった果ての相貌を呈してきた昨今、江戸再評価のブームが世を賑わしている。しかしそれは、近代の空の下、近代の空気の中で育てられた人種によって語られる『江戸』にすぎない。ところが中野氏は、江戸文化——就中、その中期——にとっふりとは切り切った、まさしく江戸の内なる人物である。彼の語りによって織りなされる『内なる江戸』とは如何なる世界なのであるうか。

○快と狂のあいだ——宮崎滔天の夢と絶望が映し出すアジアと日本近代の逆説

河合文教研特別研究員・渡辺京二

或る時代と社会、その文明のあり様を如何に受けとめ、理解しその像を描くのか。歴史を覗くそのパースペクティブを規定するのは、その人が自らが生きる時代社会とどのように相渉っているのか、ということと通底する。渡辺

氏が自ら生きた〈昭和〉という時代を対自化しようとする時、昭和に至る日本近代史の解明という作業は不可避となり、その近代史を照射するカンテラとして彼が把み出したのが、〈逆説〉という視点であつたらう。それこそが、彼をして西郷南洲、北一輝、そして宮崎滔天といった日本近代史のアポリアともいうべき存在を、その歴史を貫く系として主題化せしめたものと思える。さらにまた、その日本近代が扼殺し、「逝きし世」として葬送した江戸期文明の姿を描かせたものもそこにあるようだ。

その他、「近代の叙情とナシヨナリズム——幸徳秋水と石川啄木を通して」（歌人・福島泰樹）、「中国史とは私たちにとって何か」（河合文教研主任研究員・谷川道雄）、等々。

なお、昨年からは河合文教研の特別研究員となられた渡辺京二氏は、昨年までの二十五年間、河合塾福岡校の現代文科講師であり、当研究会のメンバーでもある。氏の『逝きし世の面影』の内容紹介を「KAWAII文教研れば」と2003秋vol.3号に掲載している。そして当研究会は、渡辺氏の著述活動を側面から支援することも目的の一部としている。

（『KAWAII文教研れば』二〇〇七年春より）

「これがあれだ」をどう築くか

教育方法研究会 岡 文子

予備校教育を考える研究会の今を、やや実況中継的に述べてみたい。

本研究会では、昨年度より「読む研究」に取り組んでいる。今年度（二〇二一年九月三十日までの成果として最大のものは、「読むとは、『これがあれだ』になることである」である。これは、目の前のテキスト（「これ」）が、なんのことも（「あれ」）を指しているかということがわかるということという。未知が既知になるといふことばかりではなく、漠然と知っていたようなものが文章によって自分ですでに知っていたことに気づかされる体験でもある。この細かいニュアンスも含めて、われわれは「読む」（読んでわかる）ことを「これがあれだ」体験と称している。数回の会議を経て、漸く端的に表せる言葉がみつかった。現在、蓮實重彦『物語批判序説』を読み合うことで、さらに考察

は深まっている。

これまで教育方法研究会としては、さまざまな活動を行ってきた。学習において知的好奇心を育てるために、授業外のイベント（愛・地球博でトヨタグループ館のロボット作成者による講演、朗読家の指導による朗読の体験など）を実施するかたわら、初年次教育における経験から予備校教育に拡大できることの考察、ピアワークによる記述力の養成などに取り組んできた。

昨年度（二〇二〇年度）、そもそも教育の原点ともいえる「読む」とはどういうことかを見直そうという意見があり、研究会内外で関心のほどを聴取すると少なくとも十人は考え直してみたいということであった。そこで、研究会メンバーの提案者井上真氏（中部現代文科講師）とスケ

ジュールの合うメンバーを集めた。AIに優る人間の能力が「読解力」であるといわれて久しく、また、国語以外の教科でも「読む」ことの重要性はお題目のように唱えられはするものの、実際「どうしたら読めるのか」「どう導けば読めるのか」になると、語彙・文章構造といったところにおさまってしまうことが多い。そこから、もう一歩以上進めるにはどうすればよいのかを考えるために、まずわれわれ自身も、「読む」体験を実践することにした。普段一人では読まないものを共に読むことで、また、それについて語ることで、われわれの読みが深まり、「読む」ことはどういうことなのかがある程度汎用性をもつて、科目を超えて予備校内外で共有できるものが見えてくるのではないだろうか。

本格的スタートは、二〇二一年五月十六日となった。読書会形式にて、井上氏、主宰岡文字（中部現代文科講師）、米津明人氏（中部数学科講師・六月より参加）の二名ないし三名で、二〜四時間ずつ、月に一度、選択した書籍に対する意見交換及び「読む」とは何かについての考察を深めた。初回は、大谷能生『散文世界の散漫な散策 二〇世紀の批評を読む』（メディア総合研究所）を取り上げた。この著作は、五冊の批評を引用しつつ、それぞれに筆者独自の解説を付けるという手法で行った講義録である。この著作に

より、実際の芸術作品に触れていなくても、この講義録からその語られる芸術作品がある程度理解できるということを改めて気づかされる。当たり前ではあるが、未知のものも文章に導かれ、既知のものに変化していく。ただし、完全に未知なるものに対峙しているのではなく、ある種の「暗黙の了解」がある。人々にはすでに知っている現実があり、その現実のある部分を文章によって指摘されていると認識したときに、未知が既知になるといえるのではないか。この「暗黙の了解」を了解できる者が「読者の資格」を持つ者といえよう。「読む」ことをさらに分析してみると、以下の四つのレイヤーが想定できるのではないだろうか。1「書き手は何を言おうとしているのか」、2「言おうとすることに向けてその都度」何を言っているのか」、3「どう言おうとしているのか（文章の構成）」、4「文章が対応している現実はどういうことか」。これらが理解でき、「読めた」といえると仮説を立てた。

第二回は、竹倉史人『土偶を読む』（晶文社）を取り上げた。本書は、土偶を縄文時代の環境や縄文人が体感しているであろうことを手掛かりに土偶が何であるかを著したものである。まず、土偶を「植物の人体化」と結論付け、それを検証していく。特別に難解な部分はなく、それぞれの土偶がどういう植物の人体化なのか述べられ、本書冒

頭にあるように「どの章から」読み始めても、理解できるようになっている。ここで、「自分も土偶を『読ん』でみようと思った」と文章の内容を自己に取り入れ、実践してみようとする井上氏と『植物の人体化』の具体例が続くばかりで論の深まりがない」と考える岡と読み方が対照的であった。前回の、「読むのレイヤー」に对照させると、本書は2「何を言っているのか」に終始しているからだろうか。後日、米津氏から、冒頭にすでに結論があり、それを例示する構成であることから、そもそも「論の深まり」ようがないとの指摘があり、実際に読んでみるのにもかかわらず、そこに気づかない、すなわち「これがあるだ」にならないという現実にわれわれが深くわしている。「土偶」(「これ」)を見て、それが表す植物(「あれ」)がわかるというヒントから、わが研究会では、「これがあるだ」を「読んでわかった」という理解の実感」という意味で使うこととする。

第三回以降現在、蓮實重彦『物語批判序説』(講談社文芸文庫)に取り組んでいる。本書は、なかなか一筋縄ではいかず、「これがあるだ」になるまでにかなり読み込まなくてはならない。読み込んだうえで、わかったと思っただとがわかっていなかったことに気づき、わからないなりに読み進めるとわかってきたように思える。本書ほど、読書

会で自分の理解を確認し、思考を深めるのにうってつけのものはないだろう。

蓮實は、「問題」という語を「現代に生きるものであれば誰でもそれが何なのかということについての物語を語りうると思われているテーマ」と定義する。ここでいう「問題」をわれわれは「蓮實的『問題』」と呼び、この蓮實的「問題」を「あれ」とし、かつ文章における「背景知識」と考える。文章読解において、漠然と「背景知識」といわれているが、なぜその知識が必要なかの必然性は多くは語られていない。しかし、井上氏が指摘するように『あれ』は『これ』が書かれねばならない理由、ひいては欲望の説明になっている、「『なぜこれが書かれねばならないのか』についての了解」があつて「読む」が「発生」するとわれわれは考える。したがって、文章を読むためには、どうしても「背景知識」として最低限のものが必要になる。「最低限」とはどれくらいのものなのか。その考察を深めるきっかけがあつた。本書の「II」(第二章に該当する)を読み進めると、プルーストの『失われた時を求めて』が前提となつている箇所が随所に出てくる。実際には、「プルースト」が誰かも『失われた時を求めて』の内容がどうなのかも知らなくても読めるのだが、現代文科の講師(井上氏、岡)は完読しておらずとも、なんとなく知っている

と無意識に読んでいた。ところが、「I」がある程度読めたにもかかわらず、数学科講師(米津氏)は、「ブルースト」『失われた時を求めて』を知らないの、それが前提になっている文章を読み進めることに抵抗があるとのことであった。何をどこまで知っていれば「背景知識」があることになるのか、「これ」が「あれ」になるための「あれ」の必要量への戸惑いをまさに目前で提示してくれた。何をどの程度知らないと読めないのか(読めないと思いついてしまうのか)、生徒ではなかなか言語化できない体験を米津氏はしかと言語化していた。

本研究は、科目間を超えるという点でも有意義である。数学科では、「問題」(入試問題としての問い)が、例えば「数列」をきく「問題」であればそれは、まさに蓮實的「問題」つまり、「数列が何なのかを語りうるテーマ」として取り上げられている。この明確に(入試での)「問題」が蓮實的「問題」である数学と現代文とは対照的である。現代文においては、形式での「評論」「小説」などの分類も大雑把であり、内容では「近代を生きる」「自分とは何か」などのようにテーマも漠然としている。さらにそこにある「近代」や「自分」を自明のものとして、「設問」はたてられている。そして「これ」が「あれ」になりえていない状況に無自覚(自戒も含めて)な教育現場があるので

はないだろうか。

現代文教育において、蓮實的「問題」の体系化と共有方法が実践的モチーフになるのではないか、「これがあれだ」の共有・実践を今後の「読む」研究会活動の主軸としていきたい。さらには、科目間を超えて、「読む」とはどういうことを共有できるようにまで拡大していきたい。まずは、多くの方々に「これがあれだ」を知っていただきたい。

「受験産業」としての河合塾からの離陸テイクオフ

—河合文化教育研究所の存在と二〇世紀国際政治史研究会

二〇世紀国際政治史研究会 細井 保

自史から

私はベビーブーム世代の最後の生まれで、中学時代には自宅に近い名古屋市瑞穂区駒場町の古い木造校舎（河合塾発祥の地）に通ったこともあったが感動するものは特になかった。私の高校時代はベトナム戦争が北爆開始と地上軍の投入で激化した時代で、こうした世の中のできごとへの関心はもちろん強まったが、理化クラブの化学班で化学に入れ込む日々が変わることはなかった。自分の周辺には「受験地獄」などという言葉が徘徊していた。卒業後は既定の路線のごとく河合塾の大学受験科に進んだ。自分にはあまり関係なかったが、東大の入試が中止になった年でもあった。当時「受験地獄」の元凶の一つは「受験産業」とみられ、私の住む中部地方では「河合塾」はその代表のよ

うなイメージがあった。千種校の定員四〇〇人の縦長の大教室の最後尾の席を占めた人達はほとんど例外なく双眼鏡持参であった。まさに「マスプロ教育」を象徴する光景を見て正直しらけた。講義にも当時の自分には納得できるものが少なく、次第に自主休講が増えていった。それでも、高校時代に理化クラブに所属して将来は化学の方面に進もうとしていた私が、紆余曲折はあったけれど、やはり高校時代からあった現代史、特に戦後史への関心を更に強め、敢えて政治や歴史の分野に方向転換したのは、河合塾での一人の先生との出会いがきっかけであった。那須宏先生（政経）である。翌年、私は二浪となり、河合塾へは行かず宅浪を決め込んだ。その報告の手紙を出したところ思いがけず丁寧な返信をいただき、私は毎週一回名古屋市の「成人学校」でその先生の「日本の歩み」という講座を受

講して近現代史の手ほどきを受けることになった。これが決定的であった。だから、当時の河合塾に恩義は感じないが、この出会いにだけは感謝している。しかし気に入った教科の講義だけを受講して勉強するやり方は受験には通用しない。その後私は愛知大学に進む事になったが、この大学には河合塾で唯一お世話になった先生の所属される研究会の先輩がおられ、紹介していただく前に偶然ある事情でお世話になることになった。ある事情とは、私が友人に頼まれて入ったサークル雄弁会（弁論部ではない）が一年次の夏の合宿の最終日に長野県の白馬岳に隣接する杓子岳で遭難事故を起こした時に、学生課の職員とともにサークルの合宿所となっていた民宿に駆けつけて下さったサークル顧問が柳沢英二郎先生であった。私はその事故の当事者の一人であった。この年には「ピンポン外交」「ニューヨーク・タイムズ紙、『米国防総省ベトナム秘密報告書（ペンタゴン・ペーパーズ）』暴露」と「林彪事件」「中国国連復帰」などの大ニュースが続いた。二年次からは柳沢先生の「政治学原論」を受講したが、その年一九七二年もまた「ニクソン訪中・訪ソ」「沖繩返還」「田中訪中による日中国交正常化」などの大ニュースが続き、断続的に続いたベトナム和平パリ会談の秘密交渉は、年末の「クリスマス爆撃」を挟んで、年明けて「ベトナム和平協定調印」に至っ

た。三年次からのゼミの選択は迷うことなく「柳沢ゼミ」となって、担当地域もベトナムとなり、柳沢先生のもとで国際政治史・国際政治学を専攻し、情勢分析の訓練を受けた。大学で私は自分が学ぶものに出会ったといえる。卒業後は大学院にすすみ、大学院修了後も愛知大学国際問題研究所に所属し、柳沢先生の指導を受け続けた。私が河合塾の教壇に世界史講師として立つ何年前のことである。

河合塾の教壇にて

先輩の勧めもあって、私が河合塾に教える側で舞い戻ってきた時、河合塾のかつてのイメージとのギャップに驚いた。河合塾は、いつの間にか「受験産業」として世間から白い目で見られる状況から脱し、社会的評価はずっと上がっていた。信じられないほどに。おそらくこの間試行錯誤を繰り返してきた教職員による地道な努力がもたらした成果であろう。共通一次試験が始まりしばらくした頃である。文化事業への注力も目立った変化の一つであった。やがてスタートした河合文化教育研究所の存在は大きかったと思う。未だ駆け出しの私は遠くから眺めるだけであったが、主に世界史を学ぶ塾生に、受験の世界史を超えた現代史を学ぶことの意味を考え、その理由を知ってほしくて、文教研主催の文化講演会に国際政治学者である柳沢英二郎

先生を招いて戦後国際政治史を踏まえた講演をしていただく企画を立てたりもした。入試を挟んで常に緊張をはらまざるを得ない大学と予備校の関係は厳然としてあるとしても、そうしたものは一線を引いた大学と予備校との少し異なるつながりを文教研が生み出していた。その頃は河合塾での講義の準備と模試問題の出題やテキストの作成に追われつつ、大学の恩師である柳沢英二郎先生と先輩の加藤正男先生（世界史料）とともにやつと『危機の国際政治史 1917-1992』（旧版、一九九三、亜紀書房）を完成させ、河合塾関係でも幾人かの方々に献本したが、後日、丹羽健夫理事が「（奥付にもあとがきにも）どこにも河合塾の名前がない」と嘆いておられたと人づてに伺い、「あれは大学の教科書にも使わんですよ」と答えたら納得された。おそらく丹羽理事の嘆きは河合塾≡予備校の社会的地位が未だ低いという思いからのものであったと思われる。大学と予備校の間には入試がからむ以上、奥付に「予備校講師」の肩書のある人物の著作は大学の教科書に採用しにくい。しかし「河合文化教育研究所研究員」の肩書ならばこの問題をクリアすることも可能ではないか。一九九六年春に柳沢英二郎先生が愛知大学を退職されることになった時、丹羽理事にそうした思いも伝えつつ、柳沢先生を文教研にお迎えすることをご相談して了解を得、柳沢先生宅を訪れて、

河合文化教育研究所に客員研究員として来ていただき私達が組織する二〇世紀国際政治史研究会の研究顧問としてご指導いただけないかとお願ひした。柳沢先生はわれわれが国際政治史の研究を続けることを条件に快諾された。

二〇世紀国際政治史研究会のこと

こうして一九九六年に発足した二〇世紀国際政治史研究会（代表 加藤正男、事務局担当 細井保）は今年二〇二一年で二十五周年となる。様々な（主に）国際政治の研究者を招いて研究報告をしていたく例会はこの十二月に予定されているものを含めると八十九回を数える。例会の開催回数には決して多くはないが、質の高い研究報告を積み重ねてきている。研究顧問であった柳沢英二郎先生は視力の低下から二〇〇五年の春に退かれ、二〇一二年末に急逝されたが、ライフワークの仕上げとなった『戦後国際政治史Ⅳ 1981-1991』と別巻となる『逍遙 現代国際政治史の世界』（後者は定形衛先生との共著、共に二〇〇二、柘植書房新社）を遺された。二〇世紀国際政治史研究会の活動が、この二冊の本の執筆と、『危機の国際政治史 1873-2012』（新版、二〇一三、柳沢英二郎・加藤正男・細井保・堀井伸晃・吉留公太の共著、亜紀書房）の執筆を支えてきた。文教研の『研究論集』の第三集（二〇〇六）と第十二集（二〇一五）で

は「二〇世紀の戦争・紛争をめぐる国際政治(1)、(2)」として二〇世紀国際政治史研究会の特集を組ませていただいた。更にこれら二〇世紀史研の活動を物心両面で支え続けて下さったのは河合文化教育研究所(「河合塾」とそのスタッフであったことを私達は忘れない。

予備校「河合塾」における本来的教育と闇の部分

しかしながら、新しい河合塾は、良い事ばかりではなかった。この論考の本来のテーマに対する私の答えはシンプルで、「予備校「河合塾」における本来的教育とは、自律的な思考や行動ができる人を育てること——これにつきる。もう少し言葉を添えるならば、各地の教育委員会の意向や管理教育の制約をはずれたところで「人を育てること」。だから高校ではできないことができようし、自由な教育、自由な気風のなかで「人を育てる」ことができるはず。これが本来的教育に不可欠のことではないか。

従ってそういう教育に従事する塾の講師や教職員を追い詰め非人間的な扱いをすることはやるべきではないし、現在も労働委員会に救済を求める講師が存在する以上それを放置することは河合塾の品位を落とすことだと思う。経営陣として権力を持つ方々は、そうしたことから目を背けず、その持てる力を「予備校「河合塾」の社会的評価を

あげることに使ってほしい。繰り返すが、現状の救済を求める講師に対する河合塾の対応は、弱い立場に立つ人の人生をもてあそぶもので間違っている。誤りは今ならばまだ修正することができる。目を覚ますことができないう、河合塾をミスリードする品格のないリーダーは、速やかに経営陣から去るべきである。沈黙は共に責任を負うということの意味する。心ある人々の勇氣に期待する。

予備校における初等教育

初等教育研究会 熊崎智子

私の河合塾との関わりは、一九九二年に小学生グリーンコース・理科講師として始まりました。

当時は中学受験のためのコースでしたが、現在は「高校受験ジュニア」となり高校受験の準備コースになっていきます。高校受験にシフトした事で、いわゆる十二歳の受験フィーバーはなくなりましたが、ハイレベルの知識をより多く身につけ、より効率的な解法を探り学びをスキルアップしていった結果、各自の目的を達成させるというコンセプトに変わりありません。もちろん塾も客商売ですから、そこについて来られない生徒も少なからず（多いかも）受け入れています。クラス経営は成り立っています。

他の私塾のように、生徒を暗示にかけるように皆一丸となつてエイエイオーとするのではなく、成績順に席を並べて自己意識を高めようとする事ありません。講師陣が小

学生であつても手を抜かず、高度な知識を与えつつもそこへ「遊び」を持ちこみ、いたって自由な授業展開をする。そこから、自己意識を生み出すようにしていく……これが河合塾の小学生の授業です。

講師として働き始めたころ、周りには大学受験等で河合塾にどっぷり浸かってこられた講師陣が多く、それが私にはとても刺激的でした。遅まきながら、河合塾の文化の一端に触れたわけです。子どもたちに「分かりやすい授業」はできて当たり前。学びへの「自発性」を促して普通。河合塾講師として、その先は自分で考えよ！と、鍛えられました。

今やキーをクリックすれば、あらゆる情報が得られる便利な時代。（それはそれでデメリットも多いですが。）話題をふつても大人顔負けの理論武装をし、その子どもたちの

「エビデンスはネット」というおかしな状況が年々多くなっています。もちろん、情報は正しく得られれば入手の手段は問いません。しかし、ただ、見て終わり……大人に論をふっかけるところまでで終わり……その先がありません。ましてや、それが本当に正しい情報かどうか判断する術も知らない年齢です。

図書館に通い詰め、人の言葉を聴き、さまざまな書物を読み比べて自身の知識を深めていった私たちとは異なる時代を生きている子どもたちですが、ネットからの情報はあくまでも受け身。他者に受け渡せる知識として身につけません。子ども時代は、自身の五感が刺激されて初めてモチベーションが生まれ、自主性へと育っていくのだと思います。特に「聴く」姿勢を身につけさせたいと手段を思案していたとき、縁あって初等教育研究会を立ち上げる機会を得ました。

科学分野をテーマに、大学の研究者や企業のその道のプロを招き、小中学生とその家族に対して公開講演会を開催しています。教科書にもまだ載らない最新の研究や技術を、バックグラウンドの深く広い専門家が語る事で、学校の勉強にはない楽しさを感じるようです。講演内容に刺激を受けた生徒の中には、後に、直接講演者に進路相談を願ひ出て、大学の学部選びにつながった生徒が何人もいます。

今では何でもネットから情報が得られる便利な世の中ですが、このように人と人がつながる場があれば、何らかの形で子どもたち自身の学びへのモチベーションが変ります。自主性というものは、ネットの中で操られて育つものではなく、自身の五感が刺激されて育つものだからでしょう。コロナ禍になりリモートという新しい手法が出てくる中、公開講演会もこの二年間開催していませんが……。

世の中の学びの在り方が変わっても、心に「たね」を植えるなら小学生から、その気持ちを支えるのは身近な保護者、それを育てる土壌が「河合塾という予備校」の小学部門。その意識をもって、活動しています。

内藤湖南における 中国の「近代」観についての小論

内藤湖南研究会 山田伸吾

はじめに

内藤湖南は、明治期において日本の近代東洋史学を創始した学者の一人に外ならず、所謂「京都学派」の始祖と称してよい存在である。その中国史に関する学識の深さと広さは、京大での講義録として刊行されている『支那史学史』、『支那上古史』、『中国中古の文化』、『中国近世史』、『清朝史通論』、『支那絵画史』などが全中国史を網羅した

内容となっており、ことからも歴然としているのであるが、こうした学者然とした姿の他に、絶えず当時の中国社会の現実に向けてジャーナリスティックな発言を行い、辛亥革命勃発当時には革命中国の未来図を描いた『支那論』（一九一四年・大正三年三月）を、中国において排日運動が盛んになった状況を見据えて『新支那論』（一九二四年・大正

十三年九月）を発表し、常に現実の中国社会と向き合う姿勢を鮮明に打ち出していた。胃癌で亡くなる（一九三四年・昭和九年六月）前年には、病を押して『日滿文化協会』設立のために満州に赴き、亡くなる年の一月に『大阪毎日新聞』に発表した「満州国の帝政施行に際して」という記事が湖南の最後の中国の現実に向けた発言となった。

勿論、湖南にとっては現実の中国と向き合うことと歴史研究及び中国学を深めていくことは矛盾なくつながっていた。現実を知るためにこそ歴史研究があり、歴史研究の中から現実の像を浮かび上がらせることが彼の課題であったのである。ただ、彼を取り巻く日中関係の現実はその裏切る厳しいものであったようで、先の「満州国の帝政施行に際して」では、祝賀ムードの漂う他の新聞記事とは異なり、満州新皇帝溥儀に対して「康熙帝のごとく」あ

れというような叱咤の言を吐いている。しかし、湖南は自分の思いを裏切るような厳しい歴史的现实を前にしてもその現実を半ば受容するという姿勢を崩すことはなかった。かといって歴史の大勢についての見方を変えるわけではなく、それを維持しつつある意味では臨機応変に歴史の現実と向き合っていたようである。

湖南のこうした生の中国に向き合うという姿勢は、戦前の同時代の人々からも様々な批判に曝されることになったわけだが、とりわけ戦後における湖南批判は、学者としての湖南というよりも、湖南の日中関係の現実への所謂ジャーナリスティックな発言に向けられた厳しいものであった。日本帝国主義の中国侵略を容認した、あるいは肯定した、あるいは積極的に支えたイデオログと見なされ、民主主義、平和、民衆のための科学、人民のための歴史学という新しい戦後の価値からは否定すべき存在であり、帝国主義国家に奉仕した御用学者と位置づける批判者たちも多く現れることとなる。一九四九年の「人民」中国の成立も戦後の湖南批判に拍車をかける結果となったように、中国学の碩学としては認めるものの湖南の歴史観は日本の「過去」の負の遺産として忘却されて然るべきものという雰囲気も醸成されていったようだ。しかし、湖南の文章を詳細に検討していけば彼は中国への侵略、その植民地

化には一貫して反対していたし（但し、日本が植民地を持つことを否定していたのではなく、中国社会の実情からその可能性を理由としていた）、彼の歴史観も、中国侵略を必然化するようなものでは全くなかった。その意味では、戦後の湖南批判の多くは、戦後の価値観を過剰に意識することによる誤読や誤解に由来するものと言ってもよいのだが、しかしそれだけではなく、彼の歴史観自体にもこうした誤解や誤読を誘発する内容が備わっていたように思われる。

戦後の湖南に対する批判の詳細については別稿に譲るとして、ここでは、湖南の東洋の「近代」（湖南自身は「近世」と呼ぶことの方が多かったが、この稿では繁雑さを避けて「近代」という呼称を使うことにする）、具体的には中国の「近代」についての考え方に検討を加えていきたい。というのも戦前・戦後を通じて湖南に対する批判には、彼の東洋のというより中国の「近代」観に対する反撥あるいは違和感ともいえるべきものが深く関与していたと思われるからである。さらにいえば、湖南の中国に対するジャーナリスティックな発言の根底にも、当然のことながら彼の特異な中国の「近代」観が前提にされており、その特異な「近代」観への違和感が彼の中国観に対する反撥や批判を増幅させていたとも考えられるからである。さらに付け加えれば、湖南の中国「近代」観の検討という作業は、必ずや現

在の中国社会を見通す上で必須の課題であると思われるからである。

(一)

湖南が中国の「近代」の画期について明確な学説として提起したのは「概括的唐宋時代観」(一九二二年・大正十一年五月、『歴史と地理』、但しこれは大正九年の京大での「支那近世史」の講義の冒頭部分だけを掲載したもの、と『全集』八巻の「あとがき」には書かれている)においてであり、そこでは「唐と宋との時代に於て、あらゆる文化的生活が変化を来し……支那に於ける中世・近世の一大転換の時期が、唐宋の間にある」と述べられており、宋以降が中国の「近代」と規定されているのだが、しかし湖南が宋以降を「近代」と考えるようになったのは、かなり早期であり、『全集』十巻の「あとがき」には、一九〇九年(明治四十二年)の京大での「近世史講義」の緒言で簡略ながら北宋以降を「近世」とする説に触れられていることが記されている。この時期に宋代以降近世(近代)説が構想されていたからこそ、辛亥革命という目前の中国を視野に入れた『支那論』が宋代以降近世説から書き始められたのである。まさしく辛亥革命が唐宋変革に淵源することが明示され、その終着点として革命以降の中国が構想されていたのである。

しかし、湖南の中国「近代」論の特異性は、辛亥革命に先立って構想されていたということにあるわけではない。問題は、中国の「近代」の千年にも及ぶような長期性と、その「近代」がそのまま「現代」と接続し、宋以降の世界が「現代」と同質の時代相と見なされていることにある。「近代」の最終局面として捉えられているのである。つまり辛亥革命も新しい時代相の始まりとしてではなく、長い「近代」の最終局面として捉えられているのである。つまり辛亥革命以降も決して新しい時代を画期するものではなく、宋以降に始まった中国の「近代」がどのような最終局面(これは生態学の用語である「極相」と呼んで然るべきものと考えるが)を創り上げるのかという歴史的課題を担った時代と理解されていたのである。「近代」が千年に及ぶ期間として設定されていること自体は、無論驚くにあたらない。湖南の「上古」(古代)は、開闢より後漢の中頃までのまさしく千数百年の期間として設定され、「第一過渡期」(後漢より西晋まで)を挟んで「中古」(中世)は「五胡十六国」の時代から唐の中頃までの五百年余とされており、千年に及ぶ「近代」という設定も大まかな時代区分としては別段奇異なものではない。ただ、問題は湖南の「近代」がそのまま「現代」をも組み込み、「近代」の発展形態として「現代」が発想され、この発想を前提とする限り一九四九年に成立した所謂「人民」中国も恐らくはこの

「近代」に組み入れられたであろうということである。

辛亥革命を支えた中国人人土及び清朝の中で「変法」を志した人土も、王朝を存続させるか否かという点では意見を異にしていたのだろうが、いずれも旧体制からの脱却を課題としており、新しくできる中国社会は新しい時代相を獲得すべきと考えていたはずである。すなわち「変法」あるいは「革命」を時代を画期するものと考えており、旧体制を根底から覆す新しい社会の創出が目ざされていたはずである。勿論、全ての「変法」・「革命」を志した中国人土がそう考えていたわけではないのだろうが、少なくとも一九一二年に成立した「中華民国」の出発点では、清朝という王朝体制を根底から覆すような時代画期をなすものとの意識されていたように思われる。西欧列強の侵略に曝されつつあった当時の中国にあって西欧文明を取り入れつつ自国を西欧国家に対抗しうる「近代」国家へと押し上げていくうとしていた。そうした中国人人土の中には日本の明治維新をモデルとなそうとした者も多かったようであるが、そのような中国の「現在」を見据えた上で、湖南は彼らの動き、在り方の淵源を千年以上も前の「唐宋変革」に設定したのである。何故そのように考えたのであろうか、湖南の「近代」とはどのような質を有した時代相として設定されていたのだろうか。

(1)

『支那論』及び『新支那論』、さらに『概括的唐宋時代観』、その後京大での講義録を編集して出版された『支那上古史』、『支那中古の文化』、『支那近世史』などを踏まえるならば、湖南の想定している中国の「近代」とは、様々な指標が提示されているけれども基本的には「貴族制」の解体という事態を挙げることができる。湖南のいう「貴族制」とは、六朝時代を中心に展開されたもので、五代代には崩潰してしまつたと位置づけられているわけだが、これは各地方における勢族が「九品中正制度」を介して官僚の上層部を占有し、所謂門閥を形成するようになり、こうした勢族と貴族が政治的にも経済的にも中央及び地方を牛耳るようになった体制をいう。換言すれば「士庶の区別」が明確となり、庶民が手を触れることができないだけではなく、皇帝権力すら及び得ないような強力な貴族という身分が出来上がったことを意味し、この時代を湖南は「中古」中世」と定義づけたのである。湖南は、次のように述べている。

要するに、六朝時代は、貴族が中心となり、これが支那中世のすべてのことの根本となつてゐる。これが変化

し崩れるまでが支那の中世で、これは唐末頃で、五代の間には全く崩れ去つてしまつた。……この貴族時代に起つた色々の文化的なこと、経学・文学・芸術など、皆この時代の特徴を備へてゐるが、これが支那文化の根本となり、今日の支那文化も、その上に築かれてゐるのである。

(「支那中古の文化」、『全集』十卷、三三一頁)

この「貴族制」が、様々な歴史的要因によつて自壊、崩潰して行き、政治体制としては皇帝が貴族の頸木から解放され君主独裁体制が成立し、一般民衆も貴族の奴隸というような立場から解放され、居住の自由さらには財産上の私権さえ獲得することとなり、君主と人民とが直接対するような体制が築かれることとなり、そうした体制を湖南は中国の「近代」と呼び、彼自身が眼前にしていた十九世紀末から二十世紀初頭にかけての中国社会の現実を生みだした歴史的淵源と見なし、その「近代」との連続性を有した社会として現実分析をなそうとしたのである。先の引用からも解るように、「中古(中世)」と「近世」との画期を貴族制の有無に求めつつも文化的には「中古の文化」を「支那文化の根本」と見なし、ある意味では時代画期の中にも文化的な連続性は想定されていたわけだが、宋代以降と辛亥革命の時代とを同じく「近代」という時代相の中にも含み

込んでしまふということは、文化的なもの以上に政治的・制度的な宋・元・明・清社会との強い連続性を見て取るような考え方であり、そこに時代画期を設定してないのである。この点で、多くの「変法」・「革命」を志していた中国人人土及び多くの中国「革命」に言及していた日本人とは大きな隔たりがあったといふべきである。辛亥革命以降の中国社会の動乱、混乱は、中国が新しい歴史段階にいたるための胎動、陣痛と捉えるような考え方が一般的であり、とりわけ戦後の「人民」中国の成立を目的たりにした日本の中国研究者たちがこぞつて湖南を侵略のイデオロギーとして非難したのも、湖南の辛亥革命以降の中国を旧体制と接続させて捉えるこうした中国「近代」観への反撥、拒絶反応に由来していたとも見なしうるのである。湖南の中国の「近代」は、基本的には宋・元・明・清の旧体制と同質のものでしかなく、「革命」の意味を無視した発想に外ならず、歴史的な進歩を承認しない停滞史観であるというような反撥、拒否感が生みだされ、湖南を批判する論調を増幅させていたように思われる。

(三)

しかし湖南は、辛亥革命以降を中国の「近代」とするよ

かつたのだろうか。それはまさしく湖南が歴史家、歴史学者であり、それも明から清にかけての中国の史学も含めた学問の新しい展開に通暁していた中国史学者であり、まさしくそうした歴史家の視点が發揮されたことによる。

湖南は、一八九九年（明治三十二年）九月から十一月まで三ヶ月間にわたる最初の中国旅行（台湾駐在は除く）を敢行し、その旅行記を翌年四月には『燕山楚水』（博文館）という表題で刊行するのだが、そこにその旅行中に出会った中国人人士との筆談記録が掲載されている。その筆談の実質は、当時の中国社会の抱える歴史的な積弊を指摘し、それをどのように克服してゆくのかという言わば中国社会の「変法」・「革命」の方針について湖南の側から糾問するという内容となっている。ほとんどの中国人人士も首肯せざるを得なかった湖南が指摘した中国社会の歴史的積弊とは何であったのかといえ、一般的な王朝政治、官僚政治による統治が、地域社会の「民政」とほとんど関係しておらず、地域民衆世界と国家とが一体のものとなつて居らず国家として構造的な欠陥を持つていてという問題であった。この問題は、勿論湖南の指摘によつて明らかになつたものではなく、「近代」の中国の多くの歴史家たちが指摘していたもので、当時の「変法」・「革命」を志していた中国人人士にとつても共有されていた課題であつたようであ

る。湖南も中国史の文献資料を読むことから確認し得たもので、この最初の中国本土旅行もこの課題に当時の中国人人士がどう向き合おうとしているのかを確かめるためのものであつたときえ言えるだろう。

ただ、『燕山楚水』執筆当時の湖南にはまだ中国の「近代」という時代設定についての明確な問題意識はなかつたよう、中国社会の抱え持つ歴史的な積弊を指摘するだけで「近代」という時代相との関係性については触れられてはいない。湖南が歴史段階としての「近代」という問題意識をもつたのは、やはり西洋史学の影響によるものと思われるが、それが何時のことであつたのかは分明ではない。その点は暫く置くとして、湖南の想定する中国社会の歴史的積弊と中国の「近代」とはどう関わるのであろうか。

(四)

湖南における中国の「近代」が、貴族制の解体に由来するもので、それによつて皇帝及び一般人民が貴族制の頸木から解放されたれ、皇帝と人民とが直接相対する社会体制をさしていることは既に述べてきたが、この「近代」の体制にも中国社会の抱える歴史的積弊は貫かれており、地方の「民政」は郷党社会と呼ばれる自治組織に委ねられ、国家行政・政治はこの「民政」とは関わりないまま末端の事務

を担う胥吏による徴税に集約されるような、およそ国民の一体感を前提とした「近代」国家とは見なされないような体制でしかなかったのである。湖南によれば「近來の支那は大きな一つの国と云ふけれども、小さい地方自治団体が一つ一つの区画を成して居つて、それ丈が生命あり、体統ある団体であるが、其の上之に向つて何等の利害の觀念をも有たない所の知県以上の幾階級かの官吏が、税を取る為に入代り立代り来て居ると云ふに過ぎない」（『全集』五卷、三六九頁）ということになる。

しかし、湖南はこうした体制を否定的な意味ばかりでは捉えず、「吏胥に権力がありとは云ひながら、又一方からは人民に接触する者に権力があると看ることが出来る」と見なし、さらに「詰まる所人民に近い者が勢力が加はつて、上級の者に實際の勢力が無くなつて居る。……若し其の人民に近い一階級を排除すれば、直に人民に勢力が帰着すべき瀬戸際になつて来て居つた」（同上、三三七頁）と述べるのである。

こうした内容を考えれば、湖南の中国の「近代」とは、一般民衆の勢力が増大し、政治・経済・文化を担うべく成長していく時代であり、この勢力によつて中国の歴史的な積弊が取り除かれる段階をその終局と見なしていたことが解るだろう。宋代が民衆の台頭してゆく「近代」の起点で

あり、その民衆が中心勢力となつて「近代」の最終局面を創り上げるといふのが辛亥革命以降の歴史的な課題であつたというような湖南の構想が浮かび上がってくる。辛亥革命以降が新しい社会体制の開始、新時代の到来ではなく、宋代以降の「近代」を完成するための歴史的條件が整い、どのように最後の仕上げが出来るのかが中国の「現在」の課題であると、湖南は宣言しているのである。

では、何故二十一世紀の現在、この小論においてこうした湖南の中国の「近代」観を取り上げたのか。それは西歐的「近代」をも含めて現在の中国社会（「人民」中国）を、まさしく歴史的な意味において再検討しなければならぬと考えているからに他ならない。現在の中国は、共産党の独裁政権で市民的「人権」が抑圧された体制であると一般的には見なされている。しかも軍事大国であり、経済大国であり、かつての東西対立とはいささか質の違ふ、西歐諸国、アメリカ、ロシア及びイスラム圏などが複雑にからみあつた国際的な対立が生みだされているような現況である。こうした中で、西歐「近代」の価値についての再検討もなされているようだが、中国社会については最後の「社会主義国家」といふような単純な捉え方しかなされていまいように思われる。この「人民」中国は、果たして湖南の指摘したような歴史的な積弊を払拭し得たのであろうかと

いう問題とともに、中国社会の「近代」を、さらにいえば日本社会をも含めた東洋の「近代」の内実をも検証し直さなければならぬのではないか。要するに現代中国と宋以降の社会とを接続させることによって、何が変わり何が変わっていないのかを鮮明に浮かび上がらせることができ、「人民」中国の「現在」の課題を発見しうるように思われるのである。さらに言えば、応仁の乱以降を日本の「近代」の淵源と捉える湖南の発想に立てば、明治維新も「日本の夜明け」などではなく、江戸期の課題を引きずった体制と捉えられるはずであり、明治維新以降の現代史も違った形で見直される可能性もある。西欧・中国・日本の「近代」を再検証しうる視点が用意されるように思われるのである。この小論も、極めて粗雑な素描を提示したにすぎないが、こうした検証の一つとなれば幸いである。

○内藤湖南研究会の刊行物（税込）

『内藤湖南の世界——アジア再生の思想』（二〇〇一年三月、河合文化教育研究所刊）五一八五円（発売・河合出版）

『研究論集第5集 内藤湖南研究——学問・思想・人生』（二〇〇八年二月、河合文化教育研究所刊、非売品）

『内藤湖南未収録文集』（二〇一八年十二月、河合文化教育研究所刊）二七五〇〇円（発売・河合出版）

あとがき——あえて河合塾の「予備校文化」を問い直す

本冊子は、昨年二〇二一年夏に新型コロナ禍のために開催が見送られた文教研の第一九回合同研究会の代わりに、文教研各研究会のメンバーに急遽「予備校における本来的教育とは何か」というテーマで執筆を依頼し、それに応えて寄せられた原稿をもとに作成したものである。

先の見通しのきかないコロナ禍の中の異様な緊張と、それでも対面やオンラインで進行する二〇二一年秋の授業の綱渡りの中で、にもかかわらず、最終的に二三編もの力作が寄せられた。実に心強かったが、ただ、その中には、こちらの依頼したテーマをあっさり外して自由に書かれた原稿も多く、なるほど文教研及び河合塾の「らしさ」というのは、こういうところにも表れているのだなとあらためて思った。

今回の依頼テーマ「予備校における本来的教育とは何か」を、本冊子のタイトルでは『河合塾における「予備校文化」とは何だったのか』としたが、これは対象を予備校一

般ではなく河合塾に限定し、「予備校文化」の淵源が予備校現場で行われる教育にあるということを前提に変更したもので、内容としてはほぼ同義である。過去形にしたのは、後述するように「予備校文化」がすでに多くの人にとって過去のものとなったという理解があることによっている。

本冊子の構成について

寄せられたさまざまな原稿をもとに、結局本冊子の構成は以下の五章構成になった。

Iには、一昨年二〇二〇年度の合同研究会のテーマ「あらためて「教育」とは何か、予備校文化とは何だったか」——新型コロナウィルス禍と新自由主義的教育改革のはざま——のもとに、当時基調報告を行った青木和子氏の報告——今回の冊子のために本人によって新たに加筆修正されたもの——が収録された。今回この冊子に寄せられた文章の中には、この時の青木報告をテコにして書き出すという

体裁がとられているものもいくつかあり、また明示的にそうではなくても彼女の報告を暗黙の前提にしているものもあったので、冊子の起点になる重要なものとして巻頭に収録させていたのだ。その意味でいえば、本冊子は、二〇二〇年度の合同研究会から現在に続くほぼ二年にわたる時空間の問題意識のなかで作られたものになっている。

IIには、この青木報告にじかに応える形で、新自由主義市場経済に包摂されつつ破局の方へと限りなく落下し続けるかに見える現在の予備校と大学について、深い危機感をもって書かれた菅孝行氏と野家啓一氏の圧巻の文章がおさめられた。

IIIは、「予備校という独自の教育空間で」という見出しのもと、ここにもっとも多くの文章が収録された。章の冒頭の芦川進一氏の文章は、ドストエフスキイとの鮮烈な出会いからこの世界に真摯に向き合って生きていこうとする若者たちを通して予備校文化のあるべき姿を追求したもので、文教研の研究会の独自性についての貴重な証言となった。このIIIには、ほかに河合塾の授業の豊かな可能性や、文化講演会での質疑応答のやりとりにもオルタナティブな教育の可能性を探ったものなど、予備校についてのさまざまなベクトルと水準を持つ興味深い文章が数多く収録された。

中には、「予備校における本来的教育とは何か」というこの冊子の依頼テーマそのものを批判した文章もあった。たしかに、「本来的」とか「真の」とかという大仰な修飾語がつくものは、昔から実体のない怪しげなものだと相場が決まっている。その上、「受験産業」であるところの予備校の授業（商品）を教育と僭称するなどさらに怪しからんということになれば、こうした批判が出るのはむしろ当然のことでもある。また、テーマそのものから疑ってかかるという批判方法は、もともと河合塾のお家芸のようなものでもある。その意味ではこうした批判はあつてしかるべきものだともいえよう。ただ、本冊子の文章の多くは、おそらくはこの「本来的教育」という言葉の一面でのいかかわしさを確認しながらも、一周まわつてそれをあえて自分に引き受け直して書かれているのだと思われる。

IVには、教育とは、究極的には他者を介した本人の自己教育である、ということを実際に証明するような稀有な個人史をもとに書き起こされた印象的な文章が入った。

最後のVには、この合同研究会を構成する各研究会の具体的な活動について、自身の経験や想いをもとに書かれたものが収録されている。章の最後には、そうした地道で丁寧な活動紹介や報告のあとに、内藤湖南研究会の山田伸吾氏による湖南のきわめて独自の「近代観」——辛亥革命も

明治維新も近代の端緒にならない彼独自の時代区分によるそれ——を考察した純粹な研究論文を置くことになった。本冊子は、そうしたものでをも含むゆるやかな幅でできているということでもある。

なお、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴにはこれまでの文教研の三〇年余の刊行物の中から、三つの文章を拾いだしてコラムとして挿入した。このうち茅嶋洋一氏と牧野剛氏は故人だが、これまでの文教研の軸を担ってきたベテラン講師である。「本来的教育」などというところ、もともと教育そのものは良きものであるということが自明視されていることになるが、小林一路氏のコラムは、そうした教育に良きものという前提までをも根本的に問い直そうとしたものである。三つとも文教研の奥行きの深さを表わしたコラムになっているのではないかと思う。

新自由主義教育批判をなぜするか

一 昨年(二〇二〇)年度の合同研究会だけでなく、二〇一八年度の合同研究会でも「なぜいま〈高大接続改革〉か——新自由主義的教育改革をめぐる」というテーマが選ばれている。つまり、ここ数年の合同研究会では新自由主義的教育改革批判が通奏低音のように鳴っているのである。これについては、「新自由主義批判はすでに出尽くして終

わっているのに、なぜいまだにそれをやるのか」という批判もある。だが、新自由主義批判がいかに理論上尽きているようにみえても、現実には新自由主義はこの地球上で加速度を増していまも進行しており、その作用で回復しようのない破局的なリスクを世界中にもたらし続けている。人間の内面にじかに関わる教育も、これによって大きく歪められてきているのである。

新自由主義とは、「民営化」や「規制緩和」などの一部の経済政策を指すとナイーブに考えられているような無害なものではなく、「経済発展」を国是とし、その妨害になりそうな「平等」や「人権」や「民主主義」など近代の成果をもすべて薙ぎ払っていく動きである。グローバル市場の競争環境を創り出し、それをどこまでも拡張するため、国家が福祉・教育・医療などの本来市場とは別ものであるべき社会領域にまで強力で介入し、それによってすべてを市場に従属させてしまおうとする運動のことである。

国立大学の法人化を断行した小泉政権以降、とりわけ第二次安倍政権の教育再生実行会議などによる教育改革は、身もふたもなくこのライン上をつき進んで今日の惨状に至っている。国家が市場を管理するのではなくいまや市場が国家を支配するという逆転現象が起きている。これが、世界中の貧富の差を拡大し、行き過ぎた開発によって深刻な気

候変動を伴う地球環境破壊を招いているのは、いま私たちがまさに眼前に見ている通りである。

個別の人間の行動をすべて経済化し、市場における競争で勝ち抜けるひと握りの人間を作り、一方で市場に適合的な従順な多くの人間を作るのが新自由主義教育である。ここでは諸個人の人間の成長や他者への想像力を培うことなどは問題にされず、どこまでも市場での競争力が追求され、競争に勝ち抜く人間が有用視される。競争に敗北した人間は「自己責任」を問われるのみである。

なぜ、新自由主義教育批判を、この合同研究会でやらざるをえないのかといえば、右に記したように、それが今や自然のみでなく個人の内面をも根底から大きく変容させてしまっており、教育を考えるときのネックになってしまっているからである。この教育の根幹を掘り崩す新自由主義教育の問題をなおざりにして、予備校における教育や「予備校文化」を問い直すことはできない。

では、その肝心の「予備校文化」とは何だったか。河合塾の「予備校文化」について、新自由主義批判をいったん後景に退かせた上でみておきたい。

河合塾の「予備校文化」とは結局何だったか

「予備校文化」という目に見えないながら一時たしかに

眼前したものが、この間ほぼ消えかけているという暗黙の了解だけは、すでに成立しているように思われる。

「河合塾のような予備校が日本の中で作り上げている文化の不気味なアナキズム」が「社会的役割以上の種の積極的な文化というものを、どうも担ってしまっているのではないか」（蓮實重彦『映画からの解放』河合ブックレット、一九八七年）と、ある期待を込めて「予備校文化」が語られた時もあったが、それはすでに終わって久しい。今回、二〇二一年度の夏の合同研究会開催が不可能になり、その代わりにこの冊子を文教研で作ろうとした時、おそらく関係者全員に共通してあったのは、これまであいまいにしてきた「予備校文化」というものをどう確認し直し、その葬送と再生をどうするのか、という問いではなかったか。

河合塾の「予備校文化」には、公教育Ⅱ中心、予備校Ⅱ周縁という社会の既存の構図を前提にした上で、そうした周縁であるからこそ、逆に制度に縛られない柔軟で自由な教育ができる、そのことよって硬直した公教育Ⅱ中心を鋭く撃つことができる、という思いが込められていた。ざっくりいえば、既存の秩序や文化を攪乱・破壊し新しい文化を生み出そうとする「トリックスター」の存在としての予備校についての自覚があった。だが、予備校が周縁から中心へと社会内を移動するにしたがって、そのトリックス

ターとしての力と存在意義は薄れていき、加えて若者人口の減少、そしてこの新自由主義の攻勢による人間観そのものの変化という外的状況の変化のもと、いやおうなく「予備校文化」は終焉を迎えたといえる。

では、その「予備校文化」の究極の核心とは何だったか。それは、ひとえに予備校における教育の問題にかかっている。予備校の授業とは、志望大学に合格するための商品であることが当然ながら第一義的要請としてある。しかし、良い商品であるためにも、教師から生徒への（受験のための）知識や技術の教授・伝達という表層的な水準を越えて、生徒の生き生きとした学習意欲が引き出されるような質の授業が提供されねばならない。

そもそも教育——あえて本来的教育と言ってもいいのだが——とは、子ども自身が本人の中の未知の深層に向かつて下へ下へと自力で下りていく旅の過程を、教師が傍らで見守り手を貸すことである。そして彼がみずからの手で自分の中の豊饒な井戸をついに発見し、それを自力で汲み上げようとするとき、やはり教師が傍らで適切な手伝いをするということである。この、子どもの傍らで適切な手助けをするということこそが、ソクラテスの産婆術を俟つまでもなく、究極的には教育と呼べるものではないか。子どもの中の可能性を信じ、彼がそれを自力で汲み上げられることを

信じることに。そのために教師が自分の存在を賭けること。こうして、教師と子ども間に信頼をもとにした深い出会いがなり立つなら、その全体が教育だといえよう。その信頼を育むためには、教師の側も常に自分自身が変わっていかねばならないことになる。「予備校文化」というものが成立するとしたら、この教師と生徒の人間的な出会いにしかない。こうした出会いがないところで知識だけを詰め込まれれば、これまでの公教育がそうであったように、おそらく子どもにとってはそれは抑圧にしかならない。この冊子にも、子どもの側と教師の側の両方の立場から、この出会いの大切さについて記されたものが多くあった。

おわりに

新自由主義教育と「予備校文化」を支えた教育とは、対極的な人間観に立つものである。つまり、市場に役立つ単なる駒として人間を見るか、人間の中の良きものの存在を信じ、自力でその良きものを汲み上げられるものとして人間を見るか。本冊子に寄せられた文章も、自由自在に書かれているとはいえず、結局この問題圏をさまざまな角度から、考察しようとしたものだともいえる。

因みに、本冊子に寄せられた文章には、「汝自らを求めよ」という河合塾の塾訓に触れたものも一、二あった。こ

これは、この河合塾の創立者である河合逸治氏が、デルフォイの神殿の入り口に掲げられた「汝自らを知れ」(Γνωθι Σεαυτον、グノーティ・サウトン)を「汝自らを求めよ」と読み替えて、河合塾の塾訓として説いたものである。ここにも「予備校文化」を支える人間観と同じものがあるので簡単に一瞥しておきたい。

「……ギリシアのデルフォイの殿堂の入り口に「汝自らを知れ」と印刻されているが、それは要するに、自らを究め、この世に生まれてきた自らの使命を見出して、それを飽くまで追求する歓びが諸君のすべてに与えられていることを意味するものであって、これが神のみめぐみであり、こうした確乎たる信念を抱いて、われらの塾に集まってもらいたい。自分を掘り下げて使命に生きる、そのためにいそしんでもらいたい。」

〔河合塾五十年史〕一九八五年〕

「この世に生まれてきた自らの使命を見出して、それを飽くまで追求する歓び」とは、言い換えれば、まさに子どもが自分の中の潜在的な可能性の井戸を掘りあてることの歓びであり、人には誰にも本来、世界や生命の根源を知りそれを学ぼうとする意欲が備わっていることを語ったもの

である。この塾訓は、当時の河合塾に来る若い人に向かって呼びかけられたもので教師は登場して来ないが、「自分を掘り下げて使命に生きる」若者に対して、教師が手助けをするということは暗黙の前提になっている。

「予備校文化」なるものが、ある時期になぜあのように成立したかと言えば、六〇年代末の学生運動などさまざまな時代の条件が重なって、その中を生き抜いた教師と生徒の間にこの深い出会いが実現したからである。そうした人間の出会いを欠いた「予備校文化」とは単なるお祭り騒ぎにしかすぎない。そしていま、新自由主義の人間観が席卷する厳しい状況にあっても、この根幹さえあれば、予備校文化なるものは、いずれまた姿を変えて生き延びると思われる。

本冊子の意味は、河合塾と文教研がいまどのような地点に立っているかをあらためて多くの人と確認できることにあるのではないかと思う。この後、河合塾と文教研がどの道を行くにしても、まずは現状に対する深い認識が必要となるからである。

(文教研 加藤万里)

研究会一覽

研究会

映画研究会

カブリ・ジオメトリ研究会

漢文訓読研究会

教育方法研究会

経済研究会

現代史研究会

国語教育の再構築研究会

差別問題研究会

女性論・男性論研究会

初等教育研究会

身体表現教育研究会

生物学セミナー

主宰

石原 開 (現代文)

福島一洋 (数学)

藤堂光順 (漢文)

岡 文子 (現代文)

公文宏和 (研究員)

里中哲彦 (英語)

結城敦司 (現代文)

菅 孝行 (研究員)

吉田理恵 (漢文)

熊崎智子 (理科)

原田伸雄 (研究員)

榊原隆人 (生物)

研究会

世界史研究会

大学基礎準備教育研究会

地域言語研究会

ドストエフスキイ研究会

内藤湖南研究会

二〇世紀国際政治史研究会

日韓文化交流研究会

認知と記号研究会

東アジアの歴史と現代研究会

廣松渉研究会

メディア・カルチャー研究会

主宰

金 貞義 (世界史)

大竹眞一 (数学)

小森清久 (英語)

芦川進一 (研究員)

山田伸吾 (研究員)

加藤正男 (研究員)

新井勝憲 (現代文)

柳原愼也 (英語)

八箇亮仁 (研究員)

森永和英 (小論文)

小林貞弘 (国語)

これまでの合同研究会プログラム

第1回(二〇〇三年)―第18回(二〇二〇年)

第1回(二〇〇三年)

◆各研究会のこれまでの活動報告

(これ以降、「各研究会の活動報告」については特に記さない)

第2回(二〇〇四年)

◆経済研究会、差別問題研究会発表

今井弘道「現代における〈近代の超克〉問題と丸山真男研究

の課題へ向けての一視角」

菅 孝行「9・11以後の世界とは?―拙著の問題意識の射

程をめぐって」(菅孝行)

コメンテーター・公文宏和

第3回(二〇〇五年)

◆内藤湖南研究会、日本近代・思想史研究会発表

渡辺京二「日本のアーリーモダンと近代」

谷川道雄「官民の二元構造と近世・近代―中国民衆の命運

について」

コメンテーター・茅嶋洋一

第4回(二〇〇六年)

◆教養教育研究会発表

丹羽健夫「新しい教養教育とはなにか」

コメンテーター・八木暉雄

第5回(二〇〇七年)

◆身心論研究会発表

木村 敏「自己・こころ・脳」

コメンテーター・牧野剛

第6回(二〇〇八年)

◆内藤湖南研究会発表

谷川道雄「中国民衆はいまどこに立っているか」

コメンテーター・山田伸吾

第7回(二〇〇九年)

各研究会の活動報告のみ

第8回(二〇一〇年)

◆女性論・男性論研究会、経済研究会、ドストエフスキイ研究会

発表表

青木和子「女性論・男性論研究会」の立ち位置」

公文宏和「自由放任、安価な政府そして経済人とアダム・ス

ミス」

芦川進一「地下室」の延長としての予備校」

第9回(二〇一一年)

◆身体表現教育研究会、内藤湖南研究会発表表

原田伸雄「危機に立つ肉體―異和と響き」

山田伸吾「内藤湖南と現代」

第10回（二〇一二年）

◆二〇世紀国際政治史研究会、漢文訓読研究会、教養教育研究会発表

加藤正男「二〇世紀前半の国際政治史の諸問題」

藤堂光順「漢文訓読の歴史と中国の鬼神（きしん）の世界」

丹羽健夫「愛知の寺子屋——教育学部以前・以後」

第11回（二〇一三年）

◆谷川道雄先生追悼

丹羽健夫「谷川先生の思い出」

牧野 剛「谷川先生のこと」

◆差別問題研究会、東アジアの歴史と現代研究会発表

菅 孝行「原発廃絶運動と差別批判のアポリア」

八箇亮仁「民権期における日朝中連携の模索——甲申政変・

大阪事件そして中江兆民」

第12回（二〇一四年）

◆国語教育の再構築研究会、特別発表、日韓文化交流研究会発表

結城敦司「中等教育における「読む力」とはどういうことか」

牧野 剛「新テストについての提案」

新井勝憲「イルム裁判」が照らし出す日本社会の〈現在〉」

第13回（二〇一五年）

◆認知と記号研究会、カブリ・ジオメトリ研究会

柳原慎也「オットー・イエスペルセン『Analytic Syntax』に

ついて」

福島一洋「非ユークリッド幾何学の動的視覚化」

コメンテーター・小林一路

◆特別提言 茅嶋洋一「予備校河合塾の現在と文教研」

第14回（二〇一六年）

研究会活動報告のみ

第15回（二〇一七年）

研究会活動報告のみ

第16回（二〇一八年）

〈テーマ〉「なぜいま〈高大接続改革〉か——新自由主義的教

育改革をめぐる」

菅 孝行「大学入試と教育の荒廃——「試行テスト」記述問

題を手がかりに」

青木和子「臨教審以降の日本の新自由主義教育を考える」

茅嶋洋一「日本における近代公教育の歴史と現在——予備校

河合塾が当面する現況」

第17回（二〇一九年）

◆野家啓一「3・11以後の科学技術と倫理」

第18回（二〇二〇年）

〈テーマ〉「あらためて「教育」とは何か、「予備校文化」とは

何だったか——新型コロナウイルス禍と新自由主義的教育改革のはざま」

青木和子「今回のテーマについて」

2021年合同研究会冊子
河合塾における「予備校文化」とは何だったのか

2022年2月15日 第1刷発行

編集・発行 河合文化教育研究所
〒464-8610 名古屋市千種区今池 2-1-10
TEL (052)735-1706(代) FAX (052)735-4032

印刷・製本 (株)あるむ
